

リアルF G O

nyasu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生することになった主人公（テンプレ）

特典はF G Oをすることだった（リアルで）

迫り来る脅威（主に身内のサーヴァント）

唯一の癒やし（マシユという名の初期サーヴァント）

そして、戦いに巻き込まれていく（他の転生者）

そんな感じでぐだぐだな日常を書いていく作品。

※エタる癖に書きたくなった（衝動）だから不定期更新。

※サーヴァントはシミュレーターで出していく、星5はそうそう出ない（悲しい）

目次

何、召喚は詠唱するのでは無いのか？

1

槍は投げる物なんだよ

11

喰らえ、我が必殺必中の槍

21

アイエエエ！ランサー、ランサーナン

デエエエ！

30

悪魔でサーヴァント（召使い）ですから

40

そんな装備（サーヴァント）で大丈夫か？

49

スピード解決だよ、聖杯ちゃん

58

プライバシー？悪魔に人間の法律が適用

されるか！

69

一度は蹴破ってみたいよな、ドア

79

戦争は戦う前から始まって

88

駆逐してやる！一匹残らず、駆逐してや

る！

97

そのサーヴァントの小説を書くとき当たる

らしい（既に持ってる）

107

呼んでる……安珍様……待っててください

いねえ……

117

私の拳を高めたのは信仰心！主の思し召

しだ！

127

ゲイボルグ、サーヴァントでは、即死ムリ

夏だ！海だ！テコ入れだあ！ | 137
偉い人の話って長くて眠くなる | 147
この中に一人問題児が居ます「誰だ、圧制者か？」お前やあああ！ | 157
俺のバーサーカーは最強なんだ（集中線 | 166
！） | 175
問おう、貴方が私のマスターか？（一度やってみたかった） | 183
ふう……どうやら恥ずかしがり屋なご主人様のようにだ | 192
深く考えると闇が深い | 201
俺の中のアイツが反逆しろって疼きやが

るぜ | 210
キャスト、オフ！仕様です | 220
幕間の物語、読み飛ばしても可 | 229
たぶんこれが一番早いと思います | 247
犯人はマチルダ | 258
ちちう……誰だ貴様、ロイヤルビッチか | 268
！ | 276
見てからリススキル余裕でした。 | 286
アゾット剣には気を付けろ | 286

何、召喚は詠唱するのでは無いのか？

朝、誰かが俺を揺すった。

知らない天井、でも知っている天井を目にする。

昨日までの俺は知っていて、今日からの俺は知らない天井だ。

記憶が蘇った、あるいは憑依したのどちらかが起きた。

こればかりは、実際に体験してみないと説明できない。

「先輩？」

「……マジか。初対面だが、受け入れることが出来た俺は可笑しいのだろうか？」

「……正常では無いですが、私は嬉しいです」

昨日まで、都合良く両親を亡くして家族仲が悪いから遺産を使って一人暮らししていた高校生がいた。

すごく異常だが、テンプレらしい境遇だ。

そんな人物に、悪魔の依頼により転生することを承諾した俺という意識が発生した。

「君について、教えて貰えるか？」

「は、はい！私は、マシユ・キリエライト。クラスはシールドで先輩のデミサーヴァン

トです。私は、先輩の聖杯によって呼び出されました」

「聖杯、なるほどそういう形でか」

俺は悪魔と契約した。

報酬は転生することだ。

転生した先で悪魔に利用されようと、俺の願いは既に叶っている。

消滅するはずだったのだから、文句は無い。

そんな俺が悪魔の依頼によってやることは神への嫌がらせである。

神、人間を転生させ暇を潰す奴らだ。

奴らの楽しみを潰す、それが悪魔の願いで有り、転生者を殺すのが俺の仕事である。

「まずこの世界がなんなのか調べないとな」

巻き込まれる仕様のため、大体すぐに判明するはずだ。

暫く記憶を思い返し、そして明確な答えを見つけた。

「駒王市、そうか聖杯は神器という訳か」

「先輩、取りあえずご飯にしませんか？」

「ああ、うん、そうだな」

困惑気味のマシユの提案に乗って、朝食を取ることにした。

こっちはです、と嬉しそうな後ろ姿にほっこりである。

りえりーもいいが、俺はやっぱり種田派である。

マシユの声を種田にした悪魔グツジョブだ。

「転生してもF.G.O.したいと言ったが、リアルに出てくるとは思わなかった」
それなりに戦えるようにする、と悪魔が言っていたので特典は完全趣味に走っていた。

それこそ、戦闘と関係ないじゃ無いかというレベルだ。

アイマスとかニセコイとかラブコメ世界に戦闘力はいらなからな。

そういう世界で楽しく暮らすためだったのだが、リアルでやれと申すか。

おい、俺のアカウント何処行った！データ消すとか悪魔か！

「どうですか、あり合わせで作ってみました。元気ないですね、先輩？」

「すつごく、和食です。ああ、味噌汁が心に染み渡るんじゃあ〜」

眼鏡をクイっとしながら、ネットで見ましたとドヤ顔するマシユ。

かわいい、もしこれで俺に好意を寄せてくれてるならすごく嬉しい。

コスプレかよって思ったけど、二次元じゃなくてもいい気がしてきた。

取りあえず、髪の毛の色で違和感を感じないのが不思議である。

朝食は、味噌汁にご飯に納豆、お浸しと塩鮭である。

女子力高いっすねマシユさん。

俺はちよつと元気が出た。

「聖杯……おお、出た」

「それが先輩の神器ですか」

試しに出ろつて念じたら手の中にいつの間にか用意された。

聖杯転臨でお世話になった聖杯である。

すごい、グラス程度の大きさなのに黄金だから重いぞ。

しかも、謎の光が常に発生している。

「うん？こ、これは……」

「トゲトゲで虹色ですね」

「聖晶石じゃないか、しかも六つ。つまり、リアルガチャをしると」

運営（悪魔）の配慮に、オラワクワツクすつぞ。

朝食を食べようと思ってたのに、そんなことしてる場合じゃ——。

「食べないんですか？」

「……頂きます」

後輩には勝てなかったよ。

食後、さつそく石を使って召喚である。

カッチーン、資源は無駄にはしない。

「どうやって使うんだろう」

「割るんでしようか？」

「よし、思い切り叩きつけてみよう」

満たせ満たせ満たせ、とか詠唱しないが召喚は出来るはず。

さあ割るぞ、という段階で待ったが入った。

「どうしたマシユ」

「今、準備します」

瞬間、マシユが謎の発光をした。

へ、変身だ?!

そこには、戦闘態勢のマシユ、つまりエロい装備とデカイ盾のマシユがいたのだ。

「どうぞ」

「なるほど、盾にぶつけて割るんだな」

円卓が材料だつけ、相性のいいサーヴァントが呼べるといいな。

ランスロットが出たら、お父さんと呼ぶとしよう。

「行きますー！」

六つ全部思い切り叩きつけた。

すると、何と盾の上に円環が三つ現れる。

そして、中心にカードが現れた。

アレは、バーサーカー！しかし、色は金では無いか。

「バーサーカー、スパルタクス。さっそくで悪いが、君は压制者かな？」

「先輩、マツチヨです」

「压制は良くないよな、うん」

最初のサーバントは、バーサーカーであった。

最初のうちはお世話になるスパルタクスである。

一応会話は出来る、すごいバーサーカーだ。

あまりのうれしさに、俺は立ち眩みでも起こしたのかフラツとする。

「魔力供給の影響でしようか」

「まりよくきょうきゆう？」

「なんとという压制、それは良くない！」

バーサーカーはそう言つて薄くなつていく。

おつ、なんか楽になつてきた。

もしかして霊体化つて奴だろうか。

「次、来ます！」

「さあ、二枚目！金……えっ？」

二人でワクワクしていたら、二枚目もバーサーカーであった。

そ、そういうのもあるよね。

「我こそはタマモナインの一角、野生の狐タマモキャット！ご主人、よろしくな」

「お、おう」

「どうしたご主人、猫缶食べたいか？」

「み、皆さん喋られる方ですし」

やめろマシユ、そのフォローは俺に効く。

まあ、ゲームのレア度と現実の強さは関係ない。

全てはマスターの運用次第、でも星5オナシヤス。

「三枚目！」

「キヤスターです！」

「おおつと、ここでオリジナルが来るのか、来ないのか、来るのか、来ないのかーい！」

色は金では無いのでその反応は分かるが、キレが凄いな芸人かよ。

「あああああ！どうやら大当たりのようですよマスター？悪魔メフィストフェレス、ま

かり越してごさいますー！」

「ハズレだよ！お前はキャラ的に積極的に騒動起こすからハズレだよ！」

「忠実に仕えるという点で、わたくしの右に出る者はおりません」

三体目はメフィストフェレス、俺の感想はテラ小安である。

「くっ、足が」

「大丈夫ですか先輩」

「魔力供給を、強いられてるんだ！」

マシユは大丈夫なのはコスト0だからだろうか。

魔力供給しなくても平気的な感じか。

後半戦、残る割った石は三つ。

「ランサーだ、ランサーが来るぞ！」

「この流れ、きつとブーメランにされるランサーです！」

「よう！ サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。まっ気楽にやろうや、マス

ター」

「キター！」

四体目、それは兄貴だった。

やったぜ、さわやかなイケメン、そして初代ランサー。

ランサーって言ったらコイツのランサー、プロトタイプは知りません。

「お、おう。えらい喜びようだな」

「ご主人もワタシも嬉しい、猫缶雨あられにタママも嬉しい、キヤットも嬉しいぞ！」
「イヤツホオオオ！」

「ああくなんか分かったわ」

ありがとうランサー、常識人でありがとう。

さあ、五体目である。

次は、ライダーだ。

「僕はアレキサンダー。アレクサンドロス3世でもいいよ——勿論、他の名前でもね」

「シヨタ粹か、征服王」

「面白いね。こども、君も」

最後は何だ、そろそろガチャの常連じゃなくてレアなの欲しいです。

運営（悪魔）、オラあくしろよ。

「召喚により、参上致しました。どうか、このパラケルススと……友達になりましょう」

「よろしく。まともなキヤスターだわ」

何というか、トラブルメーカー来ちゃった。

魔術師に真の意味での友人はいないとか言う黒幕粹である。

ウチのキヤスター、ヤバいのしかないな。

「はあ……」

「満足いきませんでしたか？」

「満足はしている、しかし同時に将来に不安を感じている」

「でも、家族が増えることは良いことです。先輩、これからいっぱい家族を私と一緒に増やしていきたいましようね！」

……下ネタでしようか？

マシユの天然発言に、俺は自分が薄汚い存在に感じた。

「あれれ、マスター前屈みでどうしましたあ？おっ、おっ？」

「うるさい、霊体化しろよ！お前以外、みんな霊体化してくれてるだろ！」
最後にメフィストフェレスに煽られるのだった。

槍は投げる物なんだよ

学校であった。

何故、過去形なのかと言えば休んだからである。

遡ること数時間前、よおーしマスター頑張っちゃうぞと顔合わせに全員を現界させてみた。

「ぐへえええ!?!」

「マ、マスター!?!」

俺は意識を失った。

ああ、マシユ……その状態だとマスターって呼ぶんだね。

「うう……ここは」

「目が覚めましたかマスター?」

「パラケル……スス?」

「はい、貴方の友達でキャスターな私ですよ」

やけに友達を強調しますね、やーいボツチ。

俺の横にはマシユとパラケルスがいた。

一瞬、病院かと思っちゃったよ白衣みたいで。

「パラケルススさん、先輩は大丈夫なんでしょうか」

「一時的な負荷に耐えきれなかったのでしょうか。一度に出そうとした結果ですね」

「大丈夫、ということでしょうか？」

小首を傾げるマシユ、ああかわいい。

「むっ、可笑しい。異常は無いはずだが、体温と心拍数が上がっている」

「大丈夫なんですよね！ねっ！」

「命に別状はないはずだが、なぜ……」

魔術師には人の心が分からない、お前は一生分からないのだ。

そんなことを思っていたら、目に激痛が走った。

「いったあああああ!!」

「目つぶし!?御乱心ですかあ!」

「マスターの視線がイラツと来たので」

マシユに盾で殴られる前に消えていくパラケルスス、おのれパラケルスス。

パスでも繋がっていて俺の内心が伝わったのか？

「大丈夫ですか先輩？」

「うん、つていうか夕方!」

「一応、どういったことが起きたか説明を聞きます?」

俺は軽く頷き何が起きたか説明を聞くことにした。

まず魔術回路というものについて、魔術師が体内に持つ擬似神経について知らないといけない。

生命力を魔力に変換し大魔術式に繋がる役割を持っている。

その大魔術式というのは、魔術の系統ごとにある基盤でルールである。

つまりは法則、どんな魔術を成立させるかみたいなのが方向性。

空の境界で説明してたけど、アストロロジー、アルケミー、カバラ、神仙道、ルーンとか。

俺の場合は魔術ではないが、まず聖杯を持ってサーヴァントを呼び出しているらしい。

そして、契約できるようにしているのはマシユの存在、というか円卓を材料にした盾が働いているそう。

じゃあ俺は何をしているのかというと、魔力供給だけである。

この魔力供給は厄介な物で、呼び出すときにMPを消費すると考えてくれれば良い。

聖杯は紹介、マシユの盾は手続き、給料を払うのは俺と考えるとくれれば分かり易いだろう。

一斉に出てくると、一気に出費がでて破産するって訳だ。

「つまり、一人ずつ出せばいいのか？」

「はい、マスターの回復量が追いついてから召喚するのがベストみたいです。パラケルスさんが言うには実力によってはマナを扱えて今後増えるかと」

「レベルアップしろってことか」

それにしても夕方である。

一日終わった、学校終わったって訳だった。

「それより晩ご飯、どうしましょう？」

「どういうこと」

「皆さんが食べてしまっ……」

圧制、キャット、イヒヒヒ、じゃんじゃん喰うぞ、……………、冷蔵庫は征服した。

サーヴァント達がそんな感じで食べていたのを想像出来てしまった。

「どこか食べに行こっか」

「はい！」

今夜は外食決定です。

二人で外に出るとマシユがソワソワし始めた。

おやおや、緊張してるのかな。

「姿は見えませんが、皆さんの気配が」

「霊体化して付いてきてるのかよ！」

「こんなのデートじゃないよ、はじめてのおつかいだよ！」

「まあ、気にしなければ良いだけだ。」

「マシユはサーヴァントだからなんだろうな。」

「すみません先輩、私が敏感なばかりに」

「ああうん、気配ね！気配に敏感ね！」

「うん？」

「やめろマシユ、お前の発言は俺には効く。」

「恐ろしいぜ、デンジャラスビースト！」

「普通にファミレスに行つて食事しました。」

「一回、食べ放題に連れてつてやるかな。」

「イツら無尽蔵だし、魔力供給食事でも出来るしな。」

「おいしかったですね」

「そうだな」

「ドリンクバー、初めて使いました！欲しいです」

「家庭用は、無理なんじゃないかなあ」

「そうですか、残念です」

しよぼーんとするマシユ、そっかそうだよな。

こんな大きさでも中身は子供みたいなもんだもんなあ。

子供か……。

「わわっ、何ですか先輩」

「子供って頭撫でられるの好きかなって」

「子供扱いしないで下さい、これでも肉体年齢は高校生程度ですよ」

「女子の扱いとかわからん」

「するなら、二人きりの時にして下さい」

ヒューヒューと後ろから聞こえたが、後でランサーは絞めることにする。

昭和かお前ら、令呪も辞さないからな！

そんなこんなで街を歩いていると、ピキツと頭に痛みが走った。

「つつつ……何だ、静電気みたいな感じが」

「おや、おやおやあ、これは楽しい楽しい展開ですなあ」

「急に出てくんなよ、メフィスト」

俺とマシユの間という、微妙な位置にメフィストフェレスが現れる。

もうちよつと別の位置があっただろ、狙っただろお前。

「なくにか面白いにおいがしますよ〜」

「絶対ろくでもない事だ、行かない」

「それもそれで良いですねえ……ですが、他の者はどうでしょう？」

えっ、と俺が言う前に四つの影が俺を通り過ぎていく。

「一番槍はいただきだぜ！」

「先に征服するのは僕です！」

「散歩か、散歩ならキャットが一番オンリーワン、ワンダフルだニャンなのだぞ」

「行きたくないだと、つまり圧制だな！喜べ、愛すべき反逆よ！」

ケルト（好戦的）、シヨタ（負けず嫌い）、猫（動いてる物があったから）、マツチヨ（反

抗期）。

なんてこった、みんな言うこと聞かないぞ。

焚付けたのはお前か、お前なんだな。

「人払いの結界、マスターに危害が無いように指示しました」

「おーまーえーかー！黒幕はお前だったのか！」

裏切ったなパラケルスス！

ハイスクールD×Dの世界で結界なんて厄介ごとじゃないか。

「い、いけませんでしたか？」

「何で心底驚いてるんだよ！素で氣遣いとかびつくりだよ」

悪気がない分、質が悪いつたらありやしない。

はあ、もう仕方ないから行くしか無いか。

諦めて俺はみんなを追う。

「乗り気ではありませんが、先輩行きましょう」

「戦闘態勢でノリノリじゃ無いですかやだー」

マシユ、その格好に説得力はないですよ。

急いで追いついた場所は、公園だった。

そこで何やら四人組はジャンケンしていた。

「埒があかねえ、俺はチョコキを出すぜ。パーは出さないことだ」

「何だと、それは圧制だ。反逆してやる！」

「こんな所にツナ缶がある。あつと、手が滑った」

「ニャアー!?!」

何してんの、もう一度言う何してんの？

なんかあの手この手で実質二人の戦いになっているけど、ジャンケンしている理由を教えて下さい。

誰が相手するか、ドラゴンボールみたいな展開なの？馬鹿なの？

「よっし、俺の勝ちだ！」

「コレで勝ったと思わないことですね」

ニカツと笑顔を浮かべるランサー、その後ろでカップルの様子が変だった。

一瞬の事だったが、彼女の背中にバサツと翼が生えたと思つたら彼氏が何か光に貫かれて死んだ。

ち、痴話喧嘩かな？

「や、やべーよ！学生が死んだ!?!」

「「この人でなし」」

「なんでそこだけ息ピツタリなの!?!」

カツと此方に顔を向ける彼女さん、目つき怖つ、兄貴お願いします。

「まさか、こんな所に人がいるなんてね」

「テメエ、人間じゃねえな。ハーピーイかなんかか」

「下等生物が、挑発のつもりかしら？」

ピキピキと顔が歪む彼女さん。

「んじゃまあ、ぶちかますかねえ！」

そんな彼女さんに、ランサーが槍をぶん投げるところから戦闘は始まった。

投げちやつたよ!?

喰らえ、我が必殺必中の槍

「なんのつもりかしら人間、この程度」

そう言つて、彼女さんは飛んで回避する。

ああ、ゲイボルグは当たらない。

「俺の攻撃は終わりじゃ無いぜ」

「なん……だど!？」

「何を言つて……ゴフツ!？」

口から血を流し、困惑する彼女さん。

ドクドクと胸から血が噴き出す。

肺にまで到達した血が、口から零れたのだろう。

「確かに、私は避けたはず……」

「心臓を抉られて、なお生きてるとはしぶとい奴だ」

おまいう、とツツコミを入れながら俺は考察する。

避けられた、だが心臓は抉られている。

つまりどういふことか、それは恐らく因果逆転現象だろう。

投げる、当たる、心臓が抉れた。

ではなくて、心臓が抉れた、何故なら投げたから、つまり投げれば抉れる。と、こんな風にゲイボルグの因果を操作したのだろう。

一種の呪い、投げれば相手は死ぬである。

「開幕宝具、ブツパとか、兄貴やべえっすわ」

「それより坊主、身体の方は大丈夫か？」

「えっ？ぐへえええ！」

聞き返すと同時に、俺の身体が前のめりに倒れる。

い、痛い痛い！意識あるんですけど！

「ああ、やつぱり魔力の使いすぎか」

「お、おのれ……：自害させてやる」

「や、やめろよお！令呪あんだから、冗談でもやめろよ！」

か、身体が動かない。

これはフリーズを使ったクズマさんのような感じなんだろうか。

「人間、風情が……」

「人外風情が、失せな！」

いつの間にか手元に戻っていた槍でランサーが彼女さんの首を切断する。

ああ、グロイよあつちも地面に倒れてるから目と目が合ってるんですけど。

その時、不思議な事が起こった。

なんと、彼女さんの身体が消えていきそして黒い羽になったのだ。

「ええええええ!!」

「マスター、何かに使えるかもしれません」

「ほおほお、素材ゲットですなあ」

キヤスター組が嬉々としてその羽を回収する。

そんなゲームじゃないんだから、素材とか出るわけ無いだろ。

あれ……じゃあ種火も素材も手に入らないからレベル上げからスキル上げ霊基再臨も出来ないの!?

じゃあガチャしか出来ないって事かよ!ストーリーとガチャだけでマラソン出来ないって!

「マシユ、ごめんな。俺はお前に種付け出来ない」

「ツ!!先輩最低です!」

「うん?……あつ、違うそういう意味じゃ無い」

種付け、それは種火をたくさん喰わせること。

決して卑猥な意味ではない、でも羞恥に染まったマシユも可愛いです。

下ネタダメ系女子って、あざといけどいいね！

「そこまでよー！」

「誰だア！」

ほのぼのしていた空間に何者かが現れる。

同時に、兄貴が凄いい勢いで戦闘態勢に入った。

怖いよ、士郎が逃げ出す訳だよ。

「ヒツ、あ、貴方達！ここ、ここがグレモリーの領地って、分かってて」

「先輩大変です、クーフリーンさんが女の子を泣かせてます」

「ランサーが泣かした、この人でなし」

「その体勢で元気だな、おうおう」

「や、やめろー！蹴るんじゃ無ーい」

ランサーの抗議を身に受けながら、今更ながらこれが原作イベントだと気付いた。

あれだ、主人公が殺されちゃう奴だ。

ってことはアレは墮天使でレイナレって奴なんだろう。

すまない、現実だとコスプレにしか見えないしピンと来なかった。

「あー、取りあえずマシユさんや。帰りましょうか」

「はい、了解です」

「女の子に片手で持ち上げられる、私は悲しいポロロン」

ウチの奴らは好戦的だからトラブルになる前に撤退である。

転生者を殺さないと行けないけど、俺ってば基本的に争わないで良いならそれでいいから。

悪魔も殺せと言ったけど、寿命で殺しても大丈夫だろう。

まあ、たぶん無理ってお言葉も頂いてるけどな。

「ま、待ちなさい！ 貴方達には事情を聞かせて貰うわ」

「おいおい、どうするよマスター」

「無視して帰るぞ、はい解散」

了解、と槍を担ぎながらやれやれという仕草をするランサー。

主人に絶対服従、ケルトの兵士って扱いやすいつてわかんだね。

「マスター、それは命令か？」

「お願いです。弱者の懇願、反逆はノー」

「懇願なら仕方ない、反逆ううう」

主人に絶対反抗、スパルタの兵士って扱いにくいってわかんかね。えっ、ローマ出身？ 知らなかったなあ。

サーヴァントの速度に付いていけるわけも無く、そそくさと俺たちは撤退した。

マシユは、なんていうか固かったよ。

マシユのマシユマロは鎧のせいで固かったんだよ。

私は悲しい、ポロロン。

「マスター、通販で欲しいものがあるのですが」

「パラケルススの口から通販って言葉が出てびっくりだよ」

「素材を加工して礼装でも作りたいですからね。密林は素晴らしい」

適応力高いな、お前。

まあ許可を出すんだがな。

帰宅してからは、みんな自由に過ごした。

キヤスター二人が部屋に籠もって何やらやってるし、シヨタとマツチヨは庭で筋トレである。

兄貴はタマモとテレビゲーム、適応力本当に高いなあ。

「征服、征服か！まさに圧制、反逆である！」

「線から出たら負けですよ、はっけよーい！」

「おい、汚えぞ！後ろから攻撃すんな」

「赤い甲羅は自動攻撃、マタタビダツシユの猫が如しなのだあ〜」

「マスターご飯が出来ましたよ。二階の部屋が騒がしいですね」

「キャスター達には関わりたくない、爆発音とか知らない」

ちなみに、晩ご飯は鍋だった。

タマモ、ネギでお腹壊したね。猫だったんだ、お前。

「あ、熱い！だが屈しぬ、これも愛か！」

「やるなって言ってるのにやりたがるよね、あつその肉は僕のですよ！」

「悪いな坊主、弱肉強食ってやつだ！つて、俺の皿を取るんじやねえ！」

「残念ですが、この皿は僕が征服しました」

「お行儀が悪いですよ、二人とも」

騒がしい食事だったが、悪くなかった。

「肉、肉ううう！だがしかし、トイレは友達、タマモはトイレから出られない」

「分かったから、ドア閉めろ。ちゃんと残しておくから、なっ」

「おのれネギめ裏切ったか。この恨みインガオホーにするのである」

「ぐおおおお！辛い、辛いがこれもまた愛。もつとだ、いいぞお！肉、汝を抱擁せん！」

「おいエール飲もうぜ！違った、ビールって奴だ！」

「あつ、僕も僕も！お母さん、僕も！」

「未成年はダメですよ。あと、私はお母さんじゃ無いです」

なおキャスター達は部屋に籠もって何かしていた。

「ご飯すら食べないで何かするとか、絶対ろくでもない事だよ。」

「マスターマスター、大変ですぞお！」

「やつぱり、今度は何したんだよメフィスト！」

「じゃーん、プレゼントです」

俺は急に降りてきて騒いでいたメフィストの出した物に絶句した。

それはリボン巻かれた中学生の女の子だったからだ。

「……にゃあ」

「……………」

「契約終了です。報酬として……ご飯食べたいです」

「……あつ、どうぞ」

頂きます、そう言つて女の子は席に座つて食事を開始する。

うん、取りあえずお前正座しよっか。

「あれれ嬉しくありませんでしたか。ウヒヒヒヒ」

「犯罪なんざ起こしやがって」

「おやおやおや、敵対ですか？わたくし平和主義なのですがねえ」

「野郎ブツ殺しやああああ！」

殴りかかって、秒殺でKOした。

え、英霊には勝てなかったよ……うう。

「おい弱すぎるだろ！ガハハハ！」

「ビール、ビール、クソ！何故僕は子供なのか」

「メフィストさん、ちゃんと訳を説明して下さいね。あとこれ、取り分けておきましたから」

スルーか、俺が負けたことはスルーか。

我が家の女神マシユすらスルーである。

「マスター、話せば長くなるのですがチラシに魔力を込めたらあら不思議、召喚されたのです」

「なるほど把握」

「……マシユ殿、わたくし野菜は——」

「ダメですよ」

「……………はい」

笑顔のマシユにメフィストが従った事で俺は思った。
マシユってスゲーってな。

アイエエエ!ランサー、ランサーナンデエエエ!

翌日、学校である。

帰り際、明日覚悟して下さいと意味深な言葉を残した少女をどこかで見たようなと思
いながら登校した。

久し振りの気もするし、初々しいどこか不思議な気持ちで一歩進む。

「むっ」

すると、踏み込んだ瞬間に違和感を感じた。

それは結界らしき物のようだ。

「凜ちゃんもこんな感じだったのだろうか」

自分で有り他人の記憶を頼りに教室にやって来る。

しかし、何というか今までの俺はモブらしい平均的な性格に成績だった。

なんだろう、逆にここまで普通って凄い。

何かしら変なところとか目立つところがあるのが人間だって言うのにな。

「待ちなさいーい!」

「逃げろ!」

廊下をものすごい勢いで三人組が駆けていく。

その後を追う女子、駒王の風物詩である。

ギャグ漫画とかじゃないので、普通に覗きは犯罪なんだが注意だけで済むんだからビックリな風物詩である。

「そつとしておこう」

主人公らしく、関わらないで置くのが一番である。

そして、席に着いて準備をしていると誰かが肩を叩いた。

「……………」

「何か反応して下さい」

数秒、フリーズした俺はその言葉で正気を取り戻す。

いや、まさか昨日の中学生が目の前にいるとは思わないじゃ無いか。

「まさか同じ一年生だったとは」

「私は気付いてました。だから、自宅にチラシを入れといたんです」

「へえ」

聞いてもないのに、部長が興味を持つているとか、その不思議な力について知りたくないかとか言ってくる。

別にいいです、知ってますんですけど思うのだがこれが世に言うフラグって奴なんだろ

う。

「分かりましたか」

「聞いてなかった」

「はあ……放課後、オカルト研究部に行きますよ」

そう言つて離れていく少女、そういえば名前を聞いていなかった。

たしか、一年は白音だか小猫つて眷属がいたな。

たぶん小猫ちゃんなんだろう。

「おい、小猫ちゃん何話してたんだ」

「ああ、やっぱり小猫ちゃんと言うのか」

タイミング良く友人が話し掛けてきて、名前が分かった。

ヒロインだし可愛いから人気だもんね。

このノリ男子高校生っぽいなあなんて思うのだった。

放課後、普通に帰ろうとしたら連行された。

ようじよつよい、とはこの事か。

そういえば悪魔の駒で強化されてるんだったね。

二日連続女子に片手で連行されるとは、私は悲しいポロロン。

「もしもし」

『はい、どうしました先輩』

「ちよつと呼び出しで遅れそう。あと、兄貴呼んでくれる？」

『ランサーさんですか？昨日のように敵でしょうか？』

「一応、こつちに来てくれたら助かる。一番早そうだし頼んどいて」

運ばれながら、家の方に電話した。

いや、原作とかうろ覚えだし眷属にならないなら死ねとかありそうじゃん。

絶対勧誘するはずだしな。

「運ばれながら何してるんですか？歩かせますよ」

「兄貴が免許持つてるから、迎えに来て貰おうと思つて。遅くなるんでしょ？」

「そういうことなら、ただすぐに帰して貰えると思いますよ」

えく本当でござるかあ？

だったら良いんですけどね、それにしても降ろしてくれませんか。

結局諦めて自分から行くのだった。

旧校舎、そこはボロすぎて行きたくない場所。

正確にはそう思わされていた場所である。

今は違うけど、前の俺なら寄ろうとすら思わなかっただろうな。

「ここです」

「ちなみに活動って何してるの?」

「オカルトを研究してます」

「そのまんまなんだね」

奉仕部や隣人部並みに意味が分からない活動内容である。

さて、恐らく転生者がいるならこのイベントにいるはずだがいなかった場合は敵側にいるのだろうか。

例えば渦の団とか、悪魔とか堕天使になつてるとか。

教会の線は、エクソシストになりたくなさそうだし薄そうだ。

部屋の中に入ると、ソファーやティーセットなど結構内装は綺麗だった。

ただ、ぶち壊すように変な魔法陣とかあるけどな。

「ふつかふか、ふつかふかだぞ小猫ちゃん」

「座っていいなんて言つてないです」

「小猫ちゃん、お茶とかないの?」

「凶々しいですね」

知らんし、というか他の人達はいないのだろうか。

そう思っていたらドアが開いて誰かが入ってきた。

「あら？もう来ていたの」

「どうも」

「ゆつくりして行ってね」

そう言つて入ってきた人物、赤毛でピンと来た。

グレモリーってこの人だつてね。

ただ、俺とは昨日会つてるはずなのにこの対応である。

普通、警戒とかしないのだろうか。

「あらあら、お茶でも出しましょうかね」

「ありがとうございます、えっと」

「姫島朱乃です」

小猫ちゃんからご存じないのですかみたいなの視線が来たけど、知ってる知ってる。

ただ、文章上だったから見たこと無かつただけである。

グラビアアイドルみたいだな、清楚系で売ってる。

そして、何故かシャワーを浴びるグレモリー先輩。

痴女なんだろうか、学校でシャワーを浴びるとか意味が分からないよ。

「小猫ちゃん小猫ちゃん」

「何ですか?」

「ここって他に部活あるの?」

「無いですよ」

「なのに水道と電気は来てるの? えっ、なんで」

「何ででしょうねえ……」

答えは悪魔が運営する学校だから、クソ権力者め!

ランサーでは無くスパルタスの方が良かったかもしれない。

「つていうかさ、今まで話したことも無かったのに何で呼ばれたのよ」

「そうですね、こういう人だとは思っていませんでした」

「ありがとう」

「褒めた意味で言ったわけじゃ無いです」

知ってた、皮肉だよ。

そんな会話を繰り返してたら、ドアが開いてまた誰か来た。

あ、あれは風物詩の兵藤先輩。

つまり主人公じゃ無いかあ!

「こんにちは!」

「部長に言われたとおり、連れてきました」

「あれ、呼ばれたのは俺だけじゃ無い？」

どうもと頭を下げると、相手は大分困惑した様子だった。

おや、おやおや、メフィストじゃないけどそんな言葉を言わずにはいられない。

この状況に違和感を感じる、それってつまり一人だと思ってたんだろ。

もしかして、コイツが転生者なのかな？

「木場、俺の他に人がいるのは何でなんだ？」

「ああ、彼も君と似たような物だね。部長が説明してくれるよ」

たぶんそういう事じゃ無いんだろうが、可能性がグンと上がった。

シャワーから出てきた先輩は、着替えてから定位置についた。

この後の事を知ってるから、練習とかしたのかなと見ている。

「これで全員揃ったわね。それじゃあ、貴方達」

呼びかけと同時に、バサツと翼が飛び出る。

「私達、オカルト研究部はあなたを歓迎するわ……悪魔としてね！」

そして、渾身のドヤ顔である。

ポカーンとする兵藤先輩、俺は横で拍手した。

「お、驚かないのね？」

「驚きましたよ。凄いコスプレですね」

「えっ?」

いや何言ってるんのお前と言った顔をされるが、こちとら横に警戒対象がいるのでアホなこと言うしか無い。

ここで理解力なんて示したら、俺と同じようにこつちを転生者じゃないかって思うはずだからだ。

「コスプレじゃ無いわよ!本物よ!」

「そうですね」

「信じてないでしょ!もう、触ってみて」

ぐいっつと翼を出してきたので思いつきり引つ張つてみた。

「痛たたたた!」

「ほ、本物っぽい!」

「痛がってるから!本物だから!」

「いやだな、先輩そんな演技しなくても」

そんな感じで時間稼ぎしていると、耳元で待たせたなと声が聞こえた。

ふう、ようやくか。

「まあいいわ、悪魔かどうかはこの後の話で分かる事よ。いい、貴方達には神セイクリッド・ギア器と呼ばれる物が宿っているわ」

「知ってます知ってます、格ゲーですよ。ああ、よくやったな」
「全然違うわよ。というか、貴方の知り合いは覚醒している筈よ」

おお、なるほど。

ランサーは神器じゃ無くて、所持者として予想しているのか。

今の発言で兵藤先輩が俺の事をスゲー見てきてるけど、やっぱり転生者なのだろうか。

よし、ダメ押しにしてみるか。

「それってコレの事ですか？」

そう言いながら念じて聖杯を呼び出す、同時に現界せよと命令することでランサーを呼び出した。

「おう、マスターの命令により現界したランサーだ、よろしくな嬢ちゃん達」

「えっ!？」

ガタツと立ち上がった、兵藤先輩。

いや、主人公に乗り移った転生者だと俺はソイツを見て確信した。

悪魔でサーヴァント（召使い）ですから

その気配に、身を震わせ戦闘態勢に入ることが出来たのは木場祐斗、只一人であった。なんだこれは、その感情に支配されたことがありありと分かる。

常在戦場、戦いが始まった瞬間に殺せる。

その男にはやると言ったらやると言う覚悟が垣間見えた。

……みたいなナレーションが聞こえたりするのかな？

「ああん？」

ランサーが睨みを利かせる。

ビクツとした木場先輩が後ろに下がる。

ううむ、他の奴らはなんとも思っていない。

俺だっと思ってない、兄貴って凄いの？それとも、木場がビビりなの？

「おい、レア度で考えてるようだが現実の性能は違うからな」

「あー、なるほど」

固まっていたグレモリー先輩が、あなた何者とランサーに問いかける。

「俺を知らねえとは、これだから極東の奴らは」

「兄貴はクーフリーン、本物の英雄だよ」

えっ、という驚きの声が上がった。

そして、ボソボソと英雄の魂を受け継いで生まれてくる者もいるがまさか、なんて言葉が聞こえた。

ああ、確かいたなそういうの。

「ところで、貴方は聖杯によって呼び出されたという解釈で良いのかしら？ マスターって呼んでいたし」

「おう、まあな」

「そう。じゃあ……そう言えば何て名前かしら？」

「フランシスコ・ザビ……!？」

「ちよつと！何を言わせるのみたいな目でみないで！それより私の眷属にならない？ 寿命も延びるし、魔力や筋力だって上がるわ。貴方にとって良い条件だと思うの」

ほらやつぱりと、勧誘されたことにやれやれといった態度を取る。

横で転生者が、部長なんて叫んでるけどお前まだ部員じゃないだろ。

さて、この余裕の正体が何なのか俺は分かった。

慢心だ、慢心である。

自分の事を強いと思っているのだコイツ。

悪魔に人間が逆らうわけが無い、だから断るはずが無い。

断ったらどうなるか、原作では分からなかったことである。

だから、俺は断らないことがベストだろう。

「だが断る！」

「なっ……!!？」

「この俺が最も好きな事のひとつは、自分で強いと思ってるやつに「NO」と断ってやる事だ！」

スピードワゴンはクールに去るぜ。

こんな悪魔の巣窟にいられるか！

「待ちなさい！」

「動くな！それ以上動いたら、俺も動かなくちゃいけない。この意味が分かるな？」

「ッ!？」

ランサーが背後で見張っているのを確認して、俺は外に出る。

さーて、勧誘を断ったし今日の晩ご飯が楽しみである。

数日後のある日の晩、パラケルススが舌打ちした。

「おい、びつくりだよ。いきなりどうした」

「最近、悪魔が鬱陶しくて」

「メフェイスが？」

「いいえ、違うのです」

「そうかいそうかい、ならば別の悪魔という訳か。

グレモリーの奴ら、監視でもしている」と。

大方、うちの結界に四苦八苦しているのだろう。

「そんな些事はどうでもいい問題は、これだ」

「聖晶石のことですね」

それはいつ現れたのか分からなかったが、聖杯を出した時に杯の中に入っていた石についてだ。

「どういう原理で、どうして石が出たのか。」

もしその原理が分かればたたくさんガチャを回せるんじゃないかと思ったのだ。

「聖杯を調べた結果、マスターの魔力を蓄積し結晶化した事が分かりました。つまりマスターが作り出したようです」

「増やせるか？」

「無理ですね。一定量ずつしか吸収しないので一つにつき一月は掛かります。駄洒落じゃ無いですよ？」

「放置でいいけど一月掛かるログインボーナスか。これが現実の弊害か」

「えっ、ツツコミは……」

しねえーよ。

そんなことより礼装どうした、礼装はよはよ。

まあそんなパラケルススは置いといて、早速石を砕くことにした。

「よし、マシユ行くぞ」

「はい頑張りましょう」

マシユの盾の上で光のリングが一つ出来上がる。

さあ、円環の理に導かれて……あれ、一つ？

「どういうことだっただよ……」

「先輩、剣が！剣が出てきました」

「これはアゾット剣のようですね……おや？」

パラケルススが、うそ私のアゾット剣おかしすぎっ！みたいな驚愕の顔をする。

俺にはボワツと光ってるだけの剣にしか見えないけど、概念礼装なんだろう。

ガチャで出たし、アゾット剣なんてあったかな……あつ！

「マスター、これから尋常じゃ無い魔力を感じるのですが」

「宝石剣ゼルレッチだ。無限に魔力を平行世界から供給する、ガチャでたまに出てくる

アレ」

簡単に出了けど、魔術師からしたらふざけると言いたくなるような代物だ。

ゲームだとそこそこでも現実で考えたらヤバイやん！遠坂さんちが血眼で解析させてるって言うてくる代物だわ！

「所持するだけで四分の一程ですが私の魔力量が増えている気がします。あと、魔力供給量も……」

「無限に魔力を得られるんじゃないのか？」

「私ですら扱い難いことから、魔法の一種なのでは……」

「それを使えば根源でも目指せるんじゃないか？」

「くつ、マスターその話は私に効く」

ああ、そうだった。

フラグメンツで裏切った記憶がFGOだとあるんだっけ、何の事かマシユは分かっているが取りあえず裏切ったことを後悔しているんだよと後で教えてあげよう。

そういうえば、概念礼装で思い出したけどあの墮天使の羽はどうしたんだ？

「そういうえば、概念礼装は作ったのか？」

「微妙な出来ですが、使い捨て程度には」

そう言うってパラケルススが赤い石を手を持って渡してきた。

なんだこのルビーみたいな赤い石は……俺は覗き込むように色々な角度から観察する。

微妙に弾力があるんだよな、本当なんだろう。

「これ、何？」

「賢者の石です」

「えっ？賢者の……石？」

「魂一つ分では使い捨てが精々ですがね」

「……そうだった、道具作成スキルEXだった」

前に兄貴にも言われたが、レア度と英霊のすごさは比例しないだった。

これが賢者の石か、錬金術師の兄弟が探していた物と製造方法は一緒か。

「マスター、そんなのより一緒にやるニヤ！」

「もつとだ！いいぞお！汝を抱擁せん！」

「スパルタクスは自分から当るか掴みしからないから弱いんですよねえ、喰らえ！」

「ボム兵とか汚えぞメフィスト！喰らいやがれモンスターボール！」

お前ら楽しそうだな、とゲームする彼らをジト目で見る。

えっ、お金ですか？俺のバイト代ですよ。

出費がすごい、畜生はやく黄金律の持つてる奴を呼ばなきや！

「テメエら、誰が買ったと思ってるんだ。負けた奴交代な」

「交代だと、そんな圧制には断る！」

「お前さつそく負けたのかよ、しかもまだやりたいのかよ」

「当然である。我が叛逆は永遠不滅」

「このあと滅茶苦茶、スマブラした。」

「こないだのことを踏まえて、霊体化した状態で一人ずつ交代で護衛につく事になった。」

「なんで交代かというと、外に出たいらしいからである。」

「イヒヒヒ、マスターこっちには止めましょう。嫌な気配がします」

「他の奴の忠告なら従うが、メフィストには従わない」

「イギヤアアアア!?!」

護衛メフィストに従わず、散策しているとメフィストが悲鳴を上げた。

「なんで散策していたかという、シスターさんを探しているからである。」

「たしか、アーシアって子が死んじゃうらしいからな。」

「と思つたら、横にいるメフィストが死にそう。」

「大丈夫か、急にどうした」

「わたくしこの世界の悪魔と違いますから、聖なる物に敏感なのです」
「ほお、それで」

「この聖骸布みたいな物が、ダメージをを……」

仕方ないからヴェールを取ってやる。

そして、なんだこれと見ていたら、遠くからソーリーって聞こえてきた。
が、外人さんだ!?

「どうしましたマスター？ おやおや、もしや英語が出来ないんですかあ？」

「そういうお前は出来るのかよ」

「悪魔でサーヴァントですので、英語くらい出来ますよ。イヒヒヒ」

「お前、俺の漫画読んだな」

やってきた外人さんをメフィストに隠れながら見て思った。

あれ、この人がアジアって人なんじゃね？

そんな装備（サーヴァント）で大丈夫か？

取りあえずと言う形で立ち話もなんだし、公園に移動した。

ちなみに会話はメフィスト頼りである。

「おい、ちゃんと訳してるんだろうな？」

「意訳ですが、イヒヒヒヒ正確ですよマスター」

「ねっとり喋られると信用出来ないわあ」

ベンチに座りながら、二人の会話を眺め続ける。

こうしてみると、ピエロとシスターという異色の組み合わせにコスプレかよってドン引きされそうである。

海外は知らんけど、日本にシスターはいないから目立つ格好だなあ。

「あつ、終わった？」

「とおつてもお、面白いお話を聞かせて頂きましたよお。いやあ、人間は悪魔よりも悪魔らしくってわたくし更に好きになりましたよ」

「さようかー、なあなんで俺の後ろに隠れてるの？なんで、アジアさんが俺の方に来てお前から盾にしようとしてるの？」

「それはあ、わたくしが悪魔って教えてあげたからですよ！ウッフ、フヒィー！」
ニタニタするピエロ、確かに怖いわ。

これで悪魔って言われるなら、冗談の類いだとしても信じれるレベルで引くわ。
悪魔ってクソってわかんかね。

「よし、じゃあ教会に行くぞ。話は聞いてないけど行き先は知ってる」

「流石マスターあ、英語が出来ないなどと言って理解してるとは悪魔を騙しましたね」

「いや、本当に知らないよ」

知ってるのは話の流れだけ。

よし、じゃあ行くよとアーシアさんの腕を取る。

突然男に捕まれてるのに、首を傾げて苦笑い。

大丈夫か、無防備すぎて俺ってば心配だわ。

「因みにマスターより年上ですよ」

「マジかあ、マジかあ……」

「あと、わたくし教会は苦手です」

知ってた、俺はお前の嫌がる顔がみたいんだよ。

英語で話し掛けてくる彼女に、ノープロブレムを連呼しながら教会に向かっていく。

ちよつと、メフェイスが戦力外になったりしないだろうなあ。

不安になつてきたので、戦闘だけは避けよう。

どうしてこうなったのか、これが修正力つて奴か。

「マスター、教会が見えてきました。ああ、虫酸が走る」

「タイミングが悪かつたなあ」

「そんな嬉しそうな顔で言われましても、敵対ですかあ？やりますよ、わたくし！」

や、やめろー！

パンピーの俺が勝てる訳無いだろ、俺の負け負けえつてなるだろう。

教会つて聞くと、この寂れた教会しか街にはない。

教会があるつて、日本にしては珍しいよね。

敷地の近くから動くこうとしない、電柱にしがみつくメフィストを放置して俺はオツ

ケーと疑問系で彼女に聞いた。

センキュウーなんて早口で捲し立てるから任務達成である、やったぜ。

「おやおやあ、こんな所に礼拝ですかあ？敬虔なる信者様ご来場ですかあ？」

「ああ？」

感動に打ち震えていたら、俺のミツシヨンコンプリートをぶち壊す声が聞こえた。

誰だあ、ねつとり喋るメフィストみたいな輩は……嘘やろ。

そこには、高校生ほどの神父がいた。

アーシアさんはペコリと一礼して、教会の中に入っていく。

「す、すごい……英語がペラペラだ」

アーシアさんと去り際に会話、俺で無きや見逃しちゃうね。

結論、コイツ頭良いぞお！

「さてさて、昼間頃からクソ害虫臭せえゴミが教会の前に放置とか、僕ちん神父ですし掃除しなきゃいけないなあ」

「それは酷い」

「テメエの事だよ、ヒヤッハー！」

フア!?

目の前に光る棒、ビームサーベル!?

驚くのも束の間、グイツと背後に引っ張られる。

「ヘエーッへへへへへへ！」

「チツ、まあいい悪魔の方が先に死んだだけだ」

な、何が起こっているのか。

突然、目の前の神父がビームサーベルを出したと思つたら、メフィストが身代わりになつて斬られながら笑っていた。

そして、その身体は光になつて消えていく。

う、嘘だろ。メフィスト、お前……。

「さあ、次は……なんだこれ？」

「殺したと思いましたが？ 残念、そっちは本体だあ！」

血だらけになりながら、メフィストが神父の後ろに立っていた。

そうか、あの一瞬で斬られてから霊体化して背後を取った。

斬られてるから意味ないじゃ無いかあ！

「頭ン中まで蛆でも湧いてるのかねえ、悪魔さんよお！」

「それでは最後の置き土産」

ちよいちよい、とメフィストが指を指す。

その先には、さつきなんだこれと神父が首を傾げた黒い物体。

「3」

「まさか」

「2」

「に、逃げろお！ アンタも逃げろ」

「1」

「このクソ悪魔、足から手を離せ！」

「ペアアアン！ 世界は終わり！」

走り出す俺の背後で、爆発音が聞こえた。

爆竹を鳴らすような、爆ぜる音だ。

思ったより小規模だな、花火程度か。

ニュースで謎の異音がとか報道されそう。

なんだなんだと、家の窓を開ける人がチラチラ見える。

やっぱり逃げ出して正解だったな、俺が犯人扱いされる所だった。

「メフィスト、無茶しやがって……」

「あの程度で英霊が死にますか、まあ人間は知りませんけどねえ」

「うわっ、ビックリした!?!」

環境と相性の問題で、大ダメージだったのかもしれない。

それでも自爆するとは、なんて思ってなのにひよっこり本人は現れた。

ちよつと、俺のウルツと来たの返してくれます。

ただ、ビックリさせただけじゃんこれじゃあ。

「好きなものですか？ 誰かの驚く顔！ それがわたくしは好きで好きで好きで！」

「聞いてないよ。まあ一応……ありがとう」

「あれれ、今何か言いました？ 聞こえませんかあ、ん？？」

「う、うるさい！」

取りあえず、神父は懲り懲りだつて思いながら急いで帰宅した。

えつ、なんで急ぐかつて？アレがフリードつて奴だつて思い出したからだよ。

つまり、早くアーシアさん助けなきや。

家に帰ると、タマモが抱きついてきた。

そして、クンカクンカと臭いを嗅いでからマシユに向かつて一言。

「ご主人から女の臭いがする。これは去勢拳行くかニヤ、シュシュツ、シュバツシュ！」

「そんな!?先輩……」

「お劳しいマシユ様、ビシー！キャットは見た、壁から見た来た勝つたニヤ！」

シャドーボクシングを始めたと思つたら、何処からかベニヤ板を持ってきてマシユの横で顔を半分出してふざけ出すタマモ。

マシユもなんか、深刻そうな声を出してるけど雰囲気を楽しそうだ。

「どうしたんだ、一体」

「さつき、サスペンスを見て勉強しました。昼ドラです」

ムフー、とドヤ顔するマシユ。

そつか、専業主婦みたいな物だからね。

掃除した後は煎餅食べながら寝転がったり、いやそんなノブみたいな事はマシユはし

ないか。

「でもご主人から女の臭いがしたのは本当なのニヤ」

「……浮気ですか？」

「しないよー！」

「ですよね、えへへ」

照れくさそうに笑うマシユ、えへへって言う女子初めて見えた。

くつそあざとい、あざといぞマシユ。

まあ、それは置いといて。

「はい集合、チキチキカチコミ会議始めるよ！ポロリもあるよ、首だけどねー！」

庭で筋トレしてるスパルタクス、庭で馬の手入れしているアレキサンダー、庭でバイク弄ってるクーフリーン、庭で園芸をしているパラケルススがやって来る。

お前ら、庭に集中しすぎだろ！なんなの、なんでみんな庭にいるの。

「おう、どうしたマスター。戦か？」

「さつき神父に攻撃された、これは報復するしか無い」

「神父かあ……神父はマトモなのいないからなあ……」

遠い目で何かを思い出す槍ニキ、ランサー自害せよ（挨拶）されまくりだもんなあ。

平行世界の記憶があるとしたら、凄い数で関わってるもんなあ。

麻婆とかプツチとか、神父って思い出す限りヤバいのしかないなあ。

裏切るギロチン神父とか、心臓に杭さして化物になる神父とか、やっぱヤバいのしかないわ。

「争いはよくないかと」

「女の子が、誘拐されてるんだ」

「アベレージ・ワンの魔術がいかなるものか、ご覧に入れましょう」

反対意見を押し切り、作戦を決行する。

「か弱い女の子を、見捨てて良い物だろうか！これは、教会の圧制である！」

「ここより叛逆の始まりだ。覚悟を決めろ！」

「僕はいつでも行けるよ。君はどうかかな？」

「報酬は猫缶を所望する」

さあ、武力介入を開始しよう。

「行くぞ、エイエイオー！」

「「オー！」」

「こんなノリで良いんでしょうか、先輩エ……」

スピード解決だよ、聖杯ちゃん

家に着いたのは夕方、つまり襲撃は夜だった。

えっ、深夜じゃ無いかつて？ 早いほうがいいだろ、こういうのは……

月9までには帰りたいとか言うタマモに後三時間は大丈夫だと告げて教会に移動する。

よし、俺マスターとして魔力供給頑張っちゃうぞ。

「目標補足。なんか飛んでるなあ」

「墮天使、ですね」

「よし、メフィストとタマモは奴らに呪術スキルで攻撃だ！」

フッフ、俺はマスターだからステータスを見ることが出来るのだ。

俺の指示によって奴らも何かされたと気づき此方を向く。

「貴様達、レイナーレ様をやったな！」

「そうに違いないっす」

みんなで空を見上げながら、やって来る墮天使に身構える。

墮天使は二人、裸にスーツのロングヘアの痴女とゴスロリ金髪ツインテール。

なんだろう、墮天使ってエロとか趣味に走りすぎて墮ちた天使の集まりなのかな？

「痴女だあれー！」

「おい、裸の上からスーツってどうなんだ？」

「パンツ履いてないとかタマモでもドン引きニヤ」

「わわっ、見えなーい！」

「アレキサンダーさんはまだ早いですよ」

ちよつと、ウチの子の教育に悪いだろクルルア！

マシユが目隠ししたから良い物の、まったくもう。

「くっ、まあいい。貴様らに何かされて癪だ。さっさと始末する、行くよミツテルト、

ドーナシューク！」

「やれやれ、折角の奇襲が台無しだ」

「ヌツ！」

スパルタクスが此方を向いて、走り出す。

何だ!?!と思うのも束の間俺を飛び越して飛んだ。

そして、空中で光の槍に貫かれるスパルタクス！

身代わり、また身代わりですか!?!

「だ、大丈夫か？」

「弱者の盾となる以上の快感はない」

か、格好いいぞスパルタクス！よし、君に決めた！

「おっと、邪魔はさせねえぜ。アイツが男気を見せたんだ」

「私以外は対空戦は不向きでしょ」

俺達の戦いが始まった。

最初に動いたのは、パラケルススだった。

「風よ、水よ、炎よ！」

「な、どこから!？」

「各属性の人工霊、私の使役するエレメントですよ。尤も私にとっては触媒などにも使う神秘ですがね」

聞き取れない速さですつとボソボソ言いながら、腕を振るい指示を出す。

エレメントを使ったと言ったが、その前に高速詠唱で何やらしていたのは確かだ。

カラワーナと仲間心配される、痴女墮天使の身体がエロゲの様に爆発して服が脱げていく。

マシユがハツとしてアレキサンダーの目を手で隠したのは英断であった。

流石墮天使、エロゲの世界の住人かよ。

「先輩、最低です」

「俺じゃ無い、パラケルススがやったのだ！」

「私は、よかれと思つて……生かして捕獲はしないと」

「確信犯かよ！」

しかし、腐つても英霊。

戦いは一瞬だ、墮天使は爆発して服だけ無くして墜落。

あの高さ、勝手に死ぬだろう。

「余所見すんな、嬢ちゃん！」

「うええ、うちつすか!？」

兄貴、跳躍。

その高さは家を優に越え、飛行している墮天使の頭上に飛ぶ。

そして、槍を振るうと思いきやまさかの蹴りであつた。

それにより、墮天使が地上に墮ちる。

あり得ない高さだよ兄貴、でも死の国に行くときに海とか溪谷を飛んでるんだっけ。

兄貴つてやつぱりやべえわ。

「ままた待つつす！見逃して欲しいつす、何でもするつすから！」

「うん、今何でもつて言つた！」

「小娘が、もうちつと年取つてから出直してきな！」

「や、やめ——」

スパツと金髪ツインテールが空を飛ぶ。

たまげたなあ、生首がフライしてる。

ケルトの兵士つて容赦ないぜ。

「カラワーナ、ミツテルト！ 貴様あああ！」

「いいぞお！ いいぞお！」

「クソ、何故死なない！ 不死身かコイツ！」

「おお、圧制者よ！ 汝を抱擁せん！ さあ、愛を受け取りたまえ！ 我が誇りを受けるがいい
！ふはははは！ 愛！ 愛を！」

光の槍に貫かれながら、一步一步スパルタクスが前進する。

逃げれば良いのに、墮天使は攻撃を続けた。

それに対し、スパルタクスはその持っていた武器を投擲する。

「くっ！」

「甘いぞ、 圧制者よ！」

「飛んで、ぐあああああ!？」

避けたところに背後から忍び寄る影。

それは抱擁だった。

スパルタクスは墮天使のいる場所まで飛び、翼を抱えるように抱きついた。英霊にとつてあの程度の高さは余裕ってことなのだろうか。

そして、そのまま抱擁し続ける。

「ぐぎぎぎ、がああああ!?!」

「許せぬ物か。圧制者とは永遠に相容れることはない。死ぬがよい」

バキバキと折れる音がした。

腕が、羽が、背骨が、折れて曲がってしまふ。

そして、数秒の締め付けの後にくたしく姿は消え、黒い羽だけがゆっくりと墮ちてきた。

「結局、ずつと何も見えなかったよ」

「すみませんアレキサンダーさん、でも教育によろしくないのです」

「……よし、気を取り直してアジアを助けるぞ」

人外の奴らだし、もつと苦戦すると思ったが英霊の名は伊達じやなかった。

そうだよな、序盤だもんな。

レベル1のモンスター対カンスト勇者みたいなもんだもんなあ。

勝てる訳無いよなあ。

教会に入ると、さっきぶりの神父とアジアさんがいた。

「デメエー！よくもココノコやって来たな」

「先輩」

「ああ、彼女同伴かりア獣が！ぶっ殺して、テメエの前で犯してやろうか！ああ！」
服は血みどろだが、怪我は無かった。

恐らくアーシアさんの神器で治したのだろう。

「アーシア、無事か！」

「おおつ、今度は何だ？」

俺達が神父と睨み合っていると、後ろの扉がバーンと開かれる。

そして、そこには転生者である兵藤がいた。

「サーヴァントがこんなに……やっぱり、先に原作に介入して」

「兵藤先輩、ちっすちっす」

「何だ坊主、コイツも知り合いか？」

いや、こんな所で会うとは奇遇だな。

まあ、そんなことよりサクツと終わらせよう。

「兄貴頼んだ」

「なんか似たような場面思い出すな。退きな餓鬼、テメエが触れていい女じゃねえぞソイツは」

「ハア？アンタ、何様の——」

兄貴の槍が壁に突き刺さる。

同時に、神父の肩に傷が新しく出来た。

ああ、シンジ君と重ねて見てたのかね。

「ひ、ひいいいい！」

「だ、大丈夫かアーシア！」

ビビって窓をがち割って逃げていく神父。

俺たちが追い払った様子を見ていた転生者君が、走り出してビクビクしているアーシアさんに駆け寄った。

しかし、何故かフーユーって言われている。

知ってる知ってる、アレでしょ、テメエ何者だって意味だろ。

「なんか凄い英語で会話してるけど、誰か分かる人」

「男なら、コイツだろ」

兄貴が拳を掲げて、ニイッと笑う。

肉体言語ですな分かります。

パラケルスス以外納得の表情だ。

そういえば、メフェイスはなんでこういう時いないんだよ。

「私が行きましよう」

おお、やってくれるかパラケルススと思っていると、近付くパラケルススに何やら叫ぶ転生者君。

「日本語でおk」

「悪魔は確か言語に堪能になる、そういう特典があるらしいです。メフィストさん調べです」

「転生者君、チートかよ、チーターやないの」

転生者が悪魔に転生、何回転生するんだよ。

それでなんでパラケルススに威嚇してんの、野生動物？

案の定、なんかの魔術で動けなくされてるし訳が分からないよ。

「マスター彼女を保護しました」

「気を失ってるけど」

「眠らせました。ここでは邪魔が入りそうですし」

起きて知らない場所に連れてかれたらびっくりすると思いますが。

これだから無自覚黒幕系は……。

「い、いけませんでしたか？」

「大丈夫、よし撤収！」

あ、ありのまま起きたことを話すぜ。

速攻突撃したら転生者に絡まれた。

何を言ってるのか分からないと思う、俺も分かってない。

原作の進行とか主人公とか関係ない、尤も迅速な方法でスルーしたぜ。

帰宅、何やらパラケルススが魔法陣を作成。

でもって中心にアーシアさんを設置。

「何してるの？」

「ホムンクルスのように言語を植え付けようと思ってる」

「安全？」

「ええ、日本語が喋れるようになります。オプションで、ドイツ語中国語ロシア語もサー

ビスしますが」

「サービスとかいらんわあー」

そりゃ、そうか。

ホムンクルスがいきなり喋るためには短い期間で学習する必要があるもんな。

それくらい技術あっても可笑しくないのか、魔術師ってすげえわ。

「ハ、ハハハは……」

「すごいぞ、パラケルスス！日本語喋ってる」

「……キャアアアアア！」

その後、急に悲鳴を上げる物だから落ち着かせるのに苦労した。
お、お前のせいだぞ。パラケルス！

プライバシー？悪魔に人間の法律が適用されるか！

かくかくしかじか、とまあそんな感じでアーシアさんに事情を説明した。

ただ、やっぱり信じて貰えなくて。パラケルススによる暗示を掛けて貰った所だ。

ここまでお人好しだとは知らなかった。

「先輩、彼女は大丈夫でしょうか？」

「今は俺達との信頼関係が出来てないから、時間が経てば分かってくれる……はず」
「そうですね」

それより、学校に行かせた方がいいだろうな。

明日、グレモリー先輩に頼んでみるかなんて考えながらその日は寝ることにした。

馬がいた。

馬の前には一人の若い筋骨隆々な男がいる。

男は、馬を切り捨て周囲の者達に言う。

「勝てば馬は幾らでも手に入る。負ければもう必要ない」

周囲の者達は、それもそうだと笑い合い、そして彼を同士と呼びながら受け入れる。

あつ、夢だこれと俺はその時自覚した。

場面が変わる、そこは戦場、幾多の屍が転がっている。

俺は足下にあつた死体を見て、それが先程笑っていた人間だと自覚した。

反射的に吐きそうになるが、これは夢だから俺は吐くことが出来ない。

そして、それと同時に俺は彼を見つけた。

「うおおおおお！」

誰の視点なのか、俺は第三者の視点で彼を見る。

彼は小剣を片手に、雄叫びを上げながら人垣へと突っ込んでいく。

その数は圧倒的多数、それに対して突撃を敢行するのは彼一人だ。

「おい、待てよ」

俺は彼を見て思わずそう言った。

だって、あの時笑ってた何人かが逃げているからだ。

彼を置いて、一人だけ戦わせて、逃げているのだ。

「はああああ！」

「弱者の盾となる以上の快感はない!はああああ！」

迫り来る敵兵を盾を持つ左手で殴り飛ばし、そして右の小剣で切り結びながら進んでいく。

「小隊長をお守りしろ！」

「何をしても無駄である」

少し頑強そうな装備を纏った馬に乗る男、それを守るように兵達が壁になる。

そこへ、彼は飛び掛かった。

空中で無防備になった彼を、兵達はその長い槍を持って突き刺していく。

「ぬう！」

だが、そんな物を諸共せずに笑みを浮かべた。

「ひいひいひい!?!」

「さあ、愛を受け取りたまえ！」

彼の一刀により、首が飛ぶ。

怯む敵兵に、彼は果敢に責め立てた。

「囲め囲め、敵は死にかけてだ！」

敵に包围され、槍で体中を刺されながらも彼は戦い続ける。

何時しか小剣は折れてしまった。

だが、それでも彼は盾を片手に相手を殴るという方法で戦い続ける。

傷を負い跪いた。

それでも楯を前に掲げて戦い続けた。

「ははははは。これはいい、これは素晴らしい。雲霞の如き敵兵、そして我が身は満身創痕。」

ああ、これでこそ——勝利するときの凱歌はさぞや叫び甲斐があるだろう!」
既に立つことは敵わない。

何故なら、両足は潰されたからだ。

それでも彼は笑って、腕を足代わりに敵に向かっていった。

両目は潰され、いつしか拳を握る腕は断られた。

それでも彼は笑って、今度は顎を使って這いつくばって敵に向かっていった。

安心する一際豪華な格好の男の前で、彼は首を断られた。

それでも彼は笑って、首だけでも関わらずその喉に噛みついた。

「我が反逆は……不滅……なり……」

「……ハッ!」

それは、彼の死に際では無く見慣れた天井だった。

朝、納豆をかき混ぜながら俺はスパルタクスを見ていた。

うーむ、生前と肌の色が微妙に違うし変な格好なんだよな。

なんだろう、みんなの想像による補正だろうか。

メデューサーがバブリーな格好になるみたいな、兄貴が全身タイツとかそんな感じ。

「どうしたマスター、納豆が出来たのか」

「こうして普通に会話は出来るんだけどなあ」

「何か悩み事か？私で良ければ相談に乗ろう」

「今日はアーシアさんの件について悪魔の所に行くんだが、お前はヤバそうだから来るなよ」

「何故だ同士よ！領主だぞ、愛すべき压制者だ！それは命令か、ならば我が愛を——」

「お願いだから、命令じゃ無いぞ。あと、お風呂湧いたぞ」

「テルマエ……おお、命の洗濯……テルマエが呼んでいる」

よし、誘導成功計画通りだ。

さて、じゃあ誰か学校に着いてきて貰おうか。

あれ、誰も降りてこないんだけどどうなってるんだ？

「マシユ、みんなは起きてないのか？」

「みなさん出掛けるらしいですよ。今日の担当はスパルタクスさんなので大丈夫だろうと」

「ええ、じゃあ今度にしようかな」

「……で無理してアーシアさんの件を相談して、入学したければ悪魔になれとか言われ

たら面倒だし。

なんだ、釣りでもしに行ったのか?

「クーフリーンさんとタマモさんとアレキサンダーさんは海に、メフィストとパラケルスさんはバイトに行きました」

「後半どうした、バイト!?!」

「遊園地でマジックショーとピエロのバイトらしいですよ」

家計がそこまで苦しかったの!?

確かに、俺が神器を覚醒してからバイトしてないけど……俺になる前の俺の貯金、そんなに少なくなってきたのか?

「最悪、令呪で呼べよってクーフリーンさんが言っていました」

「……まあ、戦闘にならんだろう」

「大丈夫です、今日はスパルタクスさんの代わりに私が護衛します」
両手で握り拳を作って頑張ります、とやる気満々のマシユ。

今日、休もうと思うとか言えないよ……。

スパルタクスを浴槽に放置して、登校する。

マシユは……職員室に連れて今日は見学ということにしてみた。

こ、これでもパラケルスに魔術習ったし、暗示なら行けるはず。

「そんな話、聞いてないが」

「聞いている、聞いているはずです」

「……そうだな、先生がど忘れしていたようだ」

やっただ、魔術による暗示って便利だって分かんだね。

来客用のカードを首に掛け、スリッパを履いたマシユが見学することになった。

「先輩、スリッパです。耐久性ってどのくらいでしょう」

「気になるところですか」

「もしもの時、叩くからには装備の耐久性は大事です」

テレビの見過ぎです、スリッパは叩く物じゃないよ。

っていうか、今時スリッパで叩く内容をテレビで見たこと無いわ。

だから、そうなんですかって驚くのやめようか。

先生から紹介の元、今日はマシユの見学である。

空き教室から席を持ってきて、授業を俺と一緒に受ける。

明らかに可笑しいが、授業参観の英語の授業で粘土とかやる学校だし気にしたら負け

だと思おう。

「えー、マシユさんって同棲してるの」

「あれだ、従妹だからだ」

「おい、どどどということだよ」

「お前は女子の会話に過剰に反応しすぎだ」

まあ、転校生あるあるみたいな質問攻めのせいでラブコメ展開があったけど割愛である。

そして、放課後に俺はオカルト研究部へやって来た。

「よくも私の可愛い下僕をあんな目に遭わせておいて来れたわね」

「……何の話ですか?」

「えっ?」

「えっ?」

失礼します、と開けて開口一番にグレモリー先輩に文句を言われた。

そして、お互いにどういことだと首を傾げる。

その答えは、すぐに判明する。

「ここかぁ! テメエ、アーシアを——」

「先輩! やああっ!」

「うお!?!」

俺の背後から忍び寄る影、それはそのままマシユによってソファァーに放り投げられる。

片手で男を飛ばすなんて、さすマシユ。

「はあ……ちよつと一誠、どういうことかしら？」

「部長言つたでしょう！あの日、コイツがアーシアを浚つたんです」

「ですつて、それであんな危険な場所に閉じ込めたつて本当かしら？」

呆れながらグレモリー先輩がそんなことを言ってくる。

いや事実だけど、俺は悪くない。だつて、やつたのはパラケルススだからだ。

「そのアーシアさんなんですけど、墮天使つていう奴らに騙されてたのを助けたんです。それで学校に通わせたいんですけど、あとウチのマシユも」

「せ、先輩……」

「あー、うん、ちよつと待つて。さっきの質問は事実なのかしら？」

「ウチの魔術師が、拘束したのは事実ですけどそれは襲われたからであつてそれに悪魔の魔力なら解除出来るはずです」

もちろん嘘だが、ああだからかみたいな勝手な勘違いをしてくれた。

そんなことより、貴方の家に魔術師がいることにびつくりみたいなのを言われた。

いや、こつちの世界にもいるんだしいても可笑しくないだろ？

「話の内容は分かつたわ、それくらいなら容易いわ。でもその代わり、私達に敵対しないですよ？貴方でしょ、墮天使達を始末したのは」

「な、何故それを……」

「いや、私ずっと監視してたし」

プライバシーの侵害に遺憾の意である。

取りあえず、問題は解決したようだった。

一度は蹴破つてみたいよな、ドア

それはどこかの一室、豪華な調度品に囲まれた部屋だ。

部屋には二人の人物がおり、一人は幼いながらも整った顔立ちの少年、もう一人は布の服を纏った男。

つていうか、アレキサンダーとギリシア人みたいな人だった。

「それで、アキレウスはヘクトールを引きずり回したんですか？」

「彼は怒りが収らなかつた、なんて意見もあるがね。人によつては戦意を挫くためという意見もある。少なくとも、戦略的に優れた男であるのは事実だよ」

それはイリアスなんて呼ばれてるトロイア戦争のことだろうか。

ローアイアスとか使つてるのかな、ゲイボルグで粉碎されるあれ。

俺はまた夢かこの時点で納得する。

場面は変り、外に移った。

周囲は案山子や武器が有り、修練場つて奴かもしれない。

アレキサンダーはそんな場所で地面に座りながら、兵士のような男と話していた。

「海ですか、しよつぱい湖なんですよ？」

「私は見たことないですが、そのはずです」

「オケアノスカ、いつか見てみたいな」

それは若かりし日の思い出だろうか。

俺はそんな彼に言いたい。

その先は（マツチヨになつてしまふ）地獄だぞ。

そんなツツコミを最後に夢から覚めた。

「……ハッ!？」

「僕を召喚、コイツは14回攻撃出来るんです、この意味が分かるかな？」

「そんな……私のモルデイガイが」

「しかもダメージは喰らわれない！攻撃、攻撃、攻撃」

「うわああああああ！」

朝からスマホ片手に、アレキサンダーとパラケルススが何やら騒いでいた。

くそお、アーシアさんが寝室で寝てるからリビングのソファで寝ていたのが仇に

なつたか。

それにしても、アレキサンダーはゲーマーになる性を背負っているのかね？

今度ゲーセンに連れて行ってやろう。

「本当にこんなことあるんでしょうか？」

「間違いないです。曲がり角でぶつかってパンツを見られます、本に書いてありますから」

「転校生って大変なんですね」

こっちはこっちでなんだと思ったら、ラブコメ漫画をアーシアとマシユが真剣に読んでいた。

いや、教科書みたいに使ってノートとか取ってるけど、そんな漫画みたいなのは現実にはないよ。

あれから数日後、転入手続きを終えたアーシアとマシユは学校に通えることになった。

法律とかどうなってるんだろうなあ、悪魔がどうかしたんだろうかと思う今日この頃である。

確か原作だと、フェニックスが来て堕天使が来て和平があつて、その後はどうなるんだろう。

こうなるんだつたらもつとアニメ見ておくんだつた。

取りあえず、アーシアさんには悪魔に気を付けるように言った。

アーシアさんも解はしてくれたが、正直どうだろうか。

うーん、まあ最悪何かあつたら対処すれば良いだろう。

教室にやって来た俺は席に座ってワクワクしていた。

何故なら、昨日練習していたマシユの自己紹介が見れるからである。

「おーい、席に着けー。今日は転校生を紹介するぞ」

「おー、男ですか女ですか」

「女の子だ」

よっしやああああ！と盛り上がる男子、でもお前達誰が来るか知ってるだろ？

ほら、ヒソヒソと女子がこつち見てるだろ、分かるだろ。

「よーし入ってこい」

「失礼します」

「他のクラスじゃねえ、俺たちのクラスだ！ワンチャンあるぞ」

うんうん、あるあ……ねーよ。

マシユは俺の嫁、まだ告白もしてないけどな。

お前ら手を出すんじゃないぞ。

「マシユ・キリエライトです。出身は……イギリスです。趣味は最近写真を撮り始めました。よろしくお願いします」

ちよつと忘れかけてたが、やったぜ。

こうしてマシユは無事に転入できた。

アーシアさんは、いやアーシア先輩は無事に転入出来ただろうか。女子の粋な計らいにより、マシユは俺の隣になった。

マシユなら今俺の隣にいるぜって言ったら、男子から殺意の視線が送られた。安心しろ、俺はまだ付き合えてない。

放課後、アーシア先輩を迎えに教室に行つたのだがいなかった。

「先生が教えてくれた場所だとここの筈なんだけどな」

「いませんね」

「先に帰るはずはない。なのになんかというの、オカルト研究部に連れてかれた？」
だって、あつちから帰ろうって言ったんだぞ。

なのに、こうなるってことはつまり転生者君が何かしたのかな。

だって、クラスメイトだし何かしてそう。

「取りあえず行つてみるか」

「知ってます、フラグって奴ですね」

「いやいや、そんなタイミング良く騒動が起きるはずがないだろ」

そう思っていた頃がありました。

ブワツと鳥肌が立つ。

なんか、来たわ。なんか、旧校舎にいるわ。

「あー、なるほどな」

確かフェニックスが来る前夜に夜這いされるんだっけ。

そうなると、タイミングが分かるからアーシア先輩を巻き込める訳か。

何かしらで殺して、助ける為にみたいな感じで悪魔化するつもりかな？

「ただ原作通りにはしたいんだよ、助けに行くか」

「了解です」

身体を魔術で強化して、旧校舎に向かっていく。

近づけば近付くほど、俺の感知に引っ掛かる。

魔力を垂れ流してるのかもしれない。

パラケルススに軽く教わった程度の低レベルなのに分かるんだから相当だな。

オカルト研究部の前まで来て、ドアを蹴り破る。

一度やってみたかったんだ、緊急事態って言い訳できるし合法だわ。

「そおいー」

「きゃあああ!?!」

蹴飛ばした扉に、何やら巻き込まれる人達がいた。

うわあ、この部屋人口密度多すぎ。

「何だ貴様あー!」

「すみません、まさかこんなに人がいるとは知らず」

そうだった、俺のハーレム凄いやろって沢山出してた所だった。

まあいいや、さっさとアーシア先輩を連れ出そう。

「おい、待て！」

「マシユ」

女の子の一人が何やらしそうだったので、マシユに頼む。

すると、案の定攻撃するつもりだったらしい。

まあ、その攻撃もマシユの盾によって防がれたけどな。

「部屋には入れないから何とかして」

「了解しました」

「人間風情が、調子に乗るなよ！」

ホストの身体が自然発火する。

何だこの兄ちゃんフェニックスって分かってもビックリするんだけど。

「ライザー様、この場で暴れられるのはお止めください。流星にこれ以上は看過出来かねます」

「ふん、命拾いしたな人間」

お前がな、ウチのマシユはアレだから自分に無敵付けてタゲ集中からの撲殺できるか

らな。

さて、俺に敵意メラメラで睨み付けてくる転生者君が鬱陶しい。

「やめましようよ兵藤先輩、アーシア先輩を巻き込むなんて面倒なこと」

「どういうこと一誠？」

「さあ、俺にも分かりません。巻き込みしまったのは謝るよ、まさかこんな事が起きるなんて思わなかったからな」

白々しいな、そう思いながらアーシア先輩を確保する。

オロオロしてるけど大丈夫そうだ。

別にアーシア先輩を彼女にしたいくて口説くのはいいけどさ、悪魔に転生させるのはちよつと可哀想でしょう。

「すみません、一誠さんに誘われて遊びに来てたら、まさかこんなことになるなんて」

「そうですね、じゃあ帰りましょうか」

「おい待てよ人間」

呼び止められたので、首だけ後ろに向けてホストを見る。

いわゆるシヤフ度って奴だ、カツコイイだろ。

えつと、なんだっけなあ。

「ライ……ライザーさん？」

「貴様もレーティングゲームに参加しろ、舐めた真似しやがったんだからな」

「どういふことなの、これが修正力って奴なの？」

「転生者は巻き込まれるって呪いでも掛かってるの？」

「えっ、やだ」

「どうした、臆したか？臆病者め」

「ああ、うん実はそうなんだ。それじゃあ、俺はこれで」

「気が変った。だったら、その女達を置いていけ、それで許してやろう」

「はあ？」

「今、何て言った？」

戦争は戦う前から始まっている

戦争である。

悪魔にすら寛大な俺を奴は怒らせた。

まさか、丹精込めて育て上げようとしている俺のサーヴァントを寄越そうなんて言う輩がいるとは思わなんだ。

それってアレか、マーリンいいなアカウント頂戴とかガイジ案件みたいな物か？

えっ、何言ってるのコイツ？ガイアが許してもアラヤは許さないよ。

「パラケルスス、礼装はまだか！」

「材料が届いたので既に着手しておりますマスター、それにしても通販とは素晴らしい」

「絶対に許さない、絶対に絶対にだ。爪先からじっくり切り刻んでやる」

自宅に帰ってすぐ、俺はキャスター組に指示を出した。

メフィストには攻撃用の礼装を、パラケルススには防御用の礼装だ。

材料はサプリメントからネズミの死体まで通販で注文すれば何でも揃う世の中だ。

「お、おい。なんか坊主の様子がおかしくねえか？」

「血祭りにして酒池肉林にでもするのだろうか……あつ、ワン」

「動揺しすぎてタマモさんのキャラがブレてますね。そんなことよりお腹が空きました」

何やらサーヴァント達がマシユの近くで集まってコソコソしているが、きつと晩ご飯の話だろう。

王様って言うのは、だいたい腹ぺこだからな。

「イヒヒヒ、マスターよろしいので？」

「魔術でどうにかなる」

「怖いですねえ、ジャパニーズマファイアみたいですね」

まあ、そんなことよりも礼装作りが大事である。

メフィストもなんだかんだ、Bランクだからちゃんと作れる。

それに呪いの類いも詳しいいな。

「賢者の石があるから大丈夫だ」

「マスター、十本くらいが妥当です。それ以上は、再生出来るかどうか」

「十分だ。それより、メフィストは作れそうか？」

「専門は天文や気象学なんですがねえ、魔術で代用すれば問題ないでしょう」

痛む手を押さえながら、サーヴァントの運用方法を考える。

まず、キャスターは今の時点では使えるが基本的には後衛、それに拠点防御が得意な

タイプだ。

だから、キャスター組は防衛をさせるとしよう。

次に、ライダーはやはり速度が特徴だ。

ブケフアラスに乗って貰えば奇襲は簡単に行くだろう。

バーサーカー組はコントロール出来る気がないので、もう勝手にさせよう。

前衛で防御はマシユ、攻撃は兄貴がやれば大抵の敵は消せるだろう。

問題は、フェニックスの特性を持つ二名だ。

兄貴の他に、確か妹がいたはずだ。

ソイツが邪魔をすると、少し面倒だ。

「まあ、その時に考えれば良いか」

俺が数日休んで準備に明け暮れている頃、マシユ経由でグレモリー先輩達も休んでいると聞いた。

確か、修行してるとかだったか。

数日修行して強くなれるなら、みんな修行するわ。

俺はというと、自身は強くなるには時間が足りないので、使い捨ての道具を用いて実力をカバーする作戦だ。

修行する前に礼装作れよ。

「あの廃教会が霊地だったのは大きいな」

「堕天使が儀式をしようとしたくらいですから、後は学校も霊地ですね」

フェニックスは恐らく地属性、悪魔で怪物、神聖な方の生物じゃないから地属性のはずだ。

つまり天、高い神性を持つ者は兄貴とタマモ、やっぱ兄貴ってば使い勝手が良いわ。

兄貴はフェニックスの天敵、ゲイボルグで穿たれた心臓は治らないからさらに大ダメージだ。

回復阻害の呪いはフェニックスと相性が良い。

夜、言われた時間にオカルト研究部にやって来た。

いつも絡んでくる転生者君も、今日は絡もうとはしてこない。

何故なら、グレモリー先輩すら顔を引き攣らせる準備をしてきたからだ。

「アーシア先輩、俺のわがままですんません。キャスター達と引き籠もって下さい」

「元々は私のせいですし、大丈夫ですよ」

こちらら聖女特性の秘密兵器もあるからな。

さて、魔法陣に乗ったらゲーム開始である。

「学校を模したフィールドですか」

「流石ね一誠、看破するなんて赤龍帝の名は伊達じゃないって所かしら?」
「すごいですね〜」

学校、少しでも地理的優位を与えたい魔王陛下の慈悲だろうか。

まあ、俺を転生させた悪魔に比べたら悪魔らしくない奴らだな。

そして、ゲーム開始が告げられた。

「お兄様やお父様もご覧になっているとなると、下手な試合は出来ないわね。さて、まず皆にはこれを配るわね」

そう言ってグレモリー先輩が光る物体を取り出す。

「一誠やアーシア達は知らないだろうから教えるけど、これを耳元に付けておけば同陣営の人とならどこでも通信可能なの」

「必要ない」

「何ですって?」

俺はメフィスト作成の銃を構えながら、グレモリー先輩に言う。

「素人に連携は無理だ。此方は此方の勝手でやらして貰う」

「テメエ、部長の好意を——」

「お前は見ている、俺の物（リアルアカウント）に手を出そうとしたらどうなるかな」
突っかかってきそうだった転生者君を銃で牽制する。

今はお前に構っている暇は無いんだ。

「待ちなさい」

「邪魔しないで貰おうか。今は誰でも良い気分なんだ」

他人のアカウントを奪おうとするなんて規約違反、ギルティである。

これはマシユの為でもあるが、ファンとしても大事な戦いなのだ。

「令呪を持って命ずる。キャスター、アーシア先輩を中心に拠点を作れ。重ねて命ずる、バーサーカードも敵を殺せ。更に重ねて命ずる、がんがん行け」

作戦はがんがんいこうぜである。

最後の令呪により、サーヴァント全員が雄叫びを上げた。

やる気が気持ち上がったのかもしれない、ステータスに補正があるといいな。

大丈夫、ウェイバーがやってたしいけるいける。

「おう、マスター！どう動く！」

「敵は臣下だけ前線ですか。僕と合わないタイプのようだ」

「正面だ。そのまま突っ切って校舎に入り生徒会室である本拠地に攻め込む」

「分かりやすく言い、本陣目指すって訳だ」

ある程度方針を決め、俺達は動き出す。

バーサーカード組、アレキサンダーは俺達とは別行動だ。

バーサーカー達は指示なんかしたって無駄だし、アレキサンダーは王だからか仕えるつもりはないらしい。

俺も納得してしまうカリスマが奴にはある、だから自由にさせたのかもしれない。

まあ、その三騎は遊撃つてことだ。

「よし、マシユと兄貴行くよ」

「おう、任せな！」

「了解です先輩！」

警戒しながら、運動場を抜けていく。

槍を肩に乗せながら、一定のリズムで槍を揺らす兄貴。

重そうな盾を俺の周囲をグルグル回りながら持つマシユ。

完璧だ、完璧な布陣である。

「クリアです先輩、どうですか！FPSで鍛えました！」

「つても、見晴らしが良すぎて意味ないんだがなあ」

「そんな、アレキサンダーさんの後ろで勉強したのに」

大丈夫続けていこう、だって可愛いから。

そうこうしてるうちに、誰か接敵したのか、体育館の方で雷が落ちて、登った。

「下と上から雷ですね」

「スパルタクスが宝具でも使ったのかな？今、クラツと来たぜ」

『ライザー・フェニックスさまの「兵士」三名、リタイヤ』

魔力の大幅な減少はまずいので、霊地から搾り取ったキヤスター謹製の宝石をポケツトから取り出した。

手頃にダイヤモンド、それをポテチのように飲んで追加で飲んでいく。

炭からダイヤを作成し、魔力を込めるとか流石パラケルススである。

「俺は人間魔力発電所、ゴゴゴ」

「宝石ばっか飲んで大丈夫か？」

「害はないんでしょようか」

大丈夫、問題あれば魔術で何とか出来るはずだから。

宝石を飲み込み続けながら進んでいたら、ランサーが槍を片手に通せんぼする形で俺達を制止させる。

そして人影が見えた。

「私は、ライザー様に仕える騎士カーラマイン！ここそこそと腹の探り合いをするのも飽きたー！リアス・グレモリーの騎士よ！いぎ、尋常に剣を交えようじゃないか！」

「セイバーみたいだぜ、マスター。まあ、俺は騎士道つてのは理解できねえが、嫌いじゃ無いぜああいう馬鹿は」

「ランサー、速やかに排除！マシユ、俺を守れ！」
最初の戦いが始まった。

駆逐してやる！一匹残らず、駆逐してやる！

マスターなんて者は原則として、ただの魔力タンクだ。

実際ゲームでも戦闘中は、マスター写ってないからな。

カーラマイン名乗る騎士は、剣を構えて様子を覗う。

「ランサー相性は最悪だが、レベル的には大丈夫なはずだ」

「誰に言ってるやがる。ふん、こんなの瞬殺よ」

先に動いたのはランサーだ。

早すぎて、俺の目には立ち上る砂埃しか見えない。

ランサーが立っていた場所には砂埃が立ち、そして剣戟の音が響いた。

「ふっ！」

「ぐぐう!?!」

驚きに目を見開くカーラマイン。

彼女は騎士、故にスピードに自信があったのだろう。

だが、それを凌駕するスピードを兄貴は出していたのだ。

最初に一撃、それを彼女は剣を盾にすることで何とか防いだ。

だが、その威力に身体は地面を滑るように動く。

槍の一突きが彼女を押し出したのだ。

「舐めるなあ!」

「へっ、気の強い女は好きだぜ!」

カーラマインの剣に火が灯った。

それを彼女は上から振り下ろす。

「そらっ!」

兄貴はそんな上からの剣に槍を横にして防いだ。

そこから、片手側を上にも動かし斜めに払うように剣を弾く。

「しまっ!?!」

「シッ!」

払われ、剣を頭上上げた形で後ろに倒れそうになるカーラマイン、それは無防備に腹を出している体勢だ。

だから、兄貴は迷わずその隙を狙った。

赤い槍をクルリと回転させ、その後ろの石突きの部分を深く押し込むように前に突き出す。

結果、彼女はうっつという小さな声と共に崩れ落ちた。

「風を纏っていた奴を思い出したぜ」

いつの間にかどこかに転送されたことで、彼女が気絶かなんかで戦闘できない状況に追い込まれたのだと把握する。

やはり、腐っても英霊だ。

十把一絡げの悪魔に遅れを取るわけが無かった。

「マスター!?!」

「ッ!」

視界が揺れる。

マシユが、俺の首根っこ掴んで振り回したからだ。

地面に投げ倒された状態で、俺は何が起きたか状況の把握に努めようとした。

何だ、敵か? 奇襲されて、もしや上からか?

「おいおい、何の真似だ?」

「フッフ、ハハハ、愛! 愛を!」

「イカレて……いや、そうだったな」

マシユの盾ごしに俺は敵を見た。

それは、筋肉モリモリのマツチョマン。

身長221cm、体重165kg、圧制者を愛し、圧制者に愛された男。

スパルタクスであった。

「ええ、スパルタクス!?スパルタクスなんで!」

「悪への反逆、素晴らしい。しかし、大義無くして戦いを強いる者、須く压制者なり!我は压制からの解放者、压制者死すべし慈悲はない。華々しく死ぬが良い」

「某主人公のような聖杯戦争に巻き込まれ型の一般人、かつ悪を挫く正義のマスターであれば何とかやつていけるとも言われてるのに!」

知らなかったのか、言われてるだけで型月の設定は変動するって事をな。

騙された、また型月に騙された。

きのこの言葉を真に受ける様では型月厨としてまだ2流だったよ、きのこが言ったわけではないけどな。

「兄貴、頼めるか?」

「生き残るだけの戦いか、生憎そういう経験には慣れっただぜ。だが、坊主ひとついいか?」

兄貴はそう言って、槍を構えながら首だけを後ろに向け、シヤフ度で聞いてきた。

「復活するだろうし、別に倒してしまっても構わねえだろ?」

「兄貴いいいい!それ、一番ダメな奴だよおおお!」

何言ってるんだよ、死んじやうよ。

「何かと思つたら仲間割れかい？ 全く、臣下を導かなくて何が王か」

「ぬ、ぬかつたわ。そしてご主人が死ぬと悲しいということが判明した。なのでこれからもアタシを頼るがよい。アタシの命にかえても守るぞ、マスター」

「おう、お前らも来たのか」

そんな不安な俺を神は見捨てなかつたのか、ライダーとタマモキヤットが近くに来ていた。

いや、神様は死んでるから俺を転生させた悪魔に感謝だわ。

「フハハ、英雄豪傑が揃いも揃つて、これほど困難な道があるものか！ 素晴らしい、闘争よー！」

「フツ、スマブラで連敗している君が僕に勝てる訳がないですよ」

「……王よ、压制者よ！ 今すぐ決着を付ける時！ 行くぞ压制者、我が愛を受け入れろ！」
「おい、そんな理由で始めるんじゃないよー！」

戦いが始まった。

ライダー、バーサーカー、ランサー対スパルタクスだ。

あの、宝具の使用だけは控えてね。あと、フェニックス倒したら、説得するから頑張つて。

「行きましよう先輩、クーフリーンさんの犠牲は無駄には出来ません」

「ああ、そうだな」

「おい勝手に殺すな、この人でなし!」

俺は彼らを背に、校舎へと侵入した。

校舎へと侵入してから、悪魔とはエンカウントしなかった。

慢心故に一人で迎え撃つ気か、まったく慢心しているのは王様だけだぞ。

「ほお、来たかと思っいたら人間、貴様か」

「ライザー」

生徒会室を開けた途端、椅子に座ったまま不敵な笑みを浮かべたライザーが待ち構えていた。

「まさか貴様——」

「マシユ、防御任せた」

イメージしろ、イメージするのは常に最強の自分。

心臓にナイフを突き刺すように、魔術回路を起動する。

肉体を強化し、そして投げる。

「何のつも——」

「悪魔め、慢心したな!」

当初の予定と違うが、俺だって自衛の手段ぐらい用意していた。

投擲により、いくつかの宝石を生徒会室にぶちまかれる。

ライザーは、ある意味理解の及ばない行動に一瞬だけ硬直する、それは好機だった。

「起動！」

俺がマシユの背後で身構えた瞬間、生徒会室が轟音を立てながら炎上した。

それは、一週間の間に霊地から集めた魔力を加工、蓄積、そして作成した宝石による魔術だ。

「貴様ああああ！」

「よし良いぞ、逃げるぞマシユ」

人間にコケにされた悪魔は、俺を追い掛けるだろう。

それこそが、俺の狙いだとも知らずにだ。

案の定、ライザーは生徒会室から飛び出した。

その顔は怒りに満ちており、どっかの先生みたいである。

「ただでは殺さ——」

「コンテンドーを喰らえ」

強化なしでは反動で撃てなさそうな巨大な銃をライザーに向けて発砲する。

発砲後、装填し、また発砲する。

「どこを狙っている、こんな——」

「後ろだ、ライザー」

飛来した銃弾は難なく避けられ、無駄撃ちかと思われた。

その銃弾が軌道を変えて、背後からライザーを撃つまではそう思われていた。

「ガッ!?!」

「祝福された銀の追尾機能付き魔弾だ。祝福はアーシア先輩、魔弾は俺の指を使っている」

「がああああ、この俺が痛いだと!ぐうううう」

流石に不死殺しなんて持つてないから殺すことは出来ないだろう。

だが、殺せなくてもやりようはある。

ライザーはその危険度を理解し、翼を出して逃げ出そうとする。

だが、ここは室内。

逃げる場所など無かった。

「ぐああああああ!消えろ!」

「対処法に気付いたか」

いくつかの被弾の後に、炎を全身から発することで銃弾を溶かすという方法を編み出した。

蒸発してしまえば、銃弾も追い掛けることは出来ない。

だが、銃弾を警戒していつまでも炎を出し続ける魔力が残っているのか？

「調子に乗るなよ人間！」

「マシユ、任せた」

「女を矢面に立たせて恥ずか——」

「主よ、恵みの御業のうちわたしを導き、まっすぐにあなたの道を歩ませてください。わたしを陥れようとする者がいます」

「その言葉は、ぐううう！」

「やあああ！」

ライザーが前に出てきた瞬間、マシユの攻撃のタイミングで俺は聖書を読んだ。

銃弾だけではない、聖書という装備も立派な武器なのだ。

頭を抱えるライザー、それを躊躇無くマシユが盾で殴った。

「人間を舐めるなよ。喰らえ、聖水アタック！」

「ぐあああああ！殺す、殺してやるううう」

ペットボトルを投げ、その中身をライザーにぶっつけた。

すると硫酸でも浴びたかのように皮膚が焼け爛れる。

悔しいでしょうねえ、でもやめない。

「どうだ聖なる攻撃は、マシユの盾には十字架がある。さしものお前も不死身とは言え

悪魔だからなあ!」

この日のために、聖なる道具を幾つ作ったと思っているのやら。

次は黒鍵だ、吸血鬼ではないのが悔やまれるが十字架であるのに意味がある。

「離せ、離せクソ女あああ!」

「無駄です、今なら貴方の攻撃は通じません」

「無敵スキルが切れる前にやってしまおうか」

さて、お前に教えてやろう。

不死身の弱点、死ねない苦痛という奴をだ。

そのサーヴァントの小説を書くときと当たるらしい（既に持っている）

そこは、聖書の紙片がバラまかれた廊下だった。

経典に身を包まれ、十字架に貫かれ、灰を塗され、牛の頭蓋骨を置かれ、ヤドリギや四つ葉のクローバーを供えられ、聖水に浸された物体があった。

「272回、お前が肉体を喪失した回数だ」

「……が……殺、せ……ッ……殺し、て……」

「悪いが、それは出来ない装備なんだ」

まるでスナック菓子を食べるように、ゴクゴクと宝石を飲み込みながらゲームが終わるまで俺はライザーを殺し続けた。

不死身だって、殺し続ければ死ぬだろって言うてたし、俺はまだまだ努力が足りない。

ライザーを殺し続ける間、宝具を連発してるのか魔力がごっそり削られる。

校庭がずっと光ってるんだが、毎回スパルタクスが宝具使ってるのだろう。

それを兄貴は回避したり、根性で乗り切ったりしてるのかもしれない。

どっちが化物か分からないよ。

「な、何よこれ」

「……ああ、やっと来たんですか」

ライザーに座っている俺の前に、ようやくグレモリー先輩とその愉快的仲間達がやって来た。

俺の宗教的な物をこった煮にしたライザー専用装備一式のせいで気分が悪いのか気持ち悪そうだ。

それに、聖書の紙片が神聖な物だからかこつちに来ることすら出来てなさそうだった。

そんな物をバラバラにして罰当たりだが、神父がルーラー使うときに破くくらいだし問題ない。

「後は煮るなり焼くなりしてくれて良いですよ。此方も、悪魔に何が有効なのか調べられて良い経験になりました」

「こんなことして、フェニックス家は黙ってないわよ」

「だから、何が問題なんですか？」

所詮、こんなのはゲームである。

誰も死なないし、誰も不幸にはならない。だって死なないんだから、どん底からだって這い上がれる。

それがトラウマだとしても、生きていればどうとでもなる。生きていれば、何したって良いに決まってる。

でも、殺そうとするのはチャンスを奪うことだからダメなことだ。その点、俺は殺してないし悪くない。

球磨川先輩だつて言つてたじゃ無いか。

「俺は悪くない。だつて、悪くないんだからな！」

「テメエ、ふざけんのも大概にしろよ！」

「おいおい、一誠先輩。ふざけてなんかいいですよ、俺は彼の意思を尊重したんですから」

そうだよ、だつてリタイアすれば良かったんだ。

リタイアを宣言しないなら、戦う意思があるってことだ。

じゃあ容赦してはいけないよな。

「リタ……」

「神に感謝を、おおつと何か言つてたかな？」

「ぐうう……」

唸るライザーとそれを見ながら頭を抑える先輩達。

何が悪魔だよ、属性ダメージ喰らってるじゃ無いか。

やっぱ、人間が一番だつてわかんかね。

『ライザー・フェニックス様のリタイア。よつてこのレーティングゲーム、リアス・グレモリー様の勝利となります』

「うん、終わったのか？」

「先輩、皆さんを止めに行きましよう」

そうだな、と俺は校庭に説得に行くのだった。

数日後、俺は普通に登校していた。

あの後、校庭に行くときと立っていたのは兄貴とスパルタスだけだった。

他の奴らはメフィストに運ばれてアーシア先輩の元で治療されてたよ。

「おお、圧制者よー」

「回復障害だぞー！ぎげんなあ、テメエー！」

兄貴が宝具を使い心臓を抉る、心臓周辺が再生しにくくなる、自分の胸に手を突っ込んで傷口をスパルタクスが広げる、呪いが掛かった肉片が捨てられて心臓が瞬時に再生、宝具発動、兄貴が回避する、宝具を叩き込む、以下ループ。

「どういふことだよ、霊格にダメージ行つて消えるだろ！宝具使つて消えてたじゃん、FGO仕様でHP回復でもしてんの！」

「スパルタクスさん、先輩が可哀想です。そろそろ、機嫌を直して下さい」

「フハハ、压制者に従う者よ！ 汝もまた、愛すべき压制者なり！」

「お風呂、禁止しますよ？」

「……屈しはせぬ……屈しはせぬぞ！」

「どうしてもですか？」

「ぐぬぬ……良いだろう、庇護すべき弱者の嘆願である。弱者に守られるマスターはもはや压制者たり得ぬ、だが再び压制者となれば我は立ち上がる。努々、忘れぬ事だあ！」
俺の身体はボロボロだあ、状態だったのを心配したマシユの説得により何とかなつた。

ああ、うちのスパルタクスなら今頃、家の浴槽で浸ってるぜ。

そのまま授業を受け、そして下校する日々を俺は送っていた。

最近、グレモリー先輩が頻繁にエンカウントしたり一誠先輩によくもなんて恨み言を言われるが、まあ普通である。

普通の毎日、それがそろそろ終わるだろうなと俺は確信していた。

そう、それは墮天使のなんか偉いのがやってくるって記憶があるからだ。

こないだ球技大会だったし、そろそろだろ。

ちなみにマシユはソフトボールで活躍しました。

金属で叩くには慣れてるもんね。

「先輩、先輩」

「どうしたマシユ？」

「困っている人がいます。助けるべきでしょうか？」

マシユの視線の先には、白いローブを身にまとった怪しい二人組が居た。

何故か、変な絵が足元にあるし胡散臭い。

「迷える子羊にお恵みを〜」

「そつとしておこう」

「えつ、でも……でもお……」

そんな捨て犬を見つけたような目で、だいたいウチはもう大変なんだから飼うことは出来ません。

だが、この上目遣いである。

仕方ないなあ、いいものを見せてもらえた礼くらいはしよう。

「あつ、貴方！今日の糧を私達に与えてくれませんか！」

「断食、頑張ってください！頭に香油を付けた方がいいですよ」

「違うよお！断食なんかしてないよお！お腹が空いてるだけだよお！」

「あつ、ちよつと！ええい、放せ！これだから宗教関係者は！」

そんなんだから、日本の宗教に対するイメージが悪くなるんだ。

「貴方宗派はどこ、カトリック？それともプロテスタント？」

「午前二時派です。種火成功派も兼任しております」

「えっ？もしかして、聖書の神は拜めてない？」

「あつ、はい……じゃあ、アクシズ教徒です」

俺の言葉を聞いた白いローブが、ゆっくりと離れてもう一人のローブと何やら集まって話し始めた。

「アクシズ教って何、土着の宗教？私がない間に、そんなの広まったの？」

「と、取りあえず詳しく聞いてみることはどうだろう。どんな宗教でも慈悲深い行いを推奨してるはずだ」

「そ、それもそうね。行つてくりゆ！」

おいお、聞こえてるぞ。

あと、マシユは財布から千円札はしまいなさい。

こういうのは一度上げるとずっと要求してくるんだからな。

「あの、私アクシズ教について何も知らないんで教えてくれたら……なんて」

「それは可愛そうに、アクシズ教徒は日本のほぼ全ての方がそうですよ。ええ、彼らは忘れてるだけで前世はアクシズ教徒なのです」

「えっ?」

「そうですね、教義としましては汝、成したいことを成すがよいとあります。簡単に言えば、犯罪じゃなきゃやってもいいよ、そこに愛があるならって意味です」

「邪教じゃないのそれ!」

俺がおかしな宗教家に俺の信奉する宗教を持ちだしたら、ガチギレされた。

だがしかし、アクア様はアレでもすごい神様なんだぞ。

俺だつて転生担当は悪魔だけど転生者であることは変わりないから敬うべき、そうすべきなんだかな。

「ほ、他にはどんな教義が? お恵みを与える感じのとか、ないかなあ?」

「悪魔殺すべし、魔王しばくべし、ですかね?」

「過激だよ! 流石の私たちもそこまでじゃないよ!」

えっ、なんでケチつけてるの?

お前ら敵対してんじゃないの?

人に迷惑を掛ける悪魔は殺すべきだろ。

バニルや俺を転生させた悪魔みたいに利益を与える訳でもなく、迷惑を与えてくる害虫は駆除しなきゃ。

まったく、これだから隣人を愛せとか言つて悪魔を生み出した神様を拜めている宗教

の奴らだぜ。

「うつせえーなあ、馬小屋で生まれた大工の息子を崇めてるくせによ……ペッ！」

「違うから、それ誤訳だから！」

「ああ、俺が間違っているのか！違うから、やればできる子だから！アクシズ教徒が上手くないのは世間が悪いんだよ！俺は悪くない、だって悪くないんだから！」

「ダメだよ！貴方、間違ってるよ！絶対、改宗した方がいいよ！」

「何がダメだよ！今を楽に行きなさい、自分を抑えず楽な方へと流されなさいって神の言葉を知らんのか貴様！」

「最悪っ！最悪だよ、その宗教！人を堕落させてるよ！」

まったく、人の善意を蔑ろにするなんてひどい奴らである。

だからマシユ、千円札じゃなければと五千円札を出すのはやめなさい、トンチじゃないんだから。

「その君はどう思ってるんだ！まさか、君はアクシズ教徒か？」

「先輩、えつちいことは良くないと思います」

「ええ、まさかの裏切り!?マシユ、お前もか！」

結局、マシユが一万円札を上げて宗教論争は終わった。

慈悲深いだろ、ガラハッドさんは修道院育ち、きつとそのおかげだろ。

「おう、感謝しろよ……チツ」

「しないよ！少なくとも舌打ちした貴方にはしないよ！」

呼んでる……安珍様……待っててくださいねえ……

新しい石が来た、希望の石が現れた。

さて、チキチキサーヴァント召喚の時間である。

「ご主人、猫缶を召喚するのだぞ！もしかしたら金払いがいい奴がいいワン！」

「おう、ダメそうなら山でイノシシでも狩ってくるぞ？」

「マスター、株で稼ぎましょう。大丈夫です、錬金術師ですから」

「それ、絶対ダメな奴ですよ。僕、新しいゲーム欲しい！ゲーム召喚しよう！」

「テルマエ、テルマエを所望する」

キャットの野郎が後ろから抱き着き、なお背中中は幸せ。

豚肉を片手に、山を見ながら兄貴が提案し、なおそれは特売品。

善意で言ってるけど絶対溶かしそうなユニクロを着たパラケルスス。

それと、子供かっという感じのアレキサンダー。

あと、風呂ガイジのスパルタクスに俺は揺さぶられていた。

「あれ、メフィストは」

「イヒヒヒ、わたくしお手伝いを」

「おい、ちよつとーなんで石を、あああああー!」

思い切り、目の前で聖晶石を叩き割る悪魔がそこにはいた。

勝手に石を使うとかりアルファイト必須案件だぞ、ぬわっー!

光は、三つだった。

つまり、サーヴァントである、ヤツター!

「先輩、家族が増えますね」

「も、もう一回言ってもらえる?」

「うん?」

小首を傾げるマシユ、かわいい。

そんな風にほっこりしていたら、俺の周りにいたサーヴァント達が離れていた。

おう、どうした急に?

「マスター、後ろ後ろ」

「えっ、後……ろ……」

「サーヴァント清姫……こう見えてバーサーカーですよ。どうかよろしくお願いしますね、マスター様」

「えっ?」

「えっ?」

「なにそれこわい」

あ、あんまりだあああああ！

空前絶後の超絶怒涛のバーサーカーマスター、バーサーカーに愛され、バーサーカーに命を狙われる者。

猫、ドM、ヤンデレ、すべてのバーサーカーに愛された俺はフランシスコ！ザービー

エール！

「……ハッ、意識が飛んでたわ」

「フッフ、マスター愛しいお方」

「近い近い怖い怖い」

「嘘って、わたくし大嫌いなんですの」

「や、やだなあ！きよひーマジきよひー最高だわ」

「正直な方って素敵ですわ」

なんだこれ、なんだこれ！

なんでバーサーカーばっか出てくるの！

しかも清姫、きよひーなんで！

それとなく会話が成立するけどみんな綱渡りだよ！

ドラクエみたいに変更肢があつてないような物だよお！

「あの、清姫さん。マシユ・キリエライトです。よろしくです」

「シヤアアアア！」

「えっ？」

「おっと失礼、本能的に盗られまいと……嫌だわ、慎みに欠けてましたわ」

助けて、誰か助けて！

兄貴、目が合ったよね、合ったよね！

胴体に太ももを絡み付かせてくるこのエロテロリストどうにかして、下半身がヤバいから！

「坊主、女難の相が見えるぜ。ドルイド的に」

「なんのフォローでもないよ！あと、お前が言うなよ！」

「食事にセックス、眠りに戦。何事についても存分に愉しみ抜く。それが人生の秘訣だよ」

「子供がそういうこというじゃねえーよお！」

「ご主人が望むなら、ただし正妻の座は譲らないワン」

「お前まで来るなあ！やわら……や、やめろー！俺の傍に近寄るなあ！」

か、家族が増えました。

一悶着あつた頃、清姫の歓迎会とのことでマシユが頑張つた。

ちなみに、ローストビーフと生姜焼きとチキン南蛮とステーキである。

すげえ、みんなの要望の結果は肉ばかりやでえ。

「アレキサンダーさん、サラダは如何ですか」

「ん、野菜はいいや」

「キャットさん、サラダは」

「オニオンは天敵、慈悲はない」

「クーパーリンさんは——」

「無理だ、もう腹いっぱい。だが、断ることは……」

サーヴァントなお腹いっぱいになるんですね。

あとパラケルススは善意だと思ふけど勧めるのはやめなさい、彼つてば断られない系の人だから。

そういえば、メフィストの姿がなかった。

なんでだろう、雲隠れしているのか？

「メフィストさんなら面白そうな予感がするつて出かけました」

「よくない予感がする」

「マスター、あーん。はい、あーん。お口を開けて、ほらあーん」

「こつちか、こつちの予感か！」

やめてください、お腹いっぱいです。

甲斐甲斐しく、清姫にお世話されるのであった。

俺、雛鳥の気持ちを味わったぜ。

そろそろ家が手狭になったな、グレモリー先輩に頼んではぐれ悪魔狩りでもして稼がしてもらおうか。

そんなことを考えながら、眠った深夜の事だった。

ゴソゴソ、ゴソゴソ、そんな音に俺は目が覚める。

うん？なんだか下半身があつたかいような……はうつ!?

「ますたあ……ああん！」

「うおおお！犯す気か！エロ同人みたいに、エロ同人みたいに！」

布団を捲ると、脱ぎかけた着物を着た汗びつしよりの清姫がいた。

股の間に、股の間にである。

「わたくし、ランサーでしたら慎みがあつたのですが、バーサーカーですので」

「なんの説明にもなつてないよ！」

「理性というか竜というか、捕食者の本能的に仕方ない。ええ、これは仕方ないのです」

「だから水着の時は純情乙女なのか……ダメ、引つ張らないで！」

「我慢しなくてもいいのですよ、うふふ。こんなに滾らせて、どうか私にも触れてくださいまし。嘘を吐かず、触れたいところへ。それがわたくしの望みです」

「これ以上はダメだから、あつ……」

小鳥の鳴き声に、俺は朝かと呟いた。

俺の横では、ますたあなんて寝言を言う清姫がいる。

あと、頬擦りはやめてください角が刺さって痛いです。

はあ……。

「朝チュン、朝チュンなの——」

「先輩、おは……」

「あつ」

マシユが無言でドアを閉めた、そして今度はノックしてくる。

お、おかしいな？なんでまた入ろうとしてるのだろうか。

「先輩、おはよ……おかしいなあ夢じゃなかった……」

「マシユ、説明をさせてほしい。俺は天井を見てただけで、俺からは動いてない」

「先輩、最低です……」

そつと、ドアを閉めて降りていくマシユ。

バン、とか勢いよくではなくそつ閉じである。

なんだか、意味深ですごく罪悪感がががが。

取りあえず、清姫起こすか。

「起きろ、起きてくださいマジで」

「ますたあ、朝からですか？うふふ、でも良いんですよ」

「おおつと、まさかのキラーパス！俺、先に下に行ってるから」

「ああ、これが賢者タイムって奴ですね。冷たいですわ、でもそれもいい」

もうダメだコイツ、なすことなすことが全部良い方向に解釈される。

俺は、考えるのをやめた。

「まあ、なんだ。よく、柔肌は別格だつて聞いてたし、仕方ないよな」

「イヒヒ、昨日はお愉しみでしたねえ」

「まあ、何事も経験ですね」

「マスター、これ……やつぱり大事な物ですから」

サツと、パラケルススが何かを渡してくる。

見れば、避妊具だった。

もう、お前の善意が一番つらいよ！

みんなのフォローが最悪だよ！

「酒池肉林、英雄色を好む、だが浮気だけはダメだぞご主人！」

「婦女を蹂躪する、まさしく圧制者であるぞ！何？同意の元なら圧制者ではないのか……そうか、そうかあ……」

「そうですねよ、わたくしとマスターは両想い、キャッ！」

無言でご飯を食べるマシユを見ながら俺は俯く。

この空気、なんていうか死にたい。

殺せ、いつそ殺してくれ！

「マシユ聞いてほしい」

「……」

「俺は何にもしていないんだ！本当だよ、清姫だって夜這いは掛けるくせに恥ずかしがってたし！なあ！」

「い、嫌ですわ。そそそんなことは、確かに殿方のああ……きゅ〜」

「し、死んでる！いや、気絶してるニャン！あつ、あまりの動揺に間違えたワン」

ほ、本番はしてないよ。

マシユ、なんでこっち見てくれないの、ねえつてば！

「先輩」

「はい」

「最低です」
「……はい」

私の拳を高めたのは信仰心！主の思し召しだ！

「私は罪を犯しました。まさか、夜這いを掛けられるとは考えもせず、それを明確に拒絶することは出来ませんでした」

「ぐ、具体的にはどこまで進んだのでしょうか？」

「えっ？いや、その……何も、ただ見られてというくらいでして……あのこれ、言う必要ありますか？」

「……許しましょう。貴方は女性を傷付けないように行動して別の女性を傷付けてしまいました。悔い改め、一人の女性を愛するのです。主は、貴方の事を何時だって見守っていますよ」

「あの、俺の質問はスルーでしょうか？」

「貴方に神のご加護を……」

俺は、スルーなのかと言いたげな顔でダンボールから頭を出す。

すると、反対側からアジア先輩が出てきた。

さあ、学校に行きますよと何事も無かったかのように振る舞う姿は、懺悔室の出来事は外には漏らさないという体現なのだろう。

でも、こんなちやっちいのだとバレバレだと思えます先輩。

「行きますよ、先輩」

「マ、マシユ……」

「もう、反省して下さい」

ありがとう神様、ありがとうアーシア先輩、俺は感謝しながら段ボールの懺悔室をシユウウウーツ!超エキサイティン!

「あああああ!ダンボール二つも使って作ったお手軽懺悔室があ!」

「アーシア先輩、頭だけ入れるのは懺悔室じゃないです」

「そんなあ、アレキサンダーさんとの力作だったのに」

まさに外道、アーシア先輩には悪いが防音性が足りないから壊すしかない。

ダンボール懺悔室は悪い文明、いいね。

「何してるんですか?あれ、アーシア先輩はどうしてダンボールなんか握って」

「そつとしておこう」

「あつ、はい」

マシユと玄関に移動すると後ろから待つて下さいとアーシア先輩の声が聞こえた。

でも待たない、悪いがメインヒロインはマシユだから先輩は放置です。

暫くすると駆け足で先輩が出てくる。

そして、そのまま俺に指を向けて……えっ？

「ガンドー！」

「うおっ、な……へぶしっ！」

「流石に悩みを聞いてあげたのにアレは酷いと思います」

「だって、興味津々だったじゃないですかあ！なんで年上の女性にエロい話しないといけないんだよ、へぶしっ！」

やっべえ、風邪引いたのかくしやみが止まらねえ！

でも、真面目にやらずに踏み込んできた先輩が悪いと思うぜ。

このむつつりスケベさんが悪いんだ。

「やめて下さいアーシア先輩、先輩が可哀想です」

「マシユ……」

「確かに先輩は浮気なんてするゴミクス野郎ですけど、未遂だったんです。許してあげましょう」

「本当は怒ってるんだろ、もうやめてくれえ！」

「いえ、自分でも分からないのですが何だかイライラして……不倫とか浮気とか、死ねば良いのになって……」

ランスロット、お前のせいだな！

畜生、お前ってば娘の教育ミスったんじゃないか!

子育てしてないか、なお悪いわ!

アーシア先輩とマシユに平謝りして、学校に登校した。

一時限目、数学。

転生者である俺は、数学くらい余裕だぜ。

「あああああ何だよ積分って、社会に出て使わねーよ!エクセル勉強しろよおお!」

「先輩、微分の逆ですよ」

「マシユ、俺達は同級生だから先輩じゃないんだぜ」

訂正しよう、数学くらい(サーヴァントがいるから)余裕だぜ。

この後滅茶苦茶マシユに勉強を教えてもらった。

伊達眼鏡、最高に可愛いです。

昼休み、山のように机に食べ物を置かれている小猫ちゃんが俺の方にやってきた。

えっ、俺ってばモブらしく寝てるよ。

マシユは、女子の友達と喋ってる。

だから俺はソロプレイヤーらしく昼休みを過ごしてるんだ。

「そのぼっちさん」

「ぼぼぼぼっちちゃうわ、ソロプレイヤーだし!孤高なんだよ」

「何言ってるか分かりません」

うわあ、幼女からの冷たい視線にビクンビクンしそう。

俺つてばアクシズ教徒レベルが足りないようだ。

それでいいじゃない何の用だろうか。

「あの、これで勘弁して下さい」

「カツアゲじゃないです、止めて下さい」

「じゃあ何の用なの？」

「部長からの伝言です、教会の人間と関わらない方が良いつて」

おっと、また監視でもしていたのだろうか。

そんなことを伝言を聞いて思う。

小猫ちゃん、話は終わったぜと振り返ってスタイリッシュに焼きそばパンを食べる。

凄い、一回で半分も食べてやがる。コイツ、出来る。

それはそれとして、此方としても関わる気はないから大丈夫である。

「そう思っていた時期が俺にもありました」

下校していた俺は目の前の光景を見ながらそう思った。

そう、そこには関わるつもりが無かった教会の奴らがいたからである。

「ヒヤツハー、コイツは預かったぜ」

「アイツらの仇、取らせて貰うぞ人間」

いつぞやの小物神父と痴女墮天使が、グルグルにされたメフィストを持つて騒いでいた。

確か名前はフリードとカラワーナだったか。

というか、メフィストはなんで捕まってるのさ。

「マ、マスター……」

「フハハハハ!このロープは擬態の聖剣、聖なるロープだ。コイツは縛られながらダメージを喰らうのだ!さあ、次はテメエだ!コイツと違って殺せそうだから、コロコロしてやるぜ!」

「おい、アイツをやるのは私のはずだ!」

「うるせえ、こつちだって恨みが堪ってるんだよ!」

な、なんだってー!あのロープは擬態の聖剣とやらが姿を変えた奴で継続ダメージを与えているだって!

フリードとやら、説明乙。

っていうか、仲間割れしてんじゃねえよ。

「よし、帰ろうか」

「えっ、でも先輩」

「そ、そうですよ。流石に可哀想では？」

いや、だって殺せなかつたみたいなこと言つてたし放置でも平気でしょ。

最悪令呪で呼べば良いし、ギル様に捕まつてる訳じゃないから平気平気。

「おっと、オレッち達を無視とは良い度胸だな」

「止めておけ、死ぬぞ……俺がな」

「お前がかよ！ボケに定評のあるフリードさんが思わずツツコンでしまうとは、お前やるなあー！」

「オマエモナー」

やっべえ、つべーわ、なんか波長とか合う感じだわ。

それって俺が小物臭がするってことなのか、ウソダンドコドーン！

「先輩、後ろに！」

「私達を守ります」

「おやおやあ、チミはアーシアちゃんじゃございせんかあ？おいおい、女の後ろに隠れて恥ずかしくないのか？」

「俺を倒したければマシユ達を先に倒せ」

「うん？お、おう！一瞬、何言ってるかわかんなくなつたわ！んじゃ、殺すわ」

やだこの神父、日本語が可笑しい。

なんでそこで殺すってなんだよ、神父は祿なのがないってわかんだね。

フリードをアーシア先輩、墮天使をマシユが担当することになった。

「ハツ、人間風情が!この間のようには……はへ?」

「ふっ!はああ!やああ!これで倒れて!」

墮天使の頭上からマシユが盾で殴り、地面に叩きつける。

そこに追撃するように空中から地面に向かって盾を振り下ろす。

地面と盾で挟まれて苦しんでいる所にマシユが追撃を加え、止めるよう懇願する墮天使にエクストラアタックを決めた。

この間、僅か数秒。

うわ、サーヴァント強い。

「先輩、やりました」

「あー、お疲れ」

「もう、戦闘中に頭撫でないで下さい」

「畜生、リア充爆発しろ!」

さて、先輩達はどうかなとえへへと笑うマシユを撫でながらフリードを見た。

そこには、猛攻を受けて傷を負ったアーシア先輩が立っている。

あれ、ピンチかもしれない。

「へへへ、随分とエロい格好になったじゃーないのお！悪いけど、天閃の聖剣によつてオレツちの速度は数倍よ！」

「この程度、どうつてことはありません」

そう言つて、アーシア先輩が口角を上げる。

「じゃあ、そのまま串刺しになつて……」

フリードが恐ろしい速度で前に出る。

これは不味いと思つたら既に終わつており、アーシア先輩の腹に刺さつた剣は背中から突き出る。

「はあ？」

「つ、捕まえました」

「ちよ、あれ！抜けねえ！離せ、離せつて！」

急いで助けなくてはと走り出そうとして、俺は様子がおかしいぞと足を止める。

「逃がしません。はああああ！」

「ぐつ！あつ！ちよ、強つ！やめ、やめろ！」

「悔い！改め！なさい！やあああ！」

腹に剣が刺さつた状態でフリードを先輩が殴る殴る殴り続ける。

堪らず、剣を手放したフリードを捕まえ片手で地面に投げ、更にそこからマウントを取る。

あの、身体に剣が刺さってますよ。

そんな事は怖くて言えなかつた。

「やりました、あつ今抜きますね……どうぞ」

「うわーい、聖剣だ……」

「スパルタクスさんとの修行の成果が出ましたね」

「はい、師匠も魔術師は格闘技くらいできないとダメと言っていましたから」

パ、パラケルスス！またお前か！

ゲイボルグ、サーヴァントでは、即死ムリ

「唸れ、灰猫！」

唸らない。

ビュン、つと剣が振られる。

姿は変わらず、そのままだ。

「やっぱり、使えねー」

「魔力……とも違う物ですね。神秘というよりは、この世界特有の何かを用いるようです」

俺達は手に入ったパチもんの聖剣を調べていた。

フリードが使えたのに、俺には使えない不思議な代物。

まあ、選ばれたやつしか使えないのが聖剣なのだが、あんなキチガイ神父を選んだとしたらこの聖剣は汚染されてる。

「パチもんだ、これは……だって、エクスカリバーは返却されてるはずだもん」
「伝承通りでしたらね」

セイバーは木に寄り掛かって寝てる奴知らんのか。

あのとき、看取られたセイバーが報われないだろ。

返したと言ったな、あれは嘘だ。

酷いな……そんな事実があつたらずつと、彷徨うことになるぞベティ。

「でもさあ、この聖剣とやらどうする？ 分解しちゃおう？」

「そんな恐れ多い」

「そうですね、自分が間違つてました姐さん」

「姐さん!?!ちよ、ちよつとどういうことですか」

いや、なんか自然に……アーシア先輩マジリスペクトつすわ。

っべーわ、まじべーわ!アーシア先輩の拳とか、怖すぎ。

「マスター、ここで面白いお話が」

「嫌な予感」

「どうも、墮天使のコカビエルとやらがこの街をぶつ壊そうとしてるらしいですよ」

「やつぱり!メフィストの面白いは最悪だよ!」

そうだった、墮天使さんが来るんだった。

でも。エクスカリバー合成するために来るだけじゃないの?。

あれか、ヨン様リスペクトしてるのか?王鍵作乐的な奴か。

「うんじゃ、あれか。一応、見に行く?」

「おうよ、ケルトの戦士だろ！気張っていこうぜ」

「兄貴、俺はケルトじゃないよ」

「おお、マスター！反逆の同士よ」

「俺、革命家じゃないよ」

なんだかやる気は満々みたいだし、諦めて行くことにした。

マシユにおんぶして、学校まで高速で移動していると生徒会長達がいた。

「せ、生徒会長!?!」

「どうして、一般人が……一般人?」

「生徒会長悪魔だったんですか！生徒会も!」

あつ、そうだった。

なんか舌みたいな神器を持つてる奴が生徒会で悪魔やってたわ。

あと、お姉ちゃんが魔王だったわ。

なんで忘れてたんだろ、姉ちゃんのキャラ凄いのに。

「ソーナちゃん?」

「なっ!やつ、何言ってるんですか!ぶち殺しますよ」

「心の底からごめんなさい」

思い出してたらつい言ってしまった言葉に、会長が顔を真っ赤にする。

不覚にもときめいてしまったでござい。

いたたた、ごめんマシユ。

「むう、先輩は私だけの先輩なんですよ」

「はい」

「自覚して下さい」

そんなマシユに拗ねられる一幕があつた物の、俺達は会長が何をしてるのか観察してみた。

ふむ、なんか手からブワッてやって結界を張っているようだ。

「会長、中はどうなってるんですか」

「貴方、というか其方の方の格好からしてリアスが言っていた人達ですね」

「何を言ってるんやら」

「厳しいことを言いますが、神器を持っているからといって何か出来るということはありませんよ」

それは会長なりの忠告だったのだろう。

ここまでは良かった、会長がそこでやめたのなら本当に良かった。

「だから、ジツとして下さい。良いですか、何もしないで下さい」

「フッフ、フハハハ！ 汝、行動の自由を奪い、人の尊厳を踏みにじる愛すべき圧制者よ！

我は压制に反逆するううう！」

「な、なに!？」

マツチヨだ、マツチヨが飛んだ。

飛んだマツチヨは腰を捻り、空中で結界に向かって拳を振るう。

凄まじい暴風と共に結界は崩壊し、ガラスの割れるような音が響いた。

「な、なななな……」

「うーん、よし行くぞマシユ」

「ま、待ちなさい！ どういう状況、なにこれ!？」

何って言えば反逆である。

慌てる生徒会長に説明するのも億劫だったので、俺はその横を通り過ぎる。

校庭、そこにはグレモリー先輩と愉快な仲間達がボロボロになっていた。

転生者君は、ボロボロになりながらも堕天使らしき人と戦っている。

黒い長髪、鋭い目、化物のような口、堕天使というより悪魔である。

「むう、むむむ……」

「先輩、スパルタクスさんが迷ってます」

「たぶん、どっちを倒せば良いか分からないんだ」

取りあえず逆らってから考えるみたいな思考回路だったんだろ。

それに来てみたら戦いがあり、どちらが劣勢か見極められないのだろう。

「ぐっ、増援か。人間風情が増援とは舐めら——」

「ニイ！ 圧制者よ、汝を抱擁せん！」

一瞬の出来事だった。

墮天使の奴が喋った瞬間、スパルタクスは飛んだ。

「あ、あれは！」

「知ってるのか、マシユ」

「ハイフライフローです！ この間のプロレスでやってた、フィニッシュムーブ！」

君達、俺が知らない間に何を見ているんだと困惑を隠せないでいると状況は俺なんか関係なしに変わる。

「ぐあああああ！」

「フハハハ、ティツ！」

「あ、あれは！」

「今度は何だ」

「アナコンダバイスです、変形の腕極め式袈裟固め！」

墮天使のコカビエルさんから悲鳴が上がった。

スパルタクスが身体に絡みつき、ふんずほぐれずな感じでプロレス技を掛けていたか

らだ。

「おい、俺も混ぜろ！」

「えっ、ぐげえ!？」

「ラリアットです、ラリアットですよ先輩！」

「味方、それ味方だよ兄貴！」

なにこれえ、とハイライトの消えた目でスパルタクスを見ていたら後ろで霊体化を解除した兄貴がその最速のクラスに違わない動きで走り出し、ポカーンとしている転生者君へラリアットを噛ましてしまった。

そのままゴロゴロ転がり吹っ飛ばされる転生者君。

とぼっちりである。

「あ、貴方達何しに来たの！」

「グレモリー先輩、いや、その……」

「なんだかんだと聞かれたら！先輩！」

「えっ、答えてあげよう世の情け？」

「世界の平和を守るため、愛と正義の悪を貫くラブリーチャーミーな私は、マシユ・キリエライトです」

「マシユ、口上が微妙に違うよ。世界の破壊を防ぐために抜けたよ」

「ふざけてないで、真面目にやりなさい！」

グレモリー先輩が髪と同じくらい顔を真っ赤にして怒鳴っていた。

すみません、うちの先輩が早くって感じで呼ぶからつい。

頭を下げながら、心の中で謝罪する。

「おい、何してる！マスター、命令を！早くオーダーだ！」

「分かったよ兄貴、サーチアンドデストロイ。サーチアンドデストロイで」

「取りあえず、ぶつ殺せば良いんだろ！よっしゃ！」

元氣良いなあ、と槍を構える兄貴を見る。

鋭い切っ先からは赤いオーラが陽炎のように出現し、それが宝具を使うという前兆だと分かる光景だった。

知らないオッサンが、なんだアレはなんて言うくらいである。

「喰らうが良い、我が必殺の一撃！ゲイ——」

『Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide! Divide!』

! Divide!』

「誰だ、俺の邪魔をする奴わ！」

声が聞こえた。

まるで機械から聞こえるような声だ。

気配察知から兄貴は上空を睨み付け、魔力の消えた槍を構えながら下手人を見る。宝具の魔力を何らかの方法で削った下手人、俺はその答えを知っている。

「無様だなコカビエル。アザゼルの羽は常闇のように美しいのに、お前と来たら……」
「がああああ、その声はあああああ！」

「フンツ」

白い影が空から光となって落ちてくる。

それはコカビエルを抑えるスパルタクスの元に落ちた。

落ちた光はスパルタクスを吹き飛ばし、そして制止した。

その瞬間、奴の姿が見える。

白い鎧、まるでロボのようなゴツゴツとしたフォーム、その名は白龍皇。

兄貴の宝具を半減の力で発動できない程に魔力を減らした下手人だ。

「シッ！」

「ほお」

赤い軌跡が下から上と唸るように描かれる。

それは兄貴の奮う槍の残像だ。

掬い上げるように奮われ、クルリと回し、そこから前に向かって三段突き、流麗な槍の一撃だ。

だが、それを白龍皇は下がりながら拳を振るって相殺した。

「なかなかやるな」

「抜かせ、若造が！」

「ば、馬鹿な！今まで一方的だった兄貴と互角、エミヤ並ってことか!?

「名の知れた武人と見るが、今は機会じゃない」

「ぐううう……ハアハア、よくやったぞヴァーリー」

「何か勘違いしているようだな、まあいい」

「何っ、まさか！」

兄貴から視線を外した白龍皇、彼は先程と同じように光の速さで移動する。

高速移動で、ニヤケているコカビエルの元に向かったのだ。

そのことで、コカビエルが何かに気付くがもう遅い。

白龍皇はそのまま拳を腹部に叩きつけ、空に飛び立ったからだ。

「ア、アザゼルウウウウウウ！」

コカビエルのなんだか残念な叫びが聞こえるのだった。

夏だ！海だ！テコ入れだあ！

夏だ、海だ、水着だああああ！

コカビエルさんとやらいなくなつた後、交渉の末に俺達は大金を手にした。

えっ？聖剣を売つたんだよ、言わせんな。

「と言うわけで、ラムレイ号に乗って海に来たわけですが」

「よし、釣りだ！」

「おお、これがオケアノス……またの名を太平洋」

「マスター、かき氷は如何でしょうか？素材……メフィストが用意したので私じゃないですよ」

いつも騒がしい奴らがハツチャけている。

イベントじゃないのに、みんな水着だから何だか素材を集めたくなる。

この地元を開拓しようぜ、無人島のようにな。

まあ、ダメである。

「海！おお、圧制者よ！汝に、反逆するううう！」

「止めて下さい！ちよつと、その貴方！それ以上は立ち入り禁止ですよ！」

「フッフ、フハハハハハ!」

あーあー、聞こえない知らない、俺とは関係ない人ですな。

砂浜で現実逃避していると、誰かが肩をつついてきた。

「ますたあ……どうですか、ランサーではないのに水着ですよ」

「ねつとりしていて、メスの顔だワン」

「これが地球の夏……暑さに負けずに頑張りましょう、先輩」

振り返ると、そこにはいつの間にかランサークラスにジョブチェンジした清姫、Tシャツ短パンに不満そうな顔のキャット、それとパーカーを着たマシユがいた。

やべえ、マシユさん白い水着似合ってますね。夕日をバックにあとで先輩って呼んで貰おう。

「それにしても、どうしてタマモは不機嫌そうなんだ」

「キャラが被る……」

そのまま、ちーんと効果音が聞こえそうなほどにため息を吐くタマモ。

これでキャットじゃないの呼び出したら、正妻戦争が起きるかもしれない。

「ねえ、ますたあ?どうして、こつちを向いてくれないんですか?」

「それはきよひーが顔真つ赤になりながらアピールしてくるのを楽しんでるから」

「うううう、意地悪ですよ……」

「はいはい、世界一可愛いよ」

「えへへへ」

ああ、こうしてれば普通に可愛い女の子なんだよな。

たまに包丁じつと見てたり、ドアの隙間から覗いてたり、パンツ盗んでたりするけど、普通の女の子なんだよなあ。

いつの間にか婚姻届け出されたり、戸籍が無くて問題が発生したり、色々騒動を起こすけど普通の女の子なんだよなあ。

普通って、なんだっけなあ。

「むう、清姫さん離れて下さい。先輩は……日焼け止めを塗るんです、ええー！」

「マシユさん、ここはサンオイルが一番かと」

「暑い……ご主人、キャットもマスターをヌルヌル塗るべきか？塗るならパラケルススから良い物を貰ったぞい！なんと、ローションなのだあ！デーナー！」

「ダメです！」

や、やめろーというキャットがレンタカーであるラムレイ号に、マシユと清姫によって連行されていく。

まあ、暑いのだめみたいだし水が嫌いだから海に入らないって言ってたし、しばらくは冷房の効いた車内にいる方が良いんじゃないでしょうか。

さて、水着も見たし海に行くか。

「よお兄ちゃん、やきそば喰わないか?」

海に行こうと立ち上がった俺の前に、販売員なのか知らない人が話し掛けてきた。

首に掛ける紐の付いた台を持って、その上には出来たてらしきパックの焼きそばが入っている。

初めて見たが、こうやって持ってきて販売する人がいるのか。

「じゃあ、一つ下さい。いくらですか?」

「ああ、お代は良いんだ。ただ、少し聞いて良いか?」

「えっ?」

お代はいらない、なんて変なことを言うから俺は戸惑う。

売りに来てるのにお代はいらないって、なんなの?在庫処分なの?

「アンタ、墮天使についてどう思う?」

「ツ!アンタ、人間じゃ無いのか」

アロハシャツを着ている、金髪のオッサン。

妹が好きそうな奴とか、うさнкуさいけど助けてくれる中年とか、似たような格好している金髪アロハ。

チャラそうだなと思っていたが、俺は墮天使というワードと見た目の情報が一致して

正体を割り出した。

「もしかして、アザゼルか！」

「ほお、墮天使って言葉だけで会った事も無い俺だと気付くとは」

その答えは正解である、そういう反応だった。

まさか、こんな所でアザゼルと遭遇するとは思わなかった。

アニメのように危なくない、なんてことは当てにはならない。

現実は何時だつて予想外で非情である。

「待て待て待てーいま、その痣のを使おうとしたな！それで仲間を呼ぶのはやめてくれ

ー」

「呼ぶ前に殺すつてことか、くっ！」

「違う違う、別に危害は加える気はない」

「ええ〜本当でござるかあ？」

「お前、実は意外と余裕なんだろ！そうなんだろ！」

すまない、条件反射ですまない。

まあ、敵意つてのがないって発言と原作知識からある程度余裕は出来た。

まだ警戒してるけどなあ！

「墮天使の総統？提督？監督？が何の用だ」

「俺は別に戦艦を育成したりしてない、それと映画も作ってないぞ。俺の要求はただ一つ、うちでバイトしないか? 何、少し神器を調べさせてくれればいいんだ」

「な、なん……だと……」

バイト、そんな言葉に俺の心がブレブレに揺れる。

コイツ、教会との交渉を知っているな。

俺が金に困っていると知って、足下見やがったな。

ちくしょうーめえ!

「幽世の聖杯かと思っただが、それとは違う。死者の蘇生ではなく魂を召還、受肉させている。魂を余所から呼び寄せるそれは幽世の聖杯にない特徴だ。魂からの再生くらいは出来るだろうが、無から有は生み出せない。そして、本物は欠片はあるが、本体全ではない。その神器は何だ?」

「それを教えて、俺にメリツトがあるのかな?」

「バイト代は、そうだなあ月々これぐらいだが」

「ゼロが七つ、う……嘘やろ?」

「ちよつとだけ、先つちよだけでもいいから! なつ、なつ!」

ゴクリ、と生唾を飲み込む。

それだけあれば、もう金で苦勞することもないってことじゃないか。

今後一月ごとに増えるかもしれないサーヴァントの食費も気にしなくて良いって事じゃ無いか。

「せ、先輩……そんなっ!」

「浮気、浮気ですね。ふふふ」

「うえ!?!」

アザゼルの提案に悩んでいると、顔面蒼白のマシユとどつから出したと思えるような青龍偃月刀を持った清姫が立っていた。

……これはヤバい。

「ぎ、誤解だ!」

「先っちよだけって、それにゴクリって、先輩最低です!」

「そこかあ、そこから聞いてたのかあ!」

「……殺すわ」

清姫が恐ろしい速度で移動した。

は、早い! 早すぎて、全然見えないぞ!

助けてマシユ、俺はマシユの身体にダイブした。

「うおっ!?!お、俺で無きや見逃しちゃうね」

「よくも旦那様を誘惑して」

「お前結婚してたのか、奥さんいたのかよ」

「……やっぱ殺す」

き、きよひー!

今、ちよつと躊躇ったよね!旦那様と書いてマスターつてのを理解されて、一瞬いい人だつて思つたよね。

流石、堕天使汚いぞ!音だけじゃマスターなんだから、下調べしたな!

それと俺じゃ無くてアザゼルを狙つてくれてありがとう。

「チツ、続きは今度の会談でな!来いよ、絶対来いよ!」

「シャアアアア!待ちなさい!」

バサア、と翼を広げて逃げるアザゼル。

それをピョンピョン跳ねながら、待つてと言う清姫。

どうやら、一難去つたみたいだ。終わつたとは言つてない。

「あ、あの先輩……その、お腹がくすぐつ……ひゃん!」

「えつ、今のマシユ?」

「うううう、離れて下さい!もう、先輩最低です!」

照れてるマシユ、可愛い。

癒やされるわあ。

「ま・す・た・あ、浮気ですか？」

「ごめんなさい、本当に誤解なんです。話を聞いて下さいオナシヤス！」
笑顔でにじり寄ってくる、清姫がすごく怖かったです。

その頃、海では……

「ゲイ、ボルグウ！取ったどおおお！」

「魚だ！ピッチピチですよ、ピッチピチ！」

「イヒヒヒ、これぞまさしく長と呼ぶべきですなあ、パラケルスス殿」

「えっ、ではこれから長と呼ぶべきですね」

「長！長！すごいぞ、長！」

「うおおおお、長！愛すべき、圧制者よ！」

「メフィスト、テメエ！煽りやがったな、うわなにをする」

「ランサーが沈んだ！この人でなし！悪魔！メフィスト！」

「ああ、私が乗せられたから……すみません、ランサーさん」

「勝手に殺すんじゃないか！うおおおお」

「凄い、海の上を走ってる！ブケファラスも……無理？そつかあ……そつか」

「誰だ、海に馬を入れたのは！溺れてるじゃないか！」

今日も、ランサーは苦勞しています。

偉い人の話って長くて眠くなる

アザゼルに呼ばれて会談があることを思い……出したあ！をした俺は、普通に日々を過すごした。

確か、授業参観の時にあるんでしょ知ってる。

それはそれとして英語である。

「先輩、それは」

「豆腐だ。この滑らかさは、中々出せない」

「凄いです先輩！私なんて、ただのキヤメツロツト城……」

「十分凄いいんじゃないんでしょうか、流石円卓の騎士、美術的センスもヤバイ」
「言えない、手抜きだなんて言えない。」

そして、どうやって作ったってクオリティーでマシユってばスゲー。

旦那、俺には芸術は難しかったよ？えつ、鮮度？芸術に鮮度って何の話？

「ハッ!?あまりのクオリティーに精神汚染されるような妄想に耽たづっていたぜ」
「先輩、授業終わりましたよ」

授業が終わり、昼休み。

なにやらコスプレイヤーがどうの言ってるが、見慣れてるからどうでもいい。と、思っていたら人集りが廊下に出ていた。

まったく、アレだろ？魔王の関係者が騒いでるんだろ、知ってた。

「どけっ！邪魔すんな！」

「わわっ、撫でないで貰おうか」

「何、不審者として連行するだど？フハハハ、警備員よ！汝は压制者よ！」

「私にはありません。ただ、今は大事な人が……ああ、あんな所にいた」

いやああああああああ！

もう一回、いやああああああああ！

あれ、ウチの子じゃないかしら！

引っ付かれて鬱陶しそうにしてるケルトの兵士って、ウチのじゃないですか！

抱っこされてるのはウチの征服王じゃないですか！誰だ、おねシヨタ案件って言った

やつ！聞こえてるぞ！

連行されるのに抵抗してるのは笑顔が素晴らしい、ウチのスパルタクスじゃないです

か！

でもってパラケルスス、誤解を招く事を言うんじゃないよ！腐女子から嬉しい悲鳴が

聞こえるじゃ無いか！

「何の騒ぎですか！」

「あつ、ソーナちゃん」

「ソーナちゃん言うなっ！」

「す、すいません」

思わず言つた言葉に会長がすごい勢いで切り返してきた。

もう、誰だつて言つてる兄貴と同じくらい怖い顔だよ。

そんなに嫌か、耳まで真つ赤だし恥ずかしいか。

「はあ……女子高だったからとは言え男性に耐性がないのかしら」

「いや、普通にイケメンじゃないすか。畜生、爆発しねえかな」

会長の横にいる匙先輩が、ギリギリ歯ぎしりしながら兄貴達を睨みつける。

兄貴はそれを見て、八ツと鼻で笑つた。

煽るな煽るな、可哀そうだろ。

「どうも、ウチの身内がすみません」

「まったくです。いいですか、身内が問題を起こさないようにちゃんと見ていただきたい」

「あつ、ソーナちゃん！おーい、あれ？何で無視するの？ねえねえ、ソーナちゃん！」

「……………」

「会長、あそこで手を振っている方がいますよ？どうしました、会長？なんか言ったらどうです？」

「……………死にたい」

両手で顔を覆って、廊下でしゃがみ込むように座った会長がうーうー呻き声を上げた。

仕方ないね、身内が問題児だもんね。

直前の発言のせいで恥ずかしいもんね。

身内がなんだって？（ゲス顔）

「会長、気をしつかり」

「もうやだ、なんで私ばかり…………リアスの問題も私ばかり怒られて、なんで私ばかり」

「ダメだ、手遅れだ。早く生徒会室へ」

生徒会長がぐったりしたで生徒会室へと運ばれていく。

可哀想に、死ぬほど疲れているようだ。

今日は休め。なお、横から張り付くコスプレイヤーに追い打ちを掛けられた模様。

一日の授業を終えると、俺を探していた人物が教室にやって来た。

よお、なんて格好付けながら教室で俺に挨拶するアザゼルである。

「ふっ、久し振りだな」

「……誰？」

「そうか、あの時は顔は覚えてなかったのか。白龍皇のヴァーリだ」

「えっ、誰？」

「お前、わざとだろ」

アザゼルがそんなことを言う傍らから、無言で佇み頭を下げる青年がいた。

紹介からしてコイツがヴァーリらしい、モデルみたいなイケメンだな。

アニメの記憶なんて覚えてないし、現実だと二次元みたいな顔じゃないから意外と分
からなかったりする。

まあ、わざとって言うのは間違いじゃないですけどね。

「ハッ、随分と威勢のいい餓鬼じゃねえか。ここでやろうつてののか？その殺気、さつさと
引っ込めな」

「悪いな、ウチのヴァーリが……」

苦勞してるんだぜ、なんて雰囲気のアザゼルが出すが知るかそんなもんと冷たい視線
を向ける。

そもそも、組織の長なんだから苦勞するのは当たり前である。

俺がどれだけスパルタクスを頑張って面倒見てるか、大変である。

「さて、お前さんには俺の部下として三大勢力のトップ会談に参加して貰おう」

「おい、それだと俺は墮天使陣営って見なされちゃうだろ。そうやってなし崩しのつてのは狡いぞ」

「報酬は応相談だが」

「くどいぞ、俺は日本神話陣営として参加させて貰う」

「えっ、お前そうだったのか!？」

当たり前である。

日本の担当女神はアクア様、つまりアクア様を拝める宗教は日本の国教、アクシズ教は国教である。

ただし、日本人がそれを忘れてるだけである。

「予定が狂ったなあ。教会の奴らは赤龍帝を懐柔するために龍殺しの聖剣を渡したって情報が入ってるのに、こちら側に引き込めないとわなあ」

「何？お前、ゲオルギウス先生のアスカロンじゃないだろうなあ？」

「アスカロンのことを知ってるのか？」

知ってる知ってる、礼装で龍属性付与してアスカロンでぶった切る人の剣だろ。

聖剣渡すとか、教会もやっぱり組織だから真っ黒だね。

夜になり、生徒も帰宅した頃だった。

サーヴァントを引き連れて、俺は教職員達が会議に使う部屋に向かった。中には円卓のような物が用意されており、美形ばかりが座っている。

「あつ、あの時のアクシズ教の人！」

「ドーモ、イリナさん聖剣お買い上げありがとうございます」

「もー！聖剣なんだよ、売ろうとするなんて不敬なんだからね！」

いきなり話し掛けて来たのは、いつぞやのエクソシストだ。

まあ、俺が言えることはそれを買おうとした、お前ら教会が言うなである。

「アザゼル、彼が例の……」

「ああ、聖杯の所持者だミカエル」

「君達、話したいこともあるだろうがそろそろ会談を始めても良いだろうか？」

その言葉を皮切りに会談が始まる。

司会進行は赤い髪の人、染めたのかと言うくらい真っ赤な髪の恐らく魔王であった。

それにしても、暇である。

「よお、お前さんはどう思ってるんだ？」

「……あつ、俺？」

何だか視線が集まっていて、正直困った。

何の話だかまったく聞いてなかったからだ。

和平についてどう思うとか、そんなんだろ。

「取りあえず魔王と悪魔は滅ぼそう。それと教会もぶつ壊そう。墮天使は金次第で考えよう」

「待て待て待てーい！何がどうしてそうなった！」

「教義的に悪魔とかダメだし、教会は商売敵だから」

「お前どういう立場でここにいるんだよ！」

決まっているだろ、アクシズ教徒だよ。

先のこととは分からない、だから今が良ければそれでいい。

要するに、実装されるか分からない新キャラを待つて貯めるより、ピックアップでガチャを回せって、そういうことだよ。

こういう素晴らしい教えがある宗教法人の一員としての立場ですけど、何か？

「おうおう、殺気立ってるがやるってのか？いいぜ、俺は構わねえ」

「兄貴、ステイ」

「俺を犬扱いするんじゃないやねえ！」

まさかのガチ切れである。

でも、周りにガン飛ばしてる兄貴が悪いんだぜ。

「むっ、今なんか」

兄貴と会話していると、首の後ろがビリッと来た。

あつ、これ時間止める奴だわ。

「マスター」

「パラケルスス、分かってる」

後ろから近付いてきたパラケルススの声で、彼が対処したのだと理解した。

そして、校庭に集まる魔法陣と魔術師のようなローブの姿からテロが始まったのだと確信した。

「よし、各自自由行動で」

この中に一人問題児が居ます「誰だ、圧制者か?」お前やああああ!

会談が始まってまさか三十分以内に襲撃である。

この話が纏まってからのタイミング、待ってたのだろうか。

「先輩、何か来ます」

「レヴィアタンの魔法陣、まさか旧魔王か!」

驚愕の声が教室に響いた。

それは魔法陣から現れる人物を誰か特定した魔王によるものだった。

「ごきげんよう、現魔王サーゼ——」

「イイイイヤツホオオオ!」

その時、爆発が魔法陣から出てきた彼女を襲う。

それは配管工みたいな声を上げながら爆弾を投げつけた、ウチのメフィストのせいである。

「なっ!?!」

「ギャハハハハハ!アハハハッハハッ、ゴホゴホッ!噎せましたアハハハ、うえ……」

「開幕ブツパですか。口上かガードの二択でしたね、なかなかやるね」

爆笑するメフィスト、ゲームの解説みたいな事を言うアレキサンダー。

言わせたげてよお、と思わずにはいられない。

なお、開幕ブツパとは開幕で必殺技を放つことである。

「アレが現代の魔術師ですか、嘆かわしい」

「実のところ眠くなってきたのである。でもご主人のために全力出すぞ……これが手加減である！」

さあ、外に行こうとタマモが窓ガラスを割る。

割った所でマシユが先行して俺が飛び降りてキャッチして貰った。

なお、パラケルススはアーシア先輩を抱えて飛んでいた。

おい、アーシア先輩の顔が凄く真つ赤だぞ、お前フラグ立ててないだろうな？

「ハハハ、容赦がねえぜ。本当に敵に回したくねえ」

壊れた校舎の中から、そんな声が聞こえた。

まあ、俺も英霊とか相手したくないと思うよ。

「いいねえ、好き勝手暴れていいなんざ」

「むっ……フフフ、分かったぞ！体制側よ、汝らこそ圧制者なり！」

「ますたあ、スパルタクスさんが校舎をよじ登ってますよ？」

知らない知らない、清姫の言葉なんて聞こえない。

あーあーあー、もうスパルタクスさん使いにくいよ。

どうしてすぐ反逆するの、趣味なの!

「おい、なんかこつち来てるが!」

「敵と味方の区別つかないから!頼んだ!」

「頼むんじゃねーよ! どういうことだよ、クソ!俺も切り札を使わないといけないつてのか!」

アザゼル頑張れ、超頑張れ。

スパルタクスが校舎を登ってるけど、頑張つて逃げてくれ。

「勉強不足ですね。いえ、そもそも魔術のシステムが違うのか。魔術回路を用いていないのにどうやってオドとマナを利用しているのか」

「はあああああ!あつ、パラケルスス師匠考察は後にして下さい」

「アーシア、できる限り生け捕りにしなさい。後で研究に使います」

校庭に降りて好き勝手してるみんなを見ていた。

何やら、近くで魔術師相手にすごいこと言ってるパラケルススが居たけど目的のためなら仕方ない。

魔術師だからそういう思考回路も仕方ない、優しそうでパラケルススも腐つても魔術

師なんだな。

そんな近くでアーシア先輩が手慣れた様子で魔術師を昏倒させている。攻撃も自分の神器で回復して、そのままニコニコ笑顔で腹パンである。

あの戦闘スタイルを確立させたスパルタクスつてば、マジやべえわ。

「一度やってみたかったんですよね。映画で見てる」

「ぎやあああああ!?!」

遠くでは馬に乗ったアレキサンダーが人を引きずっていた。

数人がロープに巻かれて、校庭を引きずられている。

魔術が馬に当るが馬はなんのその、十数人も牽引してるが速度は衰えない。

まあ、そうだよな。ブケファラスも英霊だもんな、馬だけど。

もしくは宝具扱い、神秘の強さ的に攻撃が効くわけがなかった。

「マシユ、この戦い我々の勝利だ!」

「先輩、それはフラグではないでしようか?」

マシユの言うとおり、戦場に変化が起きた。

どうやら俺が貴族の真似したせいでフラグが立ったらしい。

新手の奴らが魔法陣によって現れた。

しかも、原作となんか違っている。

「素晴らしい、これが真の英雄か」

そう魔法陣から出て宣ったのは中華服を着た男だった。

俺はそれを見て、原作が変わったことに驚く。

もしかして、アレは英雄派って奴らなのではないだろうか。

「曹操、俺はあの男をやる。アイツがクーフリーンの生まれ変わりだか本人だろうか関係ない。ヘラクレレスとして、あの男は越えるべき壁だ」

「じゃあ、私はあそこの聖女をやりましょう。どちらが聖女として上か見せて貰います」
「あの悪魔だ。あの悪魔が先祖と契約したメフィストフェレスだというなら、捕まえて研究したい」

「では彼女を、円卓の騎士の生まれ変わりだ。相手にとつて不足はない」

随分と離れているのに、俺の耳は奴らの会話を捉えていた。

魔術で集音して、何を話しているのやらと思つたら随分と物騒である。

ここに、確か白龍皇も裏切る予定のはずだ、面倒だな。

「ヴァーリー！お前、何故だ！」

「イツセー！どうして、どうしてなの！」

英雄派の登場と共に、そんな声が校舎からした。

見れば、赤と白の鎧を纏った奴らが空を飛んでいる。

もう一回、目を擦って見る。

赤い奴が追加で飛んでいる、なんでさ。

「悪いがリアス、俺はもううんざりだ。見ろ、この姿を！奴への憎しみだけで禁手に至った！これが、俺の気持ちを代弁している」

「悪いなアザゼル、赤龍帝といつでも戦え、真の英雄とも戦えると誘われたら、俺は誘いに乗るしかなかった」

えええええ！

なんで、赤龍帝が裏切ってるの？そして、憎しみに禁手ってどういうこと？

俺が固まっていると、マシユが前に出て警戒し始めた。

理由は自ずと分かった。

奴が、転生者君が此方を見て殺気を飛ばしたからなんだろう、俺は殺気とか感じないけど。

「お前さえ居なければ！アーシアは俺に惚れていた、リアスやゼノヴィアだって！どうしてアスカロンの時に、朱乃は俺に聞かなかった！俺に惚れるイベントが何故発生しない！それは、全てお前が悪いんだ」

……何言ってるんだコイツ？

アーシア先輩は、まあ助けてないから惚れないな。

でもグレモリー先輩とゼノヴィアって人は、あれ？ライザー倒したからグレモリー先輩は惚れないのか？

でもって、コカビエル倒したの俺ってことになるのか？そういうえば、あの人悪魔になつてないしミカエルの後ろに居たって事は教会陣営だもんな。

アスカロンの時つて、えつと……確か墮天使は嫌いか聞く奴だっけか？

それに関しては俺のせいではない。

「分かつたぞ、お前馬鹿だな！プークスクス、笑えないんですけど！えつ、あれですか？彼女が出来なくてテロ組織に入りましたリア充撲滅しますって感じですか？」

「ぶつ殺す！」

いきり立つ転生者君、残念だよ。

でも、それはお前が一途に頑張らなかつたからだろ。

原作知識に任せていけば良いと思っただけで努力しなかつたんだろ。

それを俺のせいにされては困るよ。

「ケツ、テメエがヘラクレスだつて？本物もつと化物染みてたぜ」

「聖剣だからなんですか？使い手がそんなことでは、信仰は示せませんよ？」

いつの間にか始まってるうとしてる戦いがそこにはあつた。

最速のクラス、ランサーとステゴロ聖女アーシア先輩に英雄派の一部が挑んでいた。

でも、ジャンヌとヘラクレス弱そう。本物に謝って下さいマジで！

「先輩、すみません」

「問題ない、いざとなったら令呪を使う」

俺は上空にいる赤龍帝を見ながら礼装を取り出した。

恐らくマシユは、なんか剣をブンブン振り回してる男に掛かりきりになる。

俺を守ることは少なくとも出来ない、俺は足手まといだからだ。

他のサーヴァントはどうか？ 兄貴はヘラクレス（自称）だ。

アレキサンダーは上空に居る奴らを引っ捕らえては引きずっている。

メフィストは霧に包まれてどこかに消えた。

パラケルススは相変わらず魔術師を捕まえている。

キヤットは……どこに行った？

清姫は口から炎出してる。それで、スパルタクスは……なんか戦っている。

「何故だ、一緒に英雄となろうではないか！ 悪魔が憎いのだろう、俺達に従え！」

「従えだど？ フッフ、ハハハ！ 我々はみな平等、私はそれを理解できぬものを嫌悪する！

英雄を自称し、人を率いて人の上に立ったつもりか笑わせる！ 英雄であろうと、虐げる

者、即ち汝は压制者である。压制者よ、我が愛を受け入れるが良い！ 貴様から与えられ

る愛を、我は貴様に返そう！ おお、压制者よ！ 愛すべき压制者よ！ 我は反逆する！」

「な、何だコイツ……まったく会話が成り立たないぞ」

ああ、うんそつか。

英雄コレクターの曹操くん、スパルタクスは止めといた方が良いぞ手遅れだけどな。

やっぱり、俺だけで赤龍帝を相手しないとイケないのか。

「いいぜ、やろうぜ。元々、お前を殺すのが俺の仕事だ」

「うおおおおお！」

俺のバーサーカーは最強なんだ（集中線！）

上空にいた白龍皇はアザゼルの所に飛んで行った。

黄金のような鎧を纏ったアザゼル、それと戦うためだ。

それを見て、近くに飛んでいた赤龍帝は俺の方へと雄叫びを上げながら飛んでくる。

肉体のスペックは人間の数倍、だがそれほど大きいわけではない。

どちらかと言えば悪魔のスペックは魔力の方が能力値は高い。

鍛えて何らかの術による強化をしたエクソシストが戦えるのがその証明だ。

つまり、素のスペックであれば魔術で強化した俺と奴は渡り合うことができる。

禁手化によって一気に現界まで倍加し、それが音声によって認識出来る。

ブーストが倍加回数なら、限界はバーストと聞こえる。

奴のキャパの限界は7回、つまりは2の7乗で128倍になるって訳か。

チートだわ、そんなの……転生特典で新しい能力でなく主人公になりたいって思うわけである。

「喰らえええええ！」

「おっと」

その強化しまくった状態で、転生者君は落ちた。

俺の居る場所に突っ込み、拳を振るったのだ。

その攻撃を難なく避ける、当然である。

何故ならその攻撃は、単調で常軌を逸した物では無いからだ。

白龍皇が空間を半減させるといふ描写が原作ではあつた。

つまり、能力を概念に作用させたと言ふことだ。

赤龍帝も同じ事を出来るとしたら、概念的に倍にすることは可能で、実際に倍にして
いる訳ではないとなる……はずだ。

例えば筋肉についてパワーの計算をしてみる。

人体の6%ほどがおよそ腕の重さと言われている。

奴の体重が男子高校生二年生の平均体重60.4 kgから60 kgと仮定する。

60掛ける0.06、つまりは3.6 kgだ。

そこに標準重力加速度を加えて計算すれば、 $3.6 \text{ (kg)} \cdot 9.8 \text{ (m/s}^2)$ \parallel
 $3.6 \cdot 9.8 \text{ (kg} \cdot \text{m/s}^2) \parallel 35.28 \text{ N}$ である。そこにパンチ速度を加えて、 $35.28 \text{ N} \cdot \text{s}$ （パンチ速度）がパワーである。

計算して分かんと思うが、取りあえずはそんなぐらいのパワーが普通の人って事であ

る。

このレベルで顔が腫れるくらいのダメージがあるでしょう。そこに空から落ちてきて、でもって128倍だとするとだ。

少なくとも大体4515・84・落下速度・パンチ速度だ。

落下速度とパンチ速度を合わせて分かり易く10と考え四捨五入でと5000パワーである。

意味が分からんし、そんなパワーを出せるのってどういうことだ。

質量であれば腕が重すぎてコントロール出来ない、というか肉体に何らかの影響が出る。

体重がスゲー重かったら落ちる速度も変るし、というか動かす前に骨格に負荷が掛かるわ。

ならば速度だろうか？速度なら空気抵抗とか摩擦はどうなっている？

つまり、問題なく戦えるのはそういう物が倍になっているからではない。

というかそういう物が倍になったら、腕が殴った瞬間耐久性の問題で死ぬわ。

「くっ！」

「普通のパンチで、威力って概念が倍になってるんだらうなあ」

校庭に、巨大なクレーターを作った赤龍帝を見ながらそう思う。

動きは普通、ただしダメージが5000Nって所だ。

普通の動きなら、当たらない。当たらなければどうということはない。

「じゃあ、反撃だ」

俺は礼装である銃を取り出し、適当に発砲する。

ライザー戦の残り、俺の指の骨を使って作った銀の弾丸。

悪魔になった転生者君に当れば大ダメージ請け合いであるそれを、俺は乱雑に発砲した。

「こんな物」

「そんな鎧で防げると思うか？」

俺の肉体の一部を使うと言うことは、肉体を組み替える呪術の対象である。

此方にはメフィストとタマモキヤットがいる。

呪術スキルを持つアイツらなら、人の嫌がる事と頭可笑しい方向に銃弾を改造できる。

そこに、兄貴によるルーンも付与し、俺の強化も加わっている。

さらにはパラケルススによって作られた銃は、並の銃より銃弾を早く飛ばせる。

つまり、とんでもなく破壊力はあるのだ。

「ガッ!?!ぐあああああ!?!」

「痛いだろう？俺も指を切断する時は痛かった」

今だつて魔術を使っている間、魔術回路のせいでナイフで体中を刺されるように痛い。

だが、これも必要なことだから我慢している。

あの時の指だつて、一番合理的で結果のためには必要だったから出来た。

俺は魔術師になって、リアルでFGOをするために覚悟を決めた。

だから目的のためなら手段を選ばない、そういう風に考えている。

「俺から言わせれば、お前は覚悟が足りない。死ぬと分かっている相手を知っていないながら原作通りにしたのは原作が変わるのを恐れたからか？原作主人公が腕を捧げないと勝てない相手に同じことをしなかったのは原作通りにしたくなかったからか？それとも、俺がいるから原作通りにしようとしても出来なかったとでもいうか？」

俺達は同じ、運良く特殊な状況に置かれて未来を知っている。

だが、その通りになるかどうかなんて分からない。

それなのに、自分から動こうとせず現実ではなくラノベの世界だと思つて行動した。

まあ、俺も人のことは言えないのだが……自分のことを棚上げしちゃうと原作知識に甘えて周りをよく見なかった結果がこれなんだと思う。

俺がマシユを物語のヒロインとして見て接していたら、まあ似たようなことになった

んじゃないだろうか。

他の奴らも雑に扱ってたら、たぶん同じ結果になつてただろう。

俺は、ちゃんと現実の人物として接してはいるけどな。

少なくとも、マシユが無条件に慕つてくれなきやおかしいみたいな思考回路はしていない。

「おまえはヒロインとしてみんなを見てたけど生きている人間としては見てなかつたんだろう。おまえは兵藤一誠だけど、中身は違う。そんなお前が同じ行動をしたところ細かいところは違うのと同じ結果になるわけがないだろ」

「黙れええええ！クソが、雑魚の癖して小細工を……ぐっつ！」

転生者君は、ダメージによつて地面でのたうちながら、身体を穿り銃弾を取り除こうと動いていた。

悶えながら悪態を吐く姿は怒りに染まっているんだろう。

怖いわ、こんなチート野郎から敵意を向けられるつて。

「だから、油断しねえ」

「何を、がああああああ！」

「見て分かんذار。ライザーの時と同じ、祝福された攻撃だよ。聖水アタックだよ！」
クレーターを作つた奴が、その中心で悶えている。

近づいたらやばい攻撃力の奴である。

ならば追撃するなら遠くから、安全圏からの遠距離攻撃だ。

俺は聖水の入った瓶を赤龍帝である転生者君に投げつける。

傷口に聖水が当たって、ますます肉体が溶けていることだろう。

弱点属性が仇となったな。

赤龍帝が強いのは、それは籠手が強力だからだ。

だが所詮は神器、使いこなせなければ意味がない。

ドラゴンがそんな能力を、つまりはドライグだったら話は違うだろうが使用者が弱ければ意味はない。

ドラゴンよりも小さく、力もなく、その上で弱点があり、そして戦いに慣れていない。

たとえ弱点でも、大きければ聖水のダメージは微々たる物だろう。

力があれば、もつと倍加出来て補足できない速度で動けたことだろう。

そもそも、弱点がなければいたしたダメージじゃなかっただろう。

戦いを知っていれば、弱点を攻めてくる相手を想定できただろう。

「甘い、甘いぞ。ひよつとして、自分は主人公になれたから死なないと思ってるのか？」

「あああああ！助けてくれ、焼けるうううう！」

「俺は痛くないから分からないけど、くツとかこの程度ツとか言ってる我慢できないの？」

立ち上がらないのか、主人公なのに？」

がっかりだよ。俺は指を詰めるとき、それくらいはマスターらしくやったぞ。

お前も主人公だつて言うなら、主人公らしい行動すればいいのにな。

もう終わったなど、俺が他の奴らに視線を向けた瞬間だった。

俺の顔の上に陰が掛かった。

「はっ！演技に決まつてるだろ、馬鹿が！」

「油断しないつて言つただろ？スパルタクス、来てくれ！」

奴が空を飛び、殴りかかる瞬間に肉壁となるスパルタクスが空間転移で飛んでくる。

その拳は、スパルタクスの分厚い胸板を叩き、胸に穴を開ける。

「なッ!?仲間でガードしやがった！」

「重ねて、令呪を以て命じる。スパルタクス、目の前の赤龍帝を絶対に殺すな」

「フッフ、压制者よ汝の一撃しかと受け取った！さあ汝を凌駕してみせようぞ！我が誇りを受けるがいい！」

「は、離せ！や、やめろおお！ぐぎやああああ!？」

がっしりとスパルタクスの両腕が背中に回り、ギチギチと音を奏でながら、最終的に上半身が吹き飛んだ。

すげー、腕力だけで引きちぎりおつた。

問おう、貴方が私のマスターか？（一度やってみたかっ
た）

真つ白な場所に行った。

目の前には石の扉、その前に黒い輪郭の人型がいる。

そんな人型が、よお……なんて片手で手を上げた。

「俺は奴を殺したのか？真つ二つだし、悪魔の生命力でも死んでるはずだが」

「ああ、此方で魂は回収した」

「それで、俺はどうしてこんなところにいるんだ？」

目の前にいる存在、神の敵対者を自称する俺が悪魔と呼んでいる奴に質問する。

俺つてば、気付かない間に死んでたりするのだろうかと思つてだ。

「奴の死により、歪んだ歴史というか世界は修正された。お前はあの世界には必要ない」
「ど、どういうことだつてばよ……」

「つまり、修正が始まるため異物であるお前は消えるので此方に呼ぶことにした」

俺はそーなのかーと事情を知つて気のない返事をする。

つてことは、別の世界に行くつてことなのだろうか？

「理解が早くて助かる。今頃、バランスの為に神は四苦八苦していることだろう。ジグゾーパズルのピースが一つなくなつたような物だからな」

「そういうお前らの事情はいいいで、早くマシユに会いたい。というか、言いたいことがあるんだがどうして種火周回とか素材マラソン出来ないんですかね? おい、あく実装しろよ」

「仕様だ。ゲームのバランスとかシステム通りに反映すると、弱体化するだろうが。実際にいた場合、HPなんてないんだ」

「あと、ガチャを回させろ! 石一個で回せるけど一月待てつて馬鹿なの? 死ぬの?」

「仕様だ。……だが、今回の報酬をやるとしよう」

その言葉とともに、パイプオルガンの音が聞こえてキラキラした光が頭上に発生した。

そして、ゆっくりと金色の板が降りてくる。

「呼符だ」

「おま、神かよ」

「神ではない、殺すぞ」

初めて見た見た呼符だった。

それが5枚、少なく感じるが貰えるならありがたい。

やったぜ、これでガチャが回せる！

「さて、お前の好きそうに言うならば今回の特異点の人理は修正された。よって、次の特異点に行つて貰う」

「おお、それっぽい」

「だが私も鬼ではない、選ばしてやろう。ちなみに、悪魔でもないからな」

そう言つて、俺の目の前にカードが五枚浮かび上がった。

おつ、これを選べつていう感じですか？

「カッ！ペルソナ！」

「やめろ、握りつぶすな」

ペガー、と光つた俺の握りつぶしたカード。

どうやら次の行き先らしい。

「ふむ、中々の良物件だ。だが、時系列がな」

「どこの世界なんだ？」

「まあ行つてからの楽しみだと思え」

そう言つて、悪魔は俺を見て笑つた。

ニヤツと、口の形が変わる。

そして、石の扉が左右に開き始めた。

ちよ、なんか見たことあるぞ!

「どうだ、なかなか凝った演出だろう」

「うわー、黒いのが出た! いっぱい、来た! 目とかいっぱいあるんだけど! か、必ずお前を迎えに来るからな! ああ、一度やって——」

「いいから早く行け」

最後は顔を蹴られることで、俺は石の扉、どこかで見覚えあると思つたら真理の扉にぶち込まれた。

最初に感じたのは風だ。

頬に当たる風、周囲に立ちこめる爆風を俺は浴びて顔を顰める。

続いて、差し込んでくる光とそれをバックに佇む少女を見た。

桃色の、そこそ染めているのかと聞きたくなるような髪の毛、人形のような整った少女だった。

「なるほど、ならば言うしかあるまい。問おう、貴方が俺のマスターか?」

「あんた、誰?」

「君が召喚したにも関わらず、開口一番にそれかね? どうやら、不完全な召喚のせいで記

憶が曖昧らしい」

もちろん嘘であるが、細かい説明をしたくないのでアーチャーでロールプレイである。

「おい、ゼロのルイズがまたやったぞ！平民だ！平民を呼び出したぞ！」

「ミスタ・コルベール！やり直しを！もう一回召喚させてください！」

「ミス・ヴァリエール。使い魔の変更はできない。契約を結びなさい」

「むっ……あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことしてもらえるんだから」

捲し立てる生徒、それと不満を募らせる召喚した少女、もうこの世界がこれだけで分かるだろう。

どうやら俺は、ゼロ魔の世界に来ているようだった。

『ますたあ……浮気ですか？』

『必要なことだ。ルーンに関しては興味がある』

『むう』

少女、ルイズが近づいてくると俺の身体の内側から声が出た。

マッシュ達がどうなっているのか、今の俺は状況が把握できてはいない。

聖杯を取り出そうにも、呼び出しには応じずまるで存在しないかのようだ。

俺が困惑していると、首のネクタイを捕まれた。

「どうやら、俺は制服で召喚されたらしくネクタイをしていたのだ。」

「ぐいっと引つ張られて、下から唇にキスされる。」

「今世でのファーストキスだったのだが、気分は最悪である。」

「……魔術回路を作るときのような激痛だな。これは常人なら叫ぶレベルだ。」

「珍しいルーンだ、書き取らせてください。」

「ああ、構わない。」

「さて、これが他人に使役される気持ちかと納得する。」

「これはいわば刷り込みだ。」

「俺はルイズに対して、従ってやろうと思えるからだ。」

「さっきまで思ってたなかったのに、こういう感情を抱くとは十中八九、このルーンとやらだろ。」

「兄貴の知ってるルーンとはどうも違うような気もするけどな。」

『『どうやら、ガンダールヴって意味のようだ。どういう効果だかさっぱりだ』』

『『兄貴は一文字で何でも出来るもんか。これ単語だから効果の候補がありすぎるわ』』

「つまり、これってばただの文字？まあ、世界の設定ってことで俺の知ってるルーンとは違うんだろ。」

「俺の前々前世というか、最初の世界の力のないルーンから、兄貴のところのように一」

文字で力のあるルーン、これはハルケギニア式ルーンってことだな。

「行くわよ」

「了解した、マスター」

不機嫌そうな彼女に指示を出され、俺は従い移動することにした。

移動した場所は彼女の部屋だった。

さて、まずは相互認識について確認しよう。

「はあ、もう寝よう」

「待って待って、いきなり脱ぐんじゃないよ」

「はあ?」

そういうとこだよ、と指摘する前に行動していたルイズを俺は慌てて呼び止める。

アニメの流れとか原作の流れなのか、それとも時代設定なのか知らんがちよつと待てと言いたい。

「まずはマスター、君の認識を改めてもらう。俺のことを犬かなんかだと思ってるのか?」

「使い魔なんだから当然でしょ」

「使い魔ではあるが人だ。いや、人権という物が確立されてない時代なのかかもしれないが他人に肌を見せるのは淑女としてどうなんだ? 犬扱いしても構わないが、後悔するの

は君だぞ」

うん、別にストリップしてもええんやで。

あと、アーチャーっぽい俺、俺的に今のポイント高い。

「くっ、うるさい！ご主人様に逆らうつもり！」

「はあ……話を聞かないならこうだ。ガンド」

「うげえ、ゲホッ!?!」

俺の指摘に癩癩を起こしたルイズを戒めるために、俺は指からガンドを放った。

さすがにフィンの一撃ほどではないが殴られた程度にはダメージは与えられる。

何が起こったか分からず、そして涙目になって嘔吐してるルイズに俺は近づき徐に彼

女の顔を掴んだ。

「さて、マスター。話し合うつもりがないなら好き勝手させてもらうぞ。犬扱いしてる

んだ、狂犬に噛まれたとでも思うか？」

「くっ、離しなさい！」

「ふむ、意志の強さは流石と言うべきか。ただ、俺もマシユと離れているのは我慢できないんだ。お前のしたことは誘拐……いや、此方の都合に巻き込まれたと言うべきか」

本来ならサイトさんが来るはずだが、来ないってことはアレだ。

俺の知識的に、転生者は貴族でもやっているんだろう。

それで俺が代わりに主人公の枠を奪った、みたいな感じだ。

「まあ、これでも魔術師の端くれなんだ。意思がある方がよかったが、なくても構わない。一番合理的だったのが話し合いによる交渉だったが無理ならしくなくてもいい」

「まじゆつし？何それ」

「メイガス、此方で言うなら魔法を使う者だ」

「アンタ、メイジだったの？でも、杖なしで……まさか先住魔法!？」

ふむ、そう来たか。

「とりあえず、交渉する気はあるか？」

「むっ……分かったわよ」

ふう……どうやら恥ずかしがり屋なご主人様のようだ

勢いよくベッドに座ったルイズは、寒そうに毛布を身に纏う。

ガンドの影響で、寒気でもするんだろう。

腹パンされたくらいのは衝撃はあつたはずなのに、啖呵を切る胆力は驚嘆に値する。

どうでもいいがアーシア先輩は修正された世界でどうなったんだろう？悪魔ルートになったのだろうか。

「まずじゃあ、これからのことを話そう。俺は一応、召還に応じてるわけだから誘拐だとかは文句は言わない。だけど、人として扱われないようならば仕事はしない。分かったか？」

「アンタ、さつきと全然違うじゃない」

「ああ、こつちが素なんだよ。さつきまではふざけてた」

コルベールとか色々聞いてきそうだったからなのとタバサに話しかけられるのとか考えて嘘ついたのだ。あとは、怖すぎてポロが出そうだからな。まさかのヒロイン級の気の強さに断念した。

縛られても睨み付ける凜ちゃんみたいである。

『俺は気の強い女は好きだぜ』

『知ってた』

兄貴からのコメントを頂いたところで、一応現状確認。

聖杯は出せないが、繋がりというのは感じる。

俺の中にみんながいる、ような気はする。

ただし、なぜか受肉出来ない不思議。

「人扱いして欲しいってこと？ 召使いつてこと？」

「もうそれでいいよ」

「でも、アンタ不満そうね。それぐらいしか出来ないじゃない。感覚共有から素材集め、

戦闘が使い魔の仕事よ」

「そうだな、戦闘と素材集めくらいなら余裕だ」

「先住魔法が使えるのだから、そうなんでしょうね」

一人、ルイズがうんうんと納得する。

説明面倒だから、それでいいや。

でも、召使い扱いでも困ることがある。

「次に、寝床の件だが」

「学院のメイド達のとこで寝ればいいじゃない」

「空きがあるわけないだろ、予想外な召喚なわけだし」

「あああつあんた……まさか、いいいっ一緒に……」

「すごいテンパリ方してるけど、そうだよ。一緒に寝かせろ」

ルイズがその言葉を聞いて顔を真っ赤にしながら、無理と言ってくる。

バツカじゃないのとか言いつつ、枕を投げてきて正直かわい。

やつぱ、くぎゅーってすごいわ。マシユという者がいながら、心を奪われそう。

きつとルーンのせい、俺は悪くない。

「俺は床で寝たくない。最低限度の文化的生活を要求する」

「だ、だって結婚前なのよ！なのに、男と同衾なんて……変態変態変態！」

「ばっ、やめろ！枕で叩くんじゃねーよ、添い寝だけでなんもしねえよ」

寧ろ手を出したら死ぬ、焼き殺されるわ。

『全力で楽しむこと、それが人生の秘訣だよ』

『お前が何を言いたいか分かるが、子供がそういうことを言うんじゃない』

下ネタ大好きな小学生か、と心の中でアレキサンダーにツツコミを入れる。

よく考えたら、小学生くらいだったわアイツ。

「うう……絶対？」

「ああ、約束する」

「約束破ったら、鞭打ちするんだからね！」

「嬉しくないツンデレだな」

っっていうか、そもそもお前脱ごうとしてただろ。

一応、今は人として見てるってことなんだろうか。

「さて、やることやったしガチャを回そう」

「がちゃ？」

懐に入ってた呼符を使いたくてウズウズしてたんだ。

でも、どうやって使うんだろうな。

マシユがないと召喚サークルの設置が出来ない。

そう思っで見つめていたら、呼び符が光となって消えた。

五枚全部、消えた。

「はあああああ!? ふっざけんなああああ! おいこら、運営どういうことだ! ちよ、消えただけだ! バグ、バグなの! 詫び石寄越せよおおお!」

「び、びつくりした! きゅ、急に何よお……やめてよお……」

俺の発狂に、ルイズがキャラ崩壊するほどビビっていた。

お前強気なキャラどうした、いやまあそんなことはどうでもいい。

五枚分消えたのだが、どういうことなんだ。

『仕様だ』

「おつ、おいおいおい！運営、どういうことだ！お前、見てるのか！」

『世界に合わせた仕様だ』

「ね、ねえ……なんか、落ちたわよ」

ルイズに指摘されて、はあと言いながら俺は指さされた方向に視線を向ける。

床に、それはあった。

五枚のカード、それが散らばっていたのだ。

「こ、これは……プリズマイリヤで見たぞ、クラスカードじゃないか！」

そう思つてよく見たら、裏はクラスカードだけど表にはF G Oで見たサーヴァンとの姿があった。

ライダー、ライダー、アーチャー、アーチャー、セイバー。

メデューサ、牛若丸、子ギル、アタランテ、ベデイヴィエール。

「アイエエエエエ!?ア、アタランテ?アタランテなんで、星4!?っていうかギル様、ギル様来たのやった食費解決だ！ベデイなんているの!?おま、宝具強いやんけ！牛若に関してはロリかよ！メデューサに関しては痴女かよ」

『い、遺憾の意である。わ、私は痴女などでは』

『こんな形ではありませんが、セイバーのベデイヴィエール。召還に応じました』

『同じく、牛若丸、罷り越しました。武士として誠心誠意尽くさせていただきます』
『待つてください。私だけ、ちゃんと自己紹介出来てないじゃないですか』

『やあマスター、そんなに喜んで貰えると嬉しいよ。ボクのことには気軽に親しみを込めてギルくんとも呼んでくれ』

『……よろしく』

脳内に直接声が聞こえる。

私と声が似ているな、汝は私と同じか、なんて早見ボイスが聞こえるが中の人が一緒だからだよ。

っていうか、ちょっと待って！声は聞こえるけど受肉はないんですか!?

『仕様だ』

「おま、仕様仕様いい加減にせえよ！受肉させろや、なんでだし！」

『黙れ、此方にも事情があるのだ』

「知らねえーよ！バーカバーカ」

俺の抗議は天の声にスルーされた。

ぐぬぬ、いつか泣かす。

興奮してしまったが、やったぜ。

黄金律持ちが来てくれた、最高だなおい。

「ちよ、ちよっと！アンタ、さつきからうるさいわよ！っていうか、気持ち悪いわ！」
「ベッドの上で仁王立ちしている、ロリに罵られてる件」

「ろり？よくわかんないけど馬鹿にしてるんでしょ、ふざけんじやないわよ！」

「ちよ、殴ってきた！やめろし、俺に対してはご褒美じゃねえんだよ！」

「うるさいうるさいうるさい！」

もうやだ、俺の主がDVしてくるんですけど。

あと、うるさいのはお前だからな。

興奮していた俺も悪かったが、急に強気じゃないか。

メンタル不安定かよ、ビビったり強気だったり、ヒステリー持ちかよ。

「ツ!？」

ビクツとルイズが跳ね上がる。

理由は隣からドンドンドンとすごい音がしたからだ。

というか、壁ドンだった。抗議の方の壁ドンだった。

「あ、アンタのせいで怒られたじゃない」

「ああ、悪かったよ」

「はあ……もう寝る。明日起こしてよね」

そう言つてルイズは布団を手にとって、横になった。

そうか、じゃあ俺も寝るか。

「ちよ、なんで入ってくるの!？」

「ベッドで寝てもいいって話だろ」

「朝まで起きて、私が起きてる間に寝なさいよ!」

「なんでそんな辛いことしなきゃなんねーんだよ!ちよつと可愛いからって調子のんなよ!」

「かわ……もう!もつと、離れて!」

顔を背けながらルイズが俺の胸をグイグイ押しつけてくる。

俺は耳まで真っ赤にしながらか、思わず言ってしまった俺の言葉に反応するルイズを見て思った。

コイツ行動があざといわ、これで天然なんだからヒロイン力、高いな。

流石メインヒロイン、レベルが違った。

『浮気ですか? 処す? 処す?』

『心の底からゴメンナサイ』

『先輩、最低です』

『マシユ! 第一声が、まさかのそれですか!?!』

俺は心の中で謝罪するのだった。

「な、なんか寝にくい……こっちは見ないで」

「お構いなく」

「構うわよ！馬鹿じゃないのアンタ！」

「んっふ……お構いなく」

「もう、はーなーれーてー！」

「ちよ、蹴りはやめろよ！また壁ドンされるだろ！ほら来た、今聞こえただろ！」

「うっさいわね、距離が近いのよ！だいたい、いいい一緒に寝るとか無理があるのよ」

「急にもよるなよ」

「この後滅茶苦茶キックされた。」

深く考えると闇が深い

翌朝、俺は目の前で眠る桃色ブロンドの人形のような少女に欲情していた。

だって、こいつスケスケなんだもん。昨日はよく見えなかったけど、スケスケなんだもん。

『ますたあ?』

「お、俺はやるぞ清姫! 童貞を、卒業するッ!」

『レジスト、完了しました』

何が起こったのだろうか。

俺は急に、目の前の小娘に冷めてしまった。

うん、ああ、これは何て言うかアレだ。

エロ画像見た程度の気分だわ。

「今の声、パラケルススがどうにかしたのか?」

『自力で解こうと思ったのかと気を遣ったのですが、単に出来なかったただけかと思いまして解除しました』

それを聞いて、最初からやってよもおくと内心で抗議する。

俺は魔術師としては三流も三流、魅了系に余裕で引つ掛かってしまっんですよ。

「なんで昨日の俺はルイズなんかに欲情したんだろうか。可愛いけど、暴力系ヒロインより無垢な後輩系ヒロインの方が俺は好きなんだ」

「うう、うう……」

「しかも、なんか寝相悪いぞ」

俺がうるさかったのか頭から布団を被り、唸るルイズ。

死ぬほど疲れているようだ、そっとしておこう。

俺はそのまま部屋を出た。

校内を散策することにした俺は、土地のレイラインなどを見て回った。

流石、魔法に関することをやっているのためかそれなりの霊地である。

そして、その土地を五角形になる形でレイラインを形成している。

これは一種の結界魔術に近い様式である。

簡単な魔術なんかだと、盛り塩を四隅に設置する形で結界を作る奴だが、この学校はそういうのを五角形とかで作っているのだろう。

「よく分かんが、五つの塔には何かの意味があるのだろう」

時代設定は、アニメでは分からなかったが中世のファンタジーの先駆けのような作品であるためか、中世なんだなって感じの世界観だ。

そのため、メイドさん達が集まってタライを使って洗濯しているのを上から見たりする。

メイドさんが本来というか、実際にはどうなのか知らないが、もしかしたら中世のメイドさん達の仕事風景はこんな感じなのかもしれない。

「ああ、そっか。あそこで本来ならシエスタに会うはずなのか」

パンツなんて洗ってないから出会ってないわけである。

一人、納得して今度は図書館へと足を運んでみた。

この世界の文字はどうなってるのか分からんが、ルーン文字など共通していることも多いから読めるかもしれない。

そして、本を開いてみると全く意味不明だった。

「文字から勉強か、日本語とかにしるよ。作者日本人だろ」

そんなこと言われても、作者は作品の世界に人が入るなんて想定してないか。

さて、俺はふうと軽く息を吐いてから人気のない場所を考える。

二日目、人に見つかるように色々と動いていたが誰からも話しかけられたりしなかった。

じゃあ転生者は学生ではないのか、それとも警戒しているのか。

炙り出すには原作から乖離させると手っ取り早いが、さてどうしたものか。

「目的はなんだろうか」

ルイズとかタバサはどうだったろうか？依存するように誰かを好きになっていない様子はない。

周りから一目置かれてる奴はいたか？今のところ見ていない。

つまり、俺の嫁とかいうタイプでも俺TUEEとかするタイプでもないってことだろう。

今後、調べていけば領地で内政チートしてるとかそういう奴もいるかもしれない。

今の所は分からないが、出来れば始末したい。

じゃないとマシユが受肉しないからイチャイチャできない。

『ありがとうございます。なんだから、すごく嬉しいです』

「うわはず、繋がってるから筒抜けか」

『ヒューヒュー』

兄貴達からの煽る声が聞こえる。

おいおい、昭和のリアクションかよ。

まったく、やれやれだぜと思っていたら、メフィストの声が聞こえた。

『おやあ、何やら楽しい雰囲気を感じますね。ちょうど、廊下のあたりですね。外の、廊下のあたりで』

「うわあ、やな予感である」

予定調和、阿頼耶識、抑止力。

まあ、名前は数あれど修正するような力が働いたのかもしれない。

おそらく、メフィストが言ってるのはと思いつながら窓から顔を出して外を見れば、メイドさんが謝っている光景が見えた。

「平たい顔、日本人みたいなメイドさんはシエスタですかねえ。でもって、金髪のイケメンがギーシユ？俺が香水拾わないから何も起きないと思つたら、原作ルートじゃなくて二次創作ルートか」

原作だとサイトが拾った香水で決闘である。

二次創作では、シエスタを助けるために決闘である。

この違いにより、サイトかオリ主かシエスタの誰かが香水を拾うという選択肢が出るのだが……見捨てるか。

「原作と違うことに対して、何かしらのアクションがあるかもしれないしな」

っていうか、最初は錬金の授業とかやってなかったけ？

時系列どうなってるんだ、なんか色々ズレてるけどバタフライ効果って奴か？

さて、中世がどうか知らないけど、貴族が恥をかかされた場合、平民に対して何を要求するのかな。

お手並み拝見と行こうか、かっこいい貴族さん。あつ、今の切嗣っぽい。

メイドさんは土下座してギーシユの前にいた。

異世界にもあるんだなんて思ってたら、今度は靴を手に持ってペロペロし始める。

何て言うか、ゼロ魔ってファンタジーでラブリコメでもつと救われてなきやいけないのに、現実となった場合の世知辛さが滲み出ている。

誰も止めないとか、平民に対する扱いで闇の深さが窺える。

「転生者来ないかな？俺と同じで、どうにかしねえかと思いつながら傍観かな？はあ……
ガンド」

結果に対して、効果なしと判断して今度は原作通りの行動をすることにした。

どうセルイズは寝込んでるから、ルイズが来ないことに対する反応を試みよう。

主要人物に憑依って可能性もあるし、油断せず全体を試みよう。

俺は窓からガンドを放ち、それによって倒れたギーシユに聞こえるように笑い声をあげた。

その声で視線が俺に向く。向いたことを確認した俺は強化を自信に施し、窓から飛び降りた。

「嘘だろ、落ちてきたぞ」

「なんだアイツ、人間じゃないのか？」

さてと、そんな感じで俺は首を回しながら頬を押さえるギーシュを見る。
なんだよそのパパにも殴られたこともないのにみたいなポーズは？

「君が、何かしたのか？」

「だったらどうする？おつ、決闘かな？名家なのにドットクラス程度の才能しかないグラモンくうーん」

「ここまで虚仮にされたのは初めてだよ。いいだろう、決闘だ」

白い手袋が、パーンと俺に投げられた。

何で投げたし、よくわからんやつぢやなあ？

それで、お決まりのヴェストリの広場で待つ、といいながらマントをファツサーと翻しながら去るギーシュ。

なんだろう、ルルーシュかな？貴族って、そういう感じか？ああいう動きが貴族なのか？

「よく考えたらルルーシュ王子だわ。マントは貴族にとって必須なのか。だからトツキはダメなんだ。だってマント装備してないもん」

装備してたら刺されてなかったかもな、防刃マントだキリみたいな返しでだ。
マントがないから優雅になれない、優雅たれは似非貴族ってわかんだね。

わざと遅刻して、苛つかせるなんてそんな宮本武蔵的なことはせず、普通にやっつけた。

ついでに後ろを向いて、貴様見ているなど吸血鬼のカリスマを見せつける。

たぶん、校長が見てるんだろうと思つてだ。学園長？理事長？分からんけど、ひげのじいさん見てたろ確か。

「あ、あの……」

さあ、喧嘩だ喧嘩だ俺のシエルブリッドが疼くぜなんて勝手に盛り上がっていたら、シエスタだと断定したメイドさんが意を決した様子で話しかけてきた。

「迷惑です。だから、謝りましょう。私を助けないで良いです。私は……助けるような価値のある存在じゃないです、だからもう良いです」

「えー、なにわざと嫌われようとしてる？えっ、それも作戦なんですか？悲劇のヒロインぶって可愛いと思つてるんですか」

「ふざけないで！貴方、死んじゃうかもしれないのよ！こんなくだらないことで、命を粗末にする物じゃないわ！」

メイドさんの熱い嘆願、すまないがウチのメインヒロインはマシユなのでお前ルートはない。

だから、別に助けるわけじゃないんだからねっ！勘違いしないでよ！

「俺は俺がしたいからするだけだ。君のことなど、眼中にはない」
キリツとした顔で言い放ち、俺はギーシユの所へ歩み進めた。

俺の中のアイツが反逆しろって疼きやがるぜ

「諸君、決闘だ！」

ギーシュの言葉に野次馬が沸き立つ。

教師すら来ないで、生徒も止めないで、何て言うか平民の扱いが酷い。

オスマンだがグルマンだかは、あの使い魔の実力見てやろうみたいな感じで怪我とか考えてないんだから質が悪いわ。

「僕はメイジだ。魔法を使うことに異論はないだろうか？」

「奇遇だな、俺もメイジだ。おっと、貴族じゃないから、貴族同士の決闘とか気にするなよ」

「ほお、どこかの落ちぶれた三流メイジというわけか。となると、アレは風か」

ギーシュの口上に答える形で俺は自分のことを伝える。

何を勘違いしたのか、俺が風属性だと思っっているようだった。

さて、確認しよう俺が出来ることを……ガンド、強化、暗示、くらいだ。

残念ながら宝石も礼装もない。

「見せてあげるよ。僕の華麗なるワルキューレを……」

「あつ……詰んだ」

「名乗らせて頂こう、僕はギーシュ・ド・グラモン！ 青銅のギーシュ！」

花弁が落ち、そして錬金されたのか、土を纏って甲冑が発生する。

それは二体の青銅騎士、ワルキューレだ。

相性最悪、ガンドも暗示も聞かないゴーレム。

強化した身体で殴つてもダメージは、ない。

「先手必勝！」

焦った俺は、即座に攻撃に移った。

ギーシュを倒せば丸く収まるからだ。

「ゴーレム使いの僕が警戒を怠るとでも思ったのか。掛かったな馬鹿めツ！ワルキューレ！」

青銅の騎士が、下がるように剣を構えた。

それは壁だった。恐れを知らない壁である。

俺の攻撃を身体で受け止め、カウンターの如く斬りかかる壁だ。

……よ、よく考えてやがる。

原作の噛ませで、ヤムチャ樺、オルコツト樺、ステイル樺と同じチュートリアルキャラだと思つたが、なかなかどうして攻守のバランスを考えている。

防御のワルキューレと攻撃のワルキューレ、その二体というわけだ。

「くっ!」

「行け!」

「ッ!?!」

俺の攻撃を身体で防いだワルキューレ、そして横から二体目のワルキューレが剣を振る。

それを良ければ防御に回っていたワルキューレが動き出し、俺はその剣を両手をクロスすることでなんとか防ぐ。

腕と剣が交差する瞬間、金属のような高音が響き、しかし弾くに至らず切り傷が出来る。

「ガラ空きさ」

「ガッ!?!」

背中に激痛が走り、俺は混乱する。

一体なんだ、目の前にワルキューレはいる。

剣を構えて反撃した体勢のワルキューレ、そこに加わろうとしたワルキューレ、どちらも目の前にいる。

ならば、と俺は倒れながら振り向いた。

「三体目ッ！」

まるで、蹴りを放ったような形のワルキューレが、俺の背後にいた。

そう、奴は知らない間に配置していたのだ。

なんか違う、俺だけ難易度違う。

ボロボロになることを、もしかして求められてるのだろうか。

抑止力がギーシユをバックアップとか洒落にならんことじゃないだろうか？

「何してるの！ゲホッ、ゲホッ……」

「その声は、って何してんだよ」

声に俺が振り向くと、そこにはルイズがいた。

シエスタにおんぶされたルイズがおった。

ええ、なにしてんねん。

畜生、方針がブレブレだ。

シエスタを見捨てる選択肢もやり通すことも出来ず、代換え案のルイズがない状態で終わらせるつても失敗した。

予定なら瞬殺できたはずなのに、出来てないし失敗したな。

「ギーシユ決闘は、うえっ……」

「貴族同士のはだろ？それより、具合悪そうだが大丈夫かい？」

「余計なお世話よ、うっ……」

吐きそうな顔でルイズが口を押さえる。

シエスタの背中で吐くなよ、まったく。

『おいおい、だらしねえなあ』

『筋肉が足りないんだと思いますね』

『いやいや、やつぱり装備がダメなんだよ。僕の蔵から何か貸してあげたいくらいだ』

身体の内側から、サーヴァンとによるダメだしが入る。

分かってるけど、青銅のゴーレム拳で殴ったり破壊できない。

「ねえ、アンタ死ぬわよ。もうやめなさいよ」

「死なねえよ。この程度で死ぬわけがない」

「威勢が良い。なら、四体目だ」

ギーシュの前に四体目のゴーレムが現れた。

四体のゴーレムは俺を囲むように展開したのだ。

武器の一つでもあればいいが、今の俺は拳一つ。

なんてことだ、おいガンダールヴのルーン使うから剣をくれ！

意識が朦朧としていた。

あれから、度重なる攻撃に晒された。

いくつかは防げて、ダメージは蓄積していく。

そして、一つのミスが多く、ミスへと繋がっていく。

そのため、一気に俺はピンチに陥っていた。

野次馬共は笑っており、もはや趨勢は決していた。

こんなのはただの公開処刑であった。

「せめてもの慈悲だ、命までは取らない。だが貴族としての示しは付けなくてはいけない。謝罪しろ」

「断……………」

朦朧とした意識の中で、それだけはハッキリとしていた。

俺は間違っていないし、屈しようとは思わない。

……畜生、みんながいないと役立たずだな俺。

残念そうな顔のギーシュ、そして剣を振り上げるワルキューレの姿が見えた。

「終わりに、何だッ!？」

ギーシュの焦る声に、俺は閉じかけた瞼をなんとか開ける。

見れば、そこには黄金があつた。

黄金の光、そして鎖に拘束される青銅の騎士。

……アレは、天の鎖か？

『はあ……今は王様家業休業中なんだけどなあ。まったく、世話のかかるマスターだよ』
その声は、子ギルの声だった。

『自分の本分を少しはわきまえたらどうだい？マスターは弓兵でも槍兵でも、騎士や魔術師、狂戦士や騎兵じゃないんだから。思い出してごらん、君は今までどうやって戦ってきたんだい？』

染み渡るように、脳に刻まれるように、子ギルの言葉が反復される。

周りの雑音や映像はない物となり、ただ己を見つめ直すように子ギルの言葉に従う。

……俺は、俺はみんなに頼っていた。

ああ、そうかそういうことか。

「答えは得たよ子ギル。もう大丈夫だ」

『そうかい、それは良かったよ』

俺はフラつく身体を無理矢理稼働させて、立ち上がる。

既に天の鎖は消え、ワルキューレと呼ばれる青銅騎士達は自由となっていた。

「悪あがきを、今度こそ終わりにしてくれ」

俺はギーシユを見据えながら、聖杯を思い浮かべる。

イメージするのは、常に最強の自分だ。

「勘違いしていたツ！俺の戦いは自分一人の物じゃない。いつだって、みんなと一緒にだったんだ」

「何を言ってる」

出来る、俺は出来る確信があった。

現れる、俺の中にあつた力が具現化する。

握る、その手にはクラスカードがあつた。

繋がる、それは英雄のいる座へとアクセスであつた。

「インストール夢幻召喚！」

「な、なんだ!？」

迫り来る剣撃を弾く物があつた。

それはあまりに無骨な金属の盾、ワルキューレの攻撃を防いだそれを俺は知っていた。

「盾、どこからそんな物が！」

「インクルード限定展開！」

手に握られた新たなカードが砕けるように光となる。

そして、俺の身体には拘束具と鎧とマントが発生した。

「姿が——」

「■■■■■■■■■■！」

その絶叫は、野次馬達を黙らせ耳を塞がせた。

その雄叫びは、俺のダメージを攻撃に転じた末に発生した物だった。

雷が、大地を駆け巡った。

「ぐあああああ!?!」

「ハアハア……」

「ぐうう、何が……」

「チツ、しづとい！」

感電したはずのギーシユは、辛うじて気絶していなかった。

ならば、止めを刺さねばなるまいと俺は前が出る。

そんな俺を制止する声が聞こえた。

「待ちなさい！もう決闘は終わりよ！」

「ルイズ、やめてくれ」

「いいえやめないわ！今のアンタが何をしようとしてるか分かるわ、でも平民が貴族を

殺すなんてダメよ！」

「今の俺に、それ以上はやめろ！」

何を勘違いしているのか知らないが、本当にマズいのでやめて欲しい。

だが、その希望は悉く踏みにじられる。

「これは命令よ！ご主人様の言うことが聞けないの！」

「くっ、俺の右腕が……」

暴れるように疼く右腕を俺は左手で押さえつける、だがそんな抵抗は無駄である。

寧ろ、俺は受け入れるべきであった。

抵抗すればするほど、浸食されるからだ。

「フフ、クハハハハ！おお、压制者よ！汝を祝福せん！さあ、我が愛を受け入れろ！」

「ちよ!?!」

『待て、生まれ！本当に止まってくださいお願いします！』

俺の身体が、満身創痍な身体が空を飛んだ。

飛んで、大の字になった状態で、俺は落ちる。

「ぐえっ!?!」

「す、素晴らしきかな……我が反逆……」

『ぎやああああ!?!痛たたたたた!?!』

俺はあまりの激痛に気を失うのだった。

キャスト、オフ!仕様です

木造の天井が見えた、知らない天井である。

「知らない天井だ。人生で言ってみたい台詞5位くらいかな」

「何を馬鹿なことを言ってるのかしら、この下男は」

「ああ?」

誰だ、と起き上がって見れば金髪に巻き髪マキカミの女がいた。

あれ、いや、うーんもしかしてモンモランシー?もつとキャバ嬢のような盛った髪型だと思つてたんだけどな。

「アンタ、モンモランシーか?」

「どこでその名を……私達、初対面よね?」

「えー、あー、ギーシュの彼女だろ?」

おそらく、ここは医務室的な場所で彼女は治療でもしてくれたんだろ。

確か香水のモンモランシーだっけか、薬とかも得意だった気がする。

「はあ、元気になったなら早く顔でも見せてあげなさい。あの子、結構な額を払ってくれたんだから」

「金取ったのか？なるほど、治療費ってことか」

「私、金払いの良い子は好きよ。アンタ、ドンドン怪我しなさい」

そしたら有料で治してあげると嬉しそうにモンモランシーが言う。

コイツ、家が貧乏なんだっけ金に汚いなあ。

治療を終えた俺の身体は無事に回復していた。

その身体で、そのままルイズの部屋に行くも、中には誰もいない。

教室か、と思えばどの教室かは分からない。

「あつ、アンタ俺のご主人知らないか？ルイズ様だよ、ルイズ様」

「ああ、あの方なら教室で掃除しておりますよ」

「掃除？」

どこの教室か、そこらを歩いていたメイドに聞いた俺は辿り着いて察した。

教室の、教卓を中心に焦げた床が見えた。

吹き飛んだ机とか割れた窓ガラス、爆発させたんだろうなあと把握した。

つまり、錬金の授業とかあったんだろう。

でもって描写されてなかったけど、他の生徒は別の教室の違う授業を受けてるってこ

とかな？

「よお」

「ツ！随分と遅かったじゃない……」

「おう、つていうかこっち向けよ」

何でか話しかけたら背中を向けたまま返事してきやがった。

あれれ、もしかして泣いてます？

ぼっちで作業してたから寂しかったとかそんなんすか？

「手伝うべきか？」

「あ、当たり前でしょ！ご主人様にやらせてるんじゃないわよ！」

振り返ってキツと睨みつけるように此方を見たルイズの目元は、少しだけ赤く腫れていた。

やっぱり泣いてたのかなあと思わずにはいられない。

コイツって今、いくつだっけ？中学生ぐらいかな？多感な時期だしなあ。

可哀そうにと頭を撫でてやる。

一応、魔術師の端くれだ……修復も出来なくはない、はず。

復元の魔術、苦手なだけだなあ。

「分かった分かった」

「触んなあ！」

「子供はもつと頼って良いんだから意地張んな」

「子供扱いするなあ!」

ああ、なんか猫ってこんな感じなのかなあ。

ツンツンして流石ツンデレの元祖やでえ。

『ますたあ、浮気ですかあ?』

「ゴフツ……」

「きやああああ!?吐血、吐血してるじゃない!?秘薬使ったのに、なんで!」

アンサー、内側から焼かれたみたいです。

だ、大丈夫……治療魔術あるから。

教室の後片付けは魔法を使っではいけないらしかった。

俺から言わせれば、魔法じゃねーよって感じだが世界が違う。

普通に窓ガラスとか治したけど、これ魔術だから問題ない、いいね。

片付けが終わったのは昼休みに入る頃だった。

「なあ、そういえばこの学校で有名な奴とかいないか?国でもいいけどさ」

「急に何よ……そうね、タバサとツエルプストーかしら?」

「どう有名なんだ?」

「タバサは優秀なの、ツエルプストーは男をとつかえひつかえで最悪の女よ」

あー、そこは原作通りなのと納得する。

やっぱり俺TUEEEEとかしてる奴じゃないのだろうか、他国にいたりとかそんなか？

「外国だとうだ、なんかスゲー奴がいたりしないか？」

「それなりに勉強してるけど、いないはずよ。まあ、知らないだけってこともあるでしょうけど」

ルイズに限ってそれはないと思っている。

こんなんでも寝る前にずっと勉強して、魔法以外は優秀だ。

悲しいのは生まれる世界を間違えたか。

魔法じゃなくて頭の良さで見られる世界なら、容姿と合いまってそれなりの高学歴になれたはずだ。

「アンタ、ツエルプストーリーだけはダメよ！いい、我が家とツエルプストーリーはそれはそれ
——」

「確執があるんだろ、知ってる知ってる」

「嘘おっしやい！まだ喋ってないわよ！」

「大丈夫だよ、恋人を寝取ったとかだろ？俺は従者だけど、恋人じゃねえんだから平気だよ」

「ななな、何言ってるのよ！誰と誰が、こっここ恋人よ！」

「ゴフツ!？」

突然の吐血に俺自身もビツクリする。

アレか、こうラブコメの波動を感じると清姫は殺意の波動に目覚めるのか。

二回目の吐血にはルイズも流石に慣れた。ドン引きはしてるけどな。

そして、色々あつたが部屋に帰ってまず初めに見たのは巨大な椅子だった。

「やあ、遅かつたじゃないかマスター」

「ぜ、全裸だあああああ!？」

「勝手に模様替えされてるううう!？」

そこにあつたのは巨大な椅子だった。

何故か赤い布が張られていたり、天蓋付きのベッドがあつたり、フルーツの盛り合わせとぶどうジュースの入った瓶がテーブルにあつた。

ただ、なんでか小ギルが全裸で椅子に座っていた。

なんでさ、いやプリヤでもベッドに裸で寝てたけどさ。

「つていうか、なんでギル様だけ受肉してんの?」

「それはボクの英雄としての格が違うから、つて訳じゃないですけどね。自力でどうにかできる物を持ってますから」

「スゲー、ギル様スゲー」

クラスカードと別でイリヤと色々してたことはあつたけど、あれみたいなことなんだろうか。

じゃあ、マシユとかも呼び出せたりできるのだろうか。

「あつ、無理ですよ。膨大な魔力を自分で供給出来るなら可能ですけど、ボクの宝物は使わせる気はないですから」

「ジルドレ的な宝具使ってるのかあ、そーなのかー」

「ちよつと無視してんじやないわよ!コイツなんなの、誰なのか説明しなさいよ!」

おい、うちのエンジェル係数の救世主だぞ、なんて態度なんだよまったく。

「やお嬢さん、マスターのマスターだから、一応ボクのご主人様ってことになるのかな?よろしくね」

「よろしくじやないわよ!いいから服を着なさい!風邪引いたらどうするのよ!」

「ツツコミ所はそこじやないと思うんだけどなあ」

予想の斜め上に行く、さすがギル様である。

つていうか、本当にどうして出てきたのやら……

「まあどうして出て来たかつていうと、この世界を楽しむのとヒントかな?」

「ナチュラルに心を読まないでください。あと、ヒント?」

「僕に恐怖を覚えなくても平気ですよ、さすがに大人のボクとは違いますからね。ヒン

トってというのは、この世界にいる獲物……のことですかね」

ルイズの方を見て、そして俺を見てニヤリと笑う。

うわあ、愉悦ってるなあ。なんでもお見通しなのかこの人。

「獲物って？」

「探し物、だからルイズの召喚に応じたんだ」

「ふーん」

ギル様は全裸で椅子の上に座ったまま、金の杯を手の上で回すように揺らす。

ぶどうジュースですよ、ラベルにぶどうジュースって書いてあるしワインじゃないですよ。

あと、足を組みなおすのやめてください。見えそうで見えないのはすごいと思います
が、教育に悪いですルイズの……。

「マスターがどういう選択をするのかは任せますけど、恐らく自力では見つからないです
ね。ヒントはトリスティンの貴族です」

「貴族の誰かが持つてる物が欲しいってこと？なんだか、この子の話ぶりとか聞いてる
限りだと人を探してるように聞こえるんですけど」

「知らなくていいこともある」

そうか、それにしても貴族なのか。

自分が殺されることを考慮して尻尾を出さないように気を付けてるタイプ、とかだろ
うかな。

「じゃあ、ボクはそろそろ寝るかな」

「つて、何ベッド入ってるのよ! っっていうか、私のベッドはどこ」

「うるさいなあ、子供は寝る時間なんだよお姉さん」

「あー、フルーツうめえ……」

この後三人で、川の字になって寝た。

幕間の物語、読み飛ばしても可

所持サーヴァント

ベディヴィエール

アタラント

子ギル

クー・フリーン

牛若丸

メドゥーサ

アレキサンダー

メフィストフェレス

ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス

スパルタクス

タマモキヤット

清姫

マシユ・キリエライト

ステータス

セイバー

属性・秩序・善

真名・ベディヴィエール

時代・5世紀後半から6世紀初め

地域・ブリテン

筋力・A・耐久・B

敏捷・A＋・魔力・C

幸運・B・宝具・A

保有スキル・

軍略「C」・

沈着冷静「B」

守護の誓約「B」

クラススキル・

対魔力「B」

騎乗「A」・

宝具名・

剣を挿れ、銀色の腕 スイッチオン・アガートラム・対人宝具

アーチャー・

属性・中立・悪

真名・アタラント

時代・神話時代、紀元前13世紀頃？

地域・ギリシャ

筋力・D・耐久・E

敏捷・A・魔力・B

幸運・C・宝具・C

保有スキル・

アルカディア越え〔A〕・

追い込みの美学〔C〕・

カリュドーン狩り〔A〕・

クラススキル・

対魔力〔D〕・

単独行動〔A〕・

宝具名・

訴状の矢文 ポイボス・カタストロフエ 対軍宝具

アーチャー・

属性・混沌・善

真名・子ギル

時代・紀元前2600年頃？

地域・メソポタミア

筋力・C・耐久・C

敏捷・C・魔力・C

幸運・A・宝具・EX

保有スキル・

カリスマ「A+」・

紅顔の美少年「C」・

黄金律「A」

クラススキル・

対魔力「E」・

単独行動「A」・

神性「B」

宝具名・

王の財宝 ゲート・オブ・バビロン 対人宝具

ランサー

属性・秩序・中庸

真名・クー・フリーン

時代・前1世紀〜西暦1世紀？

地域・アイルランド

筋力・B・耐久・C

敏捷・A・魔力・C

幸運・E・宝具・B

保有スキル・

戦闘続行「A」・

矢避けの加護「B」・

仕切り直し「C」・

クラススキル・

対魔力「C」

神性「B」・

宝具名

刺し穿つ死棘の槍 ゲイ・ボルク 対人宝具

ライダー

属性・混沌・中庸

真名・牛若丸

時代・1159年～1189年

地域・日本

筋力・D・耐久・C

敏捷・A+・魔力・B

幸運・A・宝具・A+

保有スキル・

天狗の兵法「A」・

カリスマ「C+」・

燕の早業「B」・

クラススキル・

対魔力「C」

騎乗「A+」

宝具名・

壇ノ浦・八艘跳 だんのうら・はっそうとび 対人奥義

ライダー

属性・混沌・善

真名・メドゥーサ

時代・神話時代

地域・ギリシャ

筋力・B・耐久・D

敏捷・A・魔力・B

幸運・E・宝具・A+

保有スキル・

魔眼「A+」・

怪力「B」・

鮮血神殿「B」

クラススキル・

対魔力「B」・

騎乗「A+」・

単独行動「C」

神性「E」

宝具名・

騎英の手綱 ベルレフオーン 対軍宝具

ライダー

属性・中立・善

真名・アレキサンダー

時代・紀元前356年〜紀元前323年

地域・マケドニア

筋力・C・耐久・B

敏捷・B・魔力・C

幸運・A+・宝具・B+

保有スキル

カリスマ「C」・

紅顔の美少年「B」・

霸王の兆し「A」・

クラススキル・

対魔力「D」・

騎乗「A+」

神性「E」・

宝具名・

始まりの蹂躞制覇 ブケファラス・対軍宝具

キヤスター

属性・混沌・悪

真名・メフェイストフェレス

時代・16世紀

地域・ドイツ

筋力・D・耐久・C

敏捷・B・魔力・A

幸運・B・宝具・B

1

保有スキル・

呪術「A」・

無辜の怪物「B」・

道化の大笑「A+」・

クラススキル・

陣地作成「C+」・

道具作成「B」

宝具名・

微睡む爆弾 チクタク・ボム 対軍宝具

キヤスター

属性・混沌・善

真名・ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス

時代・15〜16世紀

地域・欧州

筋力・D・耐久・E

敏捷・C・魔力・A

幸運・B・宝具・A+

保有スキル・

高速詠唱「A」・

エレメンタル「A+」

賢者の石「A」

クラススキル

陣地作成「A」・

道具作成「EX」・

宝具名・

元素使いの魔剣 ソード・オブ・パラケルスス 対軍宝具
バーサーカー

属性・中立・中庸

真名・スパルタクス

時代・? 紀元前71年

地域・ローマ

筋力・A・耐久・EX

敏捷・D・魔力・E

幸運・D・宝具・C

保有スキル・

被虐の誉れ「B+」・

不屈の意志「A」・

剣の凱旋「B」・

クラススキル・

狂化「EX」

宝具名

疵獣の咆吼 クライニング・ウォーモンガー・対人宝具

バーサーカー

属性・混沌・善

真名・タマモキヤット

時代・2032年以降

地域・S E・R A・P H

筋力・B +・耐久・E

敏捷・A・魔力・A

幸運・B・宝具・D

保有スキル・

怪力〔B〕・

呪術〔E〕・

変化〔B〕・

クラススキル・

狂化〔C〕

宝具名

具
燦々日光午睡宮酒池肉林 さんさんにつこう ひるやすみしゆちにくりん 対人宝

バーサーカー

属性・混沌・悪

真名・清姫

時代・?・延長6年(928年)

地域・日本

筋力・E・耐久・E

敏捷・C・魔力・E

幸運・E・宝具・EX

保有スキル

変化「C」

ストーキング「B」

焰色の接吻「A」

クラススキル・

狂化「EX」・

宝具名・

転身火生三昧 てんしんかしょうざんまい 対人宝具

シールド

属性・秩序・善

真名・マシユ・キリエライト

時代・21世紀

地域・カルデア

筋力・C・耐久・A

敏捷・D・魔力・B

幸運・C・宝具・|

保有スキル・

誉れ堅き雪花の壁

時に煙る白亜の壁

奮い断つ決意の盾・

クラススキル

対魔力「A」

騎乗「C」・

宝具名

いまは遙か理想の城 ロード・キヤメロット 対悪宝具

アライメントと属性について

各サーヴァントの精神的な傾向。ステータスで確認できる。

秩序・中立・混沌からなる「重んじる方針」と善・中庸・悪からなる「性格」の2つの要素によって決定される。

属性間の相性については「性格」の不一致であれば大きな問題にはならないが、「重んじる方針」が違う場合は軋轢が大きくなる。

秩序 社会やルールに従うよ。

中立 従ったり従わなかったり

混沌 自分のルールに従うよ、社会とかどうでもいいよ

善 自分が良い行動だと思うことをするよ

中庸 良いことも悪いこともするよ、本能で善悪とか考えたりしないよ

悪 とりあえず悪いことをするよ

狂 マスターに従うか暴れるよ

例

秩序・善

マシユ 社会の中でいい人。

ベテイ 同じく。

中立・善

アレキササンダー 清濁併せ持つて思考で、取りあえず民に良いと思ったことをした

よ。

混沌・善

子ギル 自分ルール、自分の裁定なら良いとする。

タマモキヤット 本能に従い良いと思うことをする。

メデューサ 化け物なので反社会的に扱われてるけど、悪いことはしたくない。

パラケルスス 魔術師として秘匿することでも広く教えちやうよ

秩序・中庸

クーフリーン ケルト的に主人に従うよ。嫌なことも好きなことも我慢してケース

バイケースだよ。

中立・中庸

スパルタクス 政権だろうと反政権だろうと弱者の味方だよ。取りあえず圧制者は

殴る、良いか悪いかは後で考えるよ。

中立・悪

アタランテ 食べる以外で狩り、自然のルールを破ることもある。弱肉強食と人を見

捨てたり、人のルールを破ることもある。

混沌・中庸

牛若丸 反逆者扱いされてるよ、戦いでは良いも悪いも関係ないよ。

混沌・悪

メフィストフェレス 社会とか組織とか関係ないよ、もう滅茶苦茶にするよ。

清姫 自分が嘘ついたと思ったら、取りあえず殺すよ

たぶんこれが一番早いと思います

朝、目を覚ましたら子ギルはいなくなっておリルイズが横に寝ていた。

ルイズなら今、俺の横で寝ているぜなんて誤解を招く状態である。

それにしても、仕様だからってまさかプリヤになつてるとは思わなかった。

これじゃあ、F G Oじゃないよプリズマイリヤだよ。

まあ、ガンダールヴってルーンを生かすなら宝具を使う感じのプリヤ仕様が良いのかもしれないけどさ。

ルイズを起こす仕事は言われてないのでやらずに朝食を取ることにした。

ギーシュの件で一目置くな状況なのか、俺が普通に食堂に入ると白い目で見られるだけで普通には入れた。

そのまま、席に座って食事を取る。

朝食は全て肉と肉と肉である。

すつげえなあ、朝からへビーな食事内容だわ。

「おい、その席は僕のだぞ」

「脂っこいなあ、いやでもバイキング形式だと思えば納得の種類だし悪くはないか。そ

ういえば、ハリポタもこんな感じの食事風景だったなあ」

「聞いているのか平民！」

うるせえなと思いつながら振り向くとデブがいた。

なんだコイツ、風邪ひきのなんたらとかいう二つ名の奴だっけか？ あんま覚えてねえからわかんねー。

まあ、食事は終わっているので席を立てやる。

その様子を見て満足そうなマル……マルなんたら。

風邪ひきのマルコポーロだっけ？ マジで覚えてないんだが、譲ってやった時のドヤ顔がムカついたので頭を叩いておく。

「痛っ、何するんだ！」

「虫がいたんだ、マルコポーロ」

「マリコルヌだ！」

そうかそうかと適当に返事をして、そのまま俺は食堂から出て行った。

食堂から出た俺は廊下をウロウロする。

俺の予想では、チョロインなキュルケがコンタクトを取ってくると思っている。

『ますたあ……』

「ゴフツ……遂に問答無用で焼くようになったか」

やめてください死んでしまいます。

体の中に鞘とか入っていないんでキツイんですけどね。

『なんだか、親近感を覚えます』

『ベディヴィエールさんは苦労してそうですもんね』

『活躍がなくて正直つまらんワン。キヤットは暇だぞ〜』

やんのやんの頭の中で声が反響する。

斬魄刀とか持つてるとこんな感じなのだろうか、正直うるさい。

もう一人のボクどころじゃないレベルである。

「キュルルル」

「正直辛い……おお、フラグ回収か」

頭を押さえていたら、ようやくという感じで火トカゲが現れた。

俺のターン捕獲してみる。

やった、火トカゲゲットだぜ。

「お前は尻尾が燃えてないのか」

「キュー？」

取りあえず要件は分かっているので捕獲したままキュルケの部屋に向かう。

ここ？違うのか、じゃあこっちか？もつと向こうか、ここはどうだ？

そんなこんなでようやく辿り着いた、やったぜ。

「失礼します」

「扉を……閉めてるわね」

「ルイズの使い魔、フランシスコザビエルです。今日はよろしくお願いします」

「どういうことなの」

俺の言動に戦慄を覚えるキュルケを無視して部屋に進んでいく。

おっと、ここでも原作と乖離があるのか昼間だぞ。

どうやら原作はエヌマエリシユされたようだ。

「待つて待つて、呼ぶ前になんてこっち来るの」

「悪いなキュルケ、俺はお前の気持ちに答えられない」

「ちよつと待ちなさいよ！私達初対面よね、なのに何でフラれてるの!?まだ、何も言っていないわよ」

「いやあれだろ、二つ名の微熱のように私のハートが真っ赤に燃える！とか震えるぞハート、燃え尽きるほどヒートとかでしょ」

「どういうことなの!?!ねえ、貴方の中で私ってどういうイメージなの!」

すまない、原作を覚えてないんだ、すまない。

さて、目的を果たすとするか。

「話は変わるんだが」

「私の質問はスルー!?!」

「君の知り合いのトリステイン貴族で変な奴とか優秀な奴とかいないか?」

「この流れでそういうこと聞く!?!というかスルーなの!?!」

うるさいなあ、俺はマシユにゾッコンだからお前の気持ちには答えられないんだ。

というか、ビッチとかノーサンキューです。

最終的に、エロで世界がヤバイみたいならスボスになるんだから。

あのビッチは強かった、苦勞した思い出が蘇る。

「さあ、言え」

「なんだか思ったのと違う……」

「言え」

「あんまりトリステインの貴族には詳しくないわ。用は済んだでしょ、こつちが呼んだのだけれど冷めてしまったわ」

スネーク式尋問術で情報は得られなかった。

なるほどなあ、外から邪魔が入らなくてもいい感じにはならないと、把握した。

いや、俺は何も落ち度ないはずだからきつと抑止が働いたに違いない。

キュルケと別れた俺は、この後の事を予想する。

まず買物、そこで手に入れた剣を装備したらゴーレムが出てくる。

アレは確かマチルダさんが犯人なんだろ、ドムに体当たりしそうな名前だな。

取りあえず犯人はヤス……じゃなくて、秘書のマチルダって訳だ。

「あつ」

「あつ」

「どこをほつつき歩いてると思つたら、よりにもよつてツエルプストーの部屋から出てくるなんて！……この馬鹿犬うろうう！」

『何だとテメエ、もういつペン言つてみろ！』

違う違う、兄貴に言つたわけじゃないからステイステイ。

俺は荒ぶる兄貴に対応しながらばったりあつたルイズに謝る。

これは誤解なんだ、うわなにをする。

結局問答無用で鞭で叩かれた。

それ馬用だから普通に痛いです、やめてください。

夜、座禅しながらみんなと喋っているとルイズがムスツとした顔で街に行くことを提案してきた。

「今度の休みに、街に行くわ」

「どうした急に」

「アンタの連れが宝石を置いてったから換金ついでに、その武器とか買ってあげるわ」
「ブ、ブルジョア!?! いつの間にかいないと思つたら置き土産に宝石ですか。」

さすギルである。金には困らないなあ……

そんなギル様は体の中にもいないんだけど、単独行動スキルですか？

「あと、あのガキンちよはケティって子の所にいたわ。ギーシュの元カノ」

「何してるん、っていうか誰なの？」

モブの誰かだろうか、お淑やかで優しい女性がタイプな子ギルのお眼鏡に叶うとは……。

まあ、問題なく原作に忠実に進んでいた。

やはり同じ人物だし考えることとかは一緒なのだろう。

正直、行かなくてもいいかなとは思うんだけどな。

インテリジェンスソード、欲しいかといえばいらぬし。

『知性のある武器ですよ、気になります』

「パラケルススエ……」

『私、気になります』

「それはなんか違う」

まあ、おねだりされたので行くことにした。

虚無のなんたら、要するに日曜日。

俺はルイズと街に行くことにした。

移動は、アレキサンダーの協力によりブケファラスをレンタルである。

「アンタ、何よその恰好」

「仕様だ」

「ちよつと待って、どこの馬よ？ こんないい馬、いたかしら？」

おうおう、嬢ちゃん分かってるじゃねえか。

と、言わんばかりにブケファラスが鼻を鳴らす。

馬の表情とか分かるのはアレキサンダーの効果なのだろうか、行くぜ相棒！

街に着いた俺達は宝石店によって金に換えることにした。

「ちよつと待って、馬は!？」

「帰った」

「どこに!？」

「細かいことは気にするな」

あれだ、たぶん座に帰ったんだよ。

納得いかなさそうなルイズだったが、俺に慣れて来たのか細かい追及はせずに注意だけして歩き出す。

「この町はスリが多いから気をつけてね」

「しよーなの？」

「馬鹿にしてるかしら？」

「ぶつかってくる奴は危険だから、殴ればいいんだろ」

「アンタの方が危険だわー！」

何かおかしいことを言ったのだろうか、と思ったけどちよつとおかしいかもしれなかった。

割合的にバーサーカーが多いから思考がバーサーカーよりなのだろうか。

いや、前からこんな感じだったわ。

まるで海外に来た外国人旅行者のごとく警戒しながら狭い道を進んでいく。進軍されないためとからしいけど、入り組んで狭いから人とぶつかりまくる。

中世なのにウンコが道端に落ちてないのはフアンタジーだからだろう。

実際の中世は窓からウンコ投げてたらしいからな。

「あつ、秘薬屋あるじゃん。こっちに行こうぜ」

「武器屋はすぐそこよ」

「魔術師としては武器より触媒が欲しい」

深いため息のあと、ピエモンさんの秘薬屋つとところで買い物をし、そして武器屋に向かうのだった。

武器屋に入ったら、まずはナイフをいくつか物色する。投げるのが一番手っ取り早いからな、護身用には丁度いい。

正直、戦闘は宝具使うので武器はいらない、護身用だけでいい。

「おや、貴族のだん——」

「これください」

「ちよ、決めるの早っ!？」

ルイズは驚くが、俺の中でチャートは出来上がっているので当然である。

「あん——」

「この喋る剣もください」

「おでえれ——」

「そうだよ使い手だよ。このボロいのがいい」

「そんなボロボロなの……ちよつと、言う前に返答しないで! つていうか、言われると思ってるならそんなボロボロなのやめなさいよ」

「お前は金貨一〇〇枚って言う」

「お客さん。それが欲しいならエキューー金貨100枚くらいで……ハッ!?」
原作知識を使って、滅茶苦茶遊ぶのだった。

犯人はマチルダ

「インストロール
夢幻召喚」

帰ってきて早々にやったのは神殿作りである。

この学校を作った奴は知っていたのか、それとも都合良く偶然だったのか霊地としてはそれなりの土地であり、神殿を作るのには適していた。

「周囲は石で囲まれているのが望ましい。穴を掘るか」

パラケルススの知識が分かるのか、魔術の使い方から何まで難なくこなせていた。

それこそ、通常なら操ることも出来ないエレメントを絶妙な力加減で操ったりである。

庭先の地面が勝手に捲れ上がるように移動したのは土のエレメントの仕業であった。

勝手に風呂とか召喚されたサイトが作つたので、大丈夫だ問題ない。

後は勝手に手頃な地下室ができあがるというわけだった。

「悪霊とか放っておくとルイズが勝手に入ってきたときに危ないか。まあ、たいした物とかないし適当で良いな」

それこそ、士郎の家のように侵入者がいるのが分かる程度にして色々と作業する。

材料はたくさんあるし錬金術も出来る、他にも呪術を使った礼装作りとか忙しい。

手始めに、腕を切断してみるか。水の秘薬つてのをくすねたし、パラケルススの力があれば粗悪品でも余裕だ。

「エレメントつて、この世界の魔法に似ているな」

秘薬を併用すれば腕を生やせる程度、差し詰めスクウェアレベルだろうか。

じゃあ、エーテルは虚無ってことかな。

虚無すら使えるって、やっぱり英霊ってすげえわ。

自分の腕を分解して、色々と弄くり回していたら、天井からポロポロと砂が落ちてきた。

定期的に、ドシンドシンと揺れが続き砂が落ちるのは収まりそうにない。

誰かが上で騒いでいるのだろうか。

「面倒だな」

重い腰を上げて、工房を通り越して神殿レベルの秘密基地から這い出して外に出る。すると、目の前に巨大なゴーレムがおり、何度も学校を殴っていた。

「ああ、剣買ったから今日だったか」

そう納得した直後、ゴーレムの右腕当たりが爆発し学校の壁とゴーレムの腕が破壊される。

「デツカイ穴が開き、ああルイズがやらかしたと把握した。さて、容易いことだが捕まえるかどうか。」

「捕まえなかつたら……なんだかんだで出世するな、ルイズが。」

「よし、今回は見逃すでしょう戦略的な意味でだ。」

「俺の出世のために見逃してやろう」

その後、材料を使ってある薬を夜通し制作するのだった。

朝、徹夜明けであくびをしながらルイズの元に来た。

なんでも、臨時休校にして会議をしている教員達に呼ばれたらしい。

目撃者だから話が聞きたいって理由だそうだ。

「どこで何してたのよ」

「秘薬作り」

「秘薬！アンタ、そんな高価な物が作れるの」

「なんのための材料だと思っただよ」

「四属性すべてのスクウェアレベルであるパラケルススに死角はなかった。」

「流石アベレージワンである。虚無？知らない子ですね。」

「会議している場に入ると、入ってきた俺たちを一瞥しただけで大人達はやんのやんの」

言い争っていた。

「他の者達はどうしていたのですか!？」

「当直は誰だ!」

「体調不良でして」

「良い訳だ!そもそも、ちゃんと見ていたのか!」

そんな場所に、じいさんが遅れてやってくる。

たぶん、コイツが校長。魔法学校の校長はだいたい白い長いひげだから。

「言い争いをしていても仕方なからう。儂らも強盗に入る輩なんぞ想定していなかった。儂ら全員の落ち度じゃろ」

「ですがオールド・オスマン!」

「幸いフーケの顔を間近で見た者がおる。ミス・ヴァリエール達に話を聞いてからでも遅くはあるまい」

ルイズ達に視線が向かい、それに答える形で知っていることを答える。

デカかったこととか犯人はローブを着た男とか言っていた。

そんな俺達の所に慌てた様子で女性が入ってきた。

マチルダだ、犯人のマチルダである。

「おお、ミス・ロングビル。何処に行っておったのじゃ。実は少々厄介な事がおこつての

う」

「はい、フーケの事でしたら私も聞き及んでおります。それで、先ほどまで調査をしていたのですが……」

「調査ですと。もしや何か新しい情報を掴めたのですかな？」

「そうですわ。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこのとおり。すぐに壁にフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早いのに、ミス・ロングビル」

髭を撫でながら校長のオスマンが褒め称える。

うーん、わざとか？それとも本当に分かっているのか？

サイト達がいないと逃げられたりする状況になることだから分かってなさそうだな。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居所がわかりました」

その言葉に、一同が沸き立つ。

そしてミス・ロングビルの説明によると、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を仕事に出っていた農民が見たらしい。

「そこは近いのかね？」

「はい、およそ半日です」

「よろしい。では、誰に行ってもらおうか」

「ちよつといいですか」

俺は手を上げて、その言葉に待ったを掛けた。

何だね君は、なんて制止の声も聞こえるが無視である。

「俺の質問に答えろ」

「……はい？」

「やはり、ダメか」

軽く俺は目を通してミス・ロングビルに暗示を掛けたが失敗した。

やはり、半人前ということだからかそれとも相手の実力が高いからか。

「マチルダ、この名前に聞き覚えは？」

「……知らない名前ですね」

「動揺してもダメか、やつぱりこれの出番だろう」

そう言つて、俺は懐から薬瓶を取り出した。

流石に、さつきから何やつてるんだという雰囲気、咳払いを一つして校長が質問して

きた。

「ミス・ヴァリエールの使い魔君。その薬は、いったい何なのかね?」

「真実薬だ。もつとも模造品で嘘が吐けなくなる程度だがな」

「そんな物を取り出して、何をしようと思うのかね?」

「その女、俺がフーケだと疑っているミス・ロングビルに飲んでもらう」

俺の発言にフーケだと、何を馬鹿など周囲がざわめき立つ。

流石にルイズもヤバいと思ったのか、俺の服を引っ張って抗議する。

「アンタ、何したいのよ! すいません、オールド・オスマン」

「邪魔をするな。質問に正直に答えるだけだ、問題ないだろ?」

「お断りします。その効果が本当かどうか、疑わしいですから」

ハッ、爪が甘かったなと言わんばかりにミス・ロングビルが断ってきた。

むむむ、やりおるわ。

しかし、犯人は秘書で間違いないのでここはどうにかしたいのだがな。

「よし、ルイズこれを飲め」

「はあ!?!」

「抵抗されて壊されても良いように予備はあるからな」

「ちよ、嫌に決まってフガガガ!?!」

よしよし、飲んだな。

じゃあ何を聞こうかな、うーん。

「コルベールはハゲじゃないと思ってる」

「ハゲに決まってるでしょ！ああ、違うんです！先生、私はハゲだと思ってますけど、なんで!?先生がハゲって言いたいのにハゲって言うてる！」

「失敬な！これは剃っているのだ！」

いやいや、それは嘘だろと一同の視線が集まる。

うむ、嘘を吐こうとしても吐けないだろう。

「さあ、飲むんだ」

「く、口裏を合わせたとしか思えませんわ。ええ、私を陥れようとしているのでしょ」

「ミス・ロングビル？」

「気分が悪いですね。こんな屈辱な思いをしたのは初めてです！こんな所にいられるか！」

怒った振りをして、逃げだそうとするミス・ロングビルに俺は薬を投げつけた。

すまない、経口摂取じゃなくてもいいんだこれ。

「何するんだクソガキ！」

「そつちが素だな、さあ白状しろフーケ！」

「私はフーケじゃないよ、マチルダオブサウスゴータだ……よ……貴様ツ！」

すべての嘘が暴かれた結果、取り繕った口調も偽名も白日の下に晒される。

どういふことだと、ここに来てても状況が分かっていない奴らの前で彼女は早かった。

「クソツタレが！」

「待て！」

窓に向かって彼女は走って行き、そのまま外に向かって飛び降りたのだ。

慌てて窓に近づけば、地面を杖で柔らかくしたのか難なく着地したミス・ロングビルが泥だらけで逃走していた。

「奴を捕らえるんじゃ！本当に、フーケじゃった！」

「なんだって、誰が行くというのだ！」

「こういうときこそ、オールドオスマンが」

「またやってるのか。無能どもめ」

こういう展開があるから、普通は一緒に回収までしに行つてから捕まえるのか。

俺は自分の失策を反省して、窓から飛び降りた。

残念だったな、身体強化した魔術師からは逃げられない。

「なっ、化け物か!?!」

「とおう！」

「ふぎじゃ!?!」

走っていたミス・ロングビルに向かって飛び込み、そのまま両足を掴んだ。結果、彼女は顔面から地面に転ぶ。痛そうである。

「クソが、離しな！」

「黒か、大人だな」

「ツ！コイツ、殺す！」

杖を取り出したところで、俺は腕力のみだけで彼女を放り投げた。強化された腕力に出来ないことはないのだ。

「キャット!?」

「杖を使う前に肉弾戦が出来ないとは、それでも魔術師か」

「そんな野蛮なのがメイジな訳ないでしょ！」

「オラア！」

このあと腹パンして、連行した。

ちちう……誰だ貴様、ロイヤルビッチか!

見事ルイズが捕まえたということでシユヴァリエの爵位を貰えることとなった。

ルイズはいらないと拒否しそうになったが、俺の代わりに貰ってくれと説得(暗示)によつて諦めて貰ってくれた。

それから数日が経過した。俺はルイズと会うのは夜だけにして、基本的に工房に籠もっていた。

兄貴達は退屈そうだが、俺はパラケルススとデルフリンガーを研究していたからだ。

「内包する神秘に関しては古いだけあって申し分ないな」

『魂に関して、造形の深い者が関わったのか』

「偽装、念話、吸収、操作、憑依、よく分からない物が一つ」

『素晴らしい。事象を否定する、これは即ち無の否定に他ならない。おそらく、死者の蘇生に関わる物でしょう』

失われ、魂が無いという状態を否定し、魂があるとして蘇らせるということが出来る
とのことだった。

俺には複雑すぎて分からなかったが、パラケルススは理解できたのだろう。

デルフリンガーを作った人は、相当な奴のようだ。

「さて、憑依とか試してみるか」

『そうですね、中身もあれば良いですが外側だけでも恐ろしいほどの神秘を含んでますから』

俺はデルフリンガーを鞘から出してやる、コイツ鞘の中だと喋れねえからな。

『おでれーた、使い手が入り込んで来やがるんだからな』

「解析してる間は感覚があるのか」

『ったくよお……だが、確かにオイラはそんなことも出来たと思いついた。そうだったそうだった』

「さっそくだが、こっちの鎧に憑依してみてくれ」

『無理だ。構造が複雑だと、時間が掛かっちゃう。もつと分かりやすい、剣とかにしてくれ』

「その点は問題ない」

結界の中で時間を加速させ続けるなんてことは、造作もないことである。

むしろ戻す方が難しいレベルだ。

ちゃんと説明して、無理そうなら元の状態になることを条件に憑依してもらった。

ギーシュが作ったみたいだな、鎧人形にデルフリンガーが入れば魔法を吸収しながら

ずっと動き続ける彷徨う鎧が出来るはずである。

時間の方は数十倍にもしているが、一日で終わるわけもないので放置する。

複雑だと意識を表層に出すのが大変みたいなことを言っていたので、できるまで時間かかるだろう。

「さて、そろそろ帰るか。一か月も経たないうちに色々ありすぎだろ」

「まあ、そういう運命ということでしょう」

「心臓に悪いな」

背後から声があったと思えば、そこにはフルーツを片手に食べる子ギルの姿があった。

地下室でソファーに座ってる姿は、大人バージョンを思い出させる。

それにしても、いつのまにいたんだよ気配遮断スキルを持ってたとしても驚かないレベルで気付かなかった。

「何かご用ですかね、正直無理難題で首とか吊りたくないんですけど」

「新しいヒントを上げようと思ってるね。ヒントは女性だよ、あと今夜は面白い者と出会えるはずさ」

「面白い者?」

「愚かしい小娘だよ。王を詐称する道化、いや周囲に対して省みないのは暴君の資質か」

「……ああ、大体誰か分かりました」

ずっと地下室に籠ってたから気付かなかったけど、ロイヤルビッチが来てるのだろうか。

いや、イベントを持ってくるキャラとしては完璧だよ。コイツならやりかねない、そう思わせる下地を作りあげてる訳だからな。キャラ設定が上手いってことだ。

でも現実で考えると、ヤバい地雷なんだよな。

「取りあえず、ヤバそうなときに飲んでください」

「なんですこれ？」

「お薬です。回復薬出しときますねえ」

子ギルに薬瓶とお言葉を頂いた俺はルイズの元に向かった。

使い魔を見せるとかそういうイベントがあつたはずだが、なかつたのは俺がサボつたからだろうか。

場所は教えているので呼びにくるはずだから、それはないのだろう。

部屋の前まで行くと、ギーシュがコソコソと扉の前でしていた。

「オラア！」

「うげえ!!」

「きやあああああ!!」

コソコソするギーシュを蹴り飛ばすと、勢いのままギーシュは部屋へ雪崩れ込む。

そのせいで、ルイズから絹を裂くような悲鳴が聞こえた。

「ギーシュ!? 何してんのアンタ」

「ご主人、夜這いをしようとした奴を捕まえたぞ」

「ま、待ってくれ誤解だ!」

「犯人はいつだつてそういうことを言うのだ」

「し、信じてくれ! ルイズ、君から彼を止めてくれ」

「……本当に誤解なの?」

「疑ってるのか! そんな、そんなに僕が信用できないのかい!」

「決まってるでしょ」

吐き捨てるようにそう言われ、見下すような視線が送られる。

君、女遊びしすぎじゃないか。

そんな様子をキョトンとした顔で見っていた女の子が、こつちを見てニコツとした。

「ゴフツ!」

「きやあああああ!」

『ますたあ?』

こ、こいつはクセエ! 地雷臭がポンプンするぜ!

「だ、大丈夫ですか! これでも水のメイジです、治療を——」

「ガハツ!？」

『ダメですよお』

く、来るな！俺の傍に近寄るんじゃない！

「どうしましょう、さあ此方に」

「グハア!？」

「出血が止まりませんわ、きつと何か大きな病気をしているに違いありません」

や、やめろ……治療を上回る速度で焼かれるから傍に来ないでくれ。

正直、ケガより酸欠で頭痛くなってきたから来んなマジで！

「だ、大丈夫かい？」

「奴を止めてくれ」

「何を言ってるんだい？」

セ、セイバーが俺を殺しに来る、違うこいつはセイバーではない。

ヤバイ錯乱してきたぞ、そうだこういう時こそあの時貰った薬を飲まなくては……
ふう、すごい全快した。

「もう大丈夫です、だから近くに寄らないでください」

「あら、何故でしょう」

「横のギーシュがあなたを襲います」

「襲わないよー！」

何とか収まったが、それにしてもルイズといるとき以上に反応してくるとか清姫のセ
ンサー的な何かに引っ掛かったのか。

恐るべし、誰が呼んだか知らないがロイヤルビッチ。

「そ、そそそんなことより！ギーシュ、どこから聞いてたのよ！縛り首になるわよ！」

「えっと、その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せください！」

「な、なに言ってるのよー！」

「まあ、グラモンとはもしやグラモン元帥の、それは心強いですわ」

まるで取って付けたような理由だが、この不幸な姫の身を案じるとは立派な貴族です
わと華麗にスルーされた。

お、恐ろしい。笑顔で学生を死地に送ったぞ、この女。

「ところで何の話なんだ」

「そっか、アンタ途中からだったから聞いてないのね。姫様がそう仰るならギーシュは
いいけど、事情も知らずに連れてかれるのは可哀想だから説明するわ」

そのあとの事は、彼氏に送ったメールが見られると今度結婚する相手にヤバイから消
してきて、あつ戦場で危険だけど極秘だからルイズ達だけでどうにかして、私つてば不
幸だから貴方しか頼れないの、という話を聞かされた。

うん、ふざけんなよ！どう話を整理しても頭おかしいだろ！アニメだったら、そのなかで流してたけど現実で考えるとやべえな！

『アイツと同じタイプの子だぜコイツわ』

「兄貴が誰を思い浮かべてるかなんとなく分かった」

本当、女王って碌なのいないな。

というわけで、俺達はトリステインからアルピオンに行くことが決行した。

確か、この後にルイズの婚約者が来て、王子とあつて、晩餐会で喋って、結婚式でバトったと記憶している。

取りあえず、あとで敵になるからこつそり髭は殺そう。

「……違うな」

「はい？」

首を傾げる姫様を見ながら、転生者じゃないと判断した。

トリステイン貴族で女か、ルイズの縁者とかじゃないだろうな。

大分絞られたが、モブとかだと違いとか分かんないんだがな。

見てからリスキル余裕でした。

「起動せよ、デルフリンガー！」

「いや、とつくのとうに動いてるだろうが」

ガシーンガシーンと動く全身鎧、その背には赤いマントが、その右手には赤い槍が、その左手には赤い盾が装備されていた。

もちろん、カラーリングは赤、鎧は赤である。

錬金と素材と骨董品による神秘で製造した礼装の塊である。

「飛び道具を無効にするマント、鯨の骨から作った投げたら戻るゲイボルグもどき、触れると反発する盾。取りあえず急造だが作ってみた」

「ああ、ぼくのかんがえたさいきょうのデルフリンガーとか言いながら作ってたな」
「負けられると困るからな」

ルイズの側にいるため、髭を殺すタイミングがないかもしれない。

アサシンが手に入れば、話は違っていただろうがな。

なので、俺がルイズとアルビオンに行く間にデルフリンガーに戦って貰おうという算段だ。

「大丈夫、当社比で三倍は早いから。赤いから早い」

「どこ調べだよ」

「だからその早さで瞬殺してくれ」

地下室から出て、ルイズ達の元に向かうとなんかモグラがルイズを襲っていた。

そつとしておこう、人の趣味はそれぞれだしな。

「なに見てんのよ！ご主人様を助けなさいよ、ひゃん！だ、だめ！」

「おお、ヴェルダンデ……いいぞ、もつとやれ！」

「ギーシュ、覚えてなさいよ！」

ギーシュ、その趣味は中々業が深いぞ。

そのとき、不思議なことが起こった。

いや、普通に風と吹き飛ばされただけなんだけどね。

「誰だ!？」

「失礼、僕の婚約者が襲われていたようだったのでね」

気障ったらしく前髪をファサつとする髭が、グリフォンに乗って下りてきた。

噂に名高い、ロリコンである。

「僕はワルド、女王陛下の魔法衛士隊グリフォン隊の隊長をさせて頂いてる。姫殿下の

命によって君達を守らせてもらおう。よろしく頼むよ」

「ソースは？女王陛下の命令ってソースは？」

「ソース？」

「おま、実は裏切つててアルビオンで色々やろうとかしてないだろうな！本当に、命令されたのか？」

「……極秘任務ゆえ形に残すことは出来ない。僕の言葉を信じて貰うしか無い」

一瞬、俺の方を睨み付けるように見たのはヤバいと思つたからだろうか。

コイツ何を知つてゐるって思わせるの楽しすぎ、全部である。

さて、煽るだけ煽つたがルイズの追撃が来て普通に着いてくることになった。

「さあ、行こうかルイズ」

「でも、みんなが」

「何、ゆつくり飛ぶさ」

ワルドはグリフオンにルイズを乗せながら飛び立った。

さて、俺も行くとするか。

「ちよつと待て、いつの間に着替えたんだ。というか、なんでスカート……」

「仕様だ」

「あと、その馬？馬って言うか鳥、もしかしてペガサスなのか？」

「仕様だ」

行くぜ、ベルレフオーン！

『乗り物扱い、どうして私だけ』

「ブークスクス、グリフォンとか遅いつすね」

「なっ、ハイヤ！」

「で、ちよつと早くなつたからって何です？早さが足らんなあ」

「ねえ、なんでスカートなの？」

「仕様だ！」

スカートは女子だけじゃねえから、伝統的な服だから！

細かいことは気にするんじゃねえよ！

グリフォンとペガサスのデッドヒートの後、港町であるラ・ロシエールの入り口付近に着いた。

サクサク進んでいくが、確か襲撃があつたはずである。

「敵襲だ！」

「なっ、どうやら野盗のようだ」

「見てもいないのに判断できるとは天才か」

「……これでも風のスクウェアだからね。耳には自信があるんだ」
お、おう。

だから、何だというのだろうか。

野盗が矢などを打ってきており、どうやら崖の上にいることが分かった。
崖ごと攻撃しようか……んっ、アレはなんだ？

「ド、ドラゴーン！」

「なんでこんな所に！」

グレネードみたいな呼びかけと同時に、野盗の慌てる声がある。

あれ、あのドラゴンなんか見たことあるぞ。

「おーい、みんなー、おーい！」

「ねえ、あれって」

「ギーシュだな」

ドラゴンに乗ったギーシュが此方に手を振っていた。

その後ろには、タバサとキュルケがいる。

「な、なんでアンタ達！」

「みんなが先に行くから乗せて貰ったんだ」

「……成り行き」

「面白そうだったからタバサに頼んだのよ」

ふーむ、まあアニメでも来ていたし修正力って奴なのだろうか。

まあ時間も夕方から夜になったし、良い頃合いだろう。

俺達は宿に泊まることになった。

「なあルイズ、なんで泊まったりするんだ？」

「アルビオンまでは船で行くの。グリフォンじゃ、距離がありすぎて飛び続けられないわ」

「ああ、だから今は待つしか無いんだ」

「ペガサスで行けるけど」

「えっ？」

「えっ？」

「い、いや、それは空賊が出ると聞いたから危ないだろう。だからグリフォンで行こうと思わなかったんだ。本気を出せば僕のグリフォンだってアルビオンまでいけるからね」
何故か張り合ってきたワルドを一瞥して、デルフリンガーはいつ来るんだと思案する。

どうせまた呼び寄せて、半数が目的地に辿り着けば良いとか言うのである。

翌日、人が寝ているのにワルドが何やら言っていたがシカトして寝た。

夕方になり、飲もうぜとギーシュが起こしに来てようやく起床する。

ルイズはなんかソワソワしてるが、なんかあったのだろう知らんけど。

「……伏せて」

タバサが小さな声で言葉を発した瞬間、宿が爆発した。

否、爆発と見間違えほどの勢いで壁が吹き飛んだのだ。

「な、何だ!？」

「これ、フーケのゴーレム!」

俺達の前に巨大な土の拳があった。

それは、土塊の人形の拳だ。

「大変だ。このままではマズい、二手に分かれよう」

「そんな、あんなのに勝てる訳がないじゃないですか!」

「すまない、これも女王陛下のためだ。私とルイズでアルビオンに向かう、君たちはすまないが足止めを頼む。半数が辿り着けば君達の犠牲は無駄にはならない」

ワルドはきつと裏で計画通り、そう思っていただろう。

「ここまでは、上手くいっていた。」

「きやああああ!?!」

「なんだ、ゴーレムが崩れていくぞ!」

フーケらしき女の悲鳴が聞こえ、ゴーレムが崩れ落ちる。そして、砂埃が当たりに立ちこめ、黒い影が見えた。

「な、なんだあれは！」

「人よ、人影だわ！」

ガシャンガシャン、と足音を鳴らして赤い鎧を着た騎士が現れた。

「邪魔すんじゃないよ！」

フーケが呪文を唱えたのだろう。

だが、その呪文によって発生した巨大な土の手は、鎧に触れた瞬間に土へと戻る。

「魔法が」

「……………」

鎧騎士が、無言で槍を投げれば野盗の群れが串刺しにされる。

そして、槍は手元に戻りその血を地面に滴らせた。

「どういうことだ、どうなってる！」

「まあこの状況になるまえから、どういうことってなってたけどな」

フーケが不利を察して逃げようとするのを一瞥して、鎧騎士は俺達に槍を向けた。

「どうやら、私達を助けてくれた訳じゃなさそうね」

「……………空洞」

「えっ? どういうこと、タバサ」

「中に誰もいない」

タバサの発言にキュルケが戸惑う。

その隙に、ワルドはルイズを連れて裏口から逃げ出した。

「やべっ、お前から任せた」

「ふう、やれやれ。ここは足止めしようじゃ無いか。僕達は置いて、先に……もういいい」

「無駄口禁止」

「そよぎーシユ、集中しなさい!」

逃げ出したワルドを追いつつ、宝具だけを限定展開する。

そこには、厳かな装飾の弓矢があった。

「使い魔君う——」

急に、背後の離れた場所に気配が発生した。

だが俺は玄人、玄人は慌てない。

「——しろ、だ……えっ?」

「うっ……馬鹿な」

仮面を付けた男が矢に貫かれ、崩れ落ちる。

偏在だったからか、途中で消えやがった。

「どうした、笑えよワルド」

「き、君が無事でよかったよ」

引き攣る笑顔のワルドと、俺達は棧橋から船に乗り込んだ。

アゾット剣には気を付けろ

無事に船まで辿り着いた俺達は二手に分かれた。

ガソリンが足りないよ、的な感じで風石代わりに使われてるワルド、俺とルイズの二人で分かれた形だ。

お互いに部屋を借りて過ごしている。

使い魔だけど、別々の部屋なのはもしかしたらワルドに見られて恥ずかしい的な事をルイズが思ってたかもしれない。

言ってなかったが、ワルドはお前のことが好きなんじゃ無くてお前の力が目的だぞ。

まあ、言わないけどな。

「て、敵襲！」

「な、何だって—!?!」

船員の声に俺が反応した。

どうやら、船の方に空賊が襲いかかかってるらしい。ルイズと一緒に、取りあえずどうするか話し合う。

えっ、こうなったら戦うしか無い。

お前、無茶苦茶だな。

停戦命令です、仕方ない受け入れよう、なんて会話をしている船員達によつて戦おうとする俺達は関係なく止まった船。

慌てた様子でワルドがやってきた。

「大変だ、空賊が襲いかかったらしい」

「知ってる。よし、戦うぞ」

「えっ!？」

「ルイズだつてやる気満々だ」

「い、いや危険だ！私は精神力が足りないし、船員が人質に取られる可能性だつてある」

「うるせえ！役立たずが！」

理由の無い暴力がワルドを襲う。

今のお前なんか怖くないんじやボケエ！

ついでにガンドを数発弱めに打ち込んで置いて放置した。

「な、何してんのアンタ！」

「敗北主義者はいらぬ。それよりルイズ、敵は空賊じゃ無いぞ。足音が訓練された兵隊のそれだ。敵はゲリラだ、特殊訓練を受けたゲリラだ！」

「本当に何を言ってるの、ああワルド様しつかり」

やめてやれ、死ぬほど疲れてる。

そんなやりとりをしていると、俺達の元にドアを蹴破ってオツサンが入ってきた。

「空賊だ！邪魔するぞ」

「知ってるよ、邪魔するなら帰って」

「なんでだよ！」

取りあえず、腕からのガンド連打、相手は吹っ飛んで気絶して風邪を引く。

「どういうことなの、人が吹っ飛んで」

「細かいことは気にしてはいけない、いいね」

「あつ、ハイ」

騒音に釣られて他の奴らが集まってくる。

その誰もが杖を携帯しており、空賊ではないと分かった。

もはや、メイジであることは明白である。

「随分と派手になってくれたなあ。だが、ここは空の上でだけ。いつまでも優位に立てるとは思わないことだ」

「ふ、ふん！私はトリスティンの大使よ！アンタ達こそ、いつまでも優位に立っていられるとは思わないでちょうだい！」

「大使だと？お嬢ちゃん……アンタ王党派か、それとも貴族派か？返答次第じゃ——」

「王党派よ！文句あんの！」

ルイズの物言いに、周囲が固まる。

流石のワルドも結末を知らないから顔面蒼白である。

俺は結末を知ってるから安心して居るが、震えながら啖呵切るルイズの度胸には驚かされる物がある。

「ふっ、あははははは」

「な、なにがおかしいのよ！」

「いやなに、随分と誇り高いと思つてなあ。自己紹介がまだだつたなあ」

ビリビリと髭が外れていく。

それから、バンダナや変装していた物らしきものを外すと青年が立っていた。

「アルビオン王国皇子、ウエールズ・テューダーだ。さあ、これで名前を教えて頂けるかな、誇り高き大使のお嬢さん？」

「お、皇子……」

「しかし、証明する手立ては……おや、その指輪。そうか、アンリエッタ……」

王子が指を近付けると、ちっちゃい虹が出来る。

「水と風は虹を作り出すんだ。これで、私が皇子だつて分かつたかな」

「こ、これはその……今までの非礼を」

「問題ないさ、アレは私の方にも落ち度があったさ」

アルビオンの立地上、兵量攻めには滅法弱い。

故に、補給線を絶つたために空賊のフリをしていた、なんて説明を受けた。

「手紙は城にあるんだ。だから、城まで行かないと手に入らない」

そういう皇子に従って、城まで行った俺達は無事に手紙を回収。

その後、宣戦布告に伴い最後の晚餐をやるからパーティーに出てくれなんて言われたが、俺は従わなかった。

『マスター』

「ああ、すごいパワーを感じる」

アルビオンは風石によって浮いているからか、地下にエネルギーが大量に蓄えられていた。

それこそ、エレメントを使うパラケルススなどより顕著に感じるほどだ。

「これ、使っちゃダメかな？なんかすごい武器とか作れそう」

『この島が落ちますよ』

「どうせ滅びるしいいんじゃないだろうか。バルスしろよ、バルス」

城のベランダでそんなことを呟いていると、パーティーを抜け出してきたルイズがやってきた。

「何してんだ？」

「アンタこそ……」

そこからは会話のない無言が続く。

余りの静けさに、後ろの方から談笑するオッサン達の声が聞こえるくらいだ。

「どうして……どうして彼らはあんなにも笑っていられるの」

『革命する側にも大義があり、干渉してはいけないとは分かっています。でも、国が滅ぶのを認めることはしたくないですね』

それは、俺に話しかけた訳ではなさそうだった。

どちらかというと、口から零れてしまったような物だった。

「助けて、あげたいのか？」

「当たり前よ！それがどういいう理由や流れであろうと、目の前で起きる理不尽な死を受け入れられる訳がないじゃない！」

「そうか、分かった」

俺はちゃんと事情を知っている。

これが圧制に苦しむ民の起こしたものではなく、貴族が共和制を強いるために王族を廃し聖地を奪回しようとするものだ。

だから、マシユが思っているような物ではない。

それでも、どちらにも傷付いてほしくないマシユは見過ごすことも味方することも悩んでいる。

「えっ?」

「勘違いするな、別にお前の為じゃないからな」

ルイズと別れるように離れた俺は、途中でワルドとすれ違う。

結局、ワルドを始末することは出来なかつたので原作のようになってしまったのかもしれない。

だが、悲劇を見逃すほど俺は甘くない。

少なくとも、それがマシユを傷付けるなら取り除かないとダメだ。

「インク限定展開!」

「がっ……な、何を……」

「裏切者には死んでもらう」

ジワリと、ワルドのシャツが血に染まっていく。

俺の背後から刺したアゾット剣が、心臓を貫いたからだ。

「何をしているんだ!」

「動くな! コイツはレコンキスタと通じている、裏切り者だ!」

何を馬鹿など信じられない様子の子の者達が、杖を取り出して構えだす。

まあ、事情も知らなければそうだろうな。

「ルイズ……助けてくれ……」

「死にぞこないが」

「やめなさい！」

周囲では人の壁が形成されていた。

血塗れのワルドに俺、その二人を囲むように皆が杖を構えていたからだ。

「どうしてこんなことを……」

「お前や皇子が傷付くと悲しむ奴がいるからだ」

「彼を捕らえよ、そしてワルド子爵の治療を！」

王の命令に、全員が動き始めた瞬間に俺はワルドを抱えてベランダから外に飛び降りた。

悪いが、ここで終わるつもりはない。

「クソが……」

「うるせえ」

唸るワルドを放り投げ、俺はペガサスを限定展開する。

この高さだ、ワルドも死んだことだろう。

城から出た俺は城下町の一角に逃げ果せた。

「いるんですよね」

「やあ」

俺の呼びかけに、背後から金の粒子が集まり子ギルが現れる。

俺が助けを必要とする、それすらお見通しだと思つたとおりだ。

「力を貸してください」

「君がそうお願いすることは分かっていたよ。まあ、大人の僕ほど狭量じゃないので貸してあげてもいいですよ。なんだかんだで、ここでの生活は楽しかったですし」

そう言つて、子ギルの姿は消え一枚のカードだけが宿の一室に残っていた。

明日、俺はやってくるレコンキスタを迎え撃つ。

そして、その功績を持つて今日のワルドの件は帳消ししてもらおう。